

361
470



始



特 232
414



有樂會
旅行誌

東京府農工銀行有樂會編



序

我農工銀行に有樂會と云ふがある。行員がお互に精神的融和を圖り且つ物質的にも慰藉しあふことを目的としてゐる。此の會は例年春秋二回一泊二泊程度の旅行をなしてゐたが年々のこととて最早行く先きもなくなつたと云ふ。それでは今年は大に奮發して思切つた大旅行をさせて多年の勞をねぎらおうと企てた。行員諸君は踊躍して喜んだ。即ち全員を七班に分ち日曜を除いて五日間で往復し得る限り何處に行くとも任意であるとした。旅費に限度のあることは云ふまでもなからう。かくて第一班は七月二十八日出發し、第二班は八月三十一日に歸着した。私は各班長が快言欣語を以てする報告を聞く毎に嬉しかつた。それで私は此等の印象を何時までも保存する爲め各自の紀行文を蒐集して一本となすべきことを慫慂してゐたところ本日暫く出來上つたと云ふ。就てみるに各班の旅姿眼前に見るが如く、各員驩喜の情更に新に迫り來るが

如くである。實によい記念である。仍つて乞に應じ本書の由來を誌して序とする。

昭和九年十一月三十日

東京府農工銀行に於て

鈴木茂兵衛

目次

北九州廻遊第一班旅行日誌	加地克太郎
長崎より雲仙まで	中村毅元
熊本紀行	一槐堤信雄
阿蘇	後藤基光
別府にて	如猿高原俊勝
北海道駆けある記	前田正之
南紀州を廻はる	高桑利基
南紀の印象	佐々木辰次郎
繩 族(短歌)	町田岐元
十和田湖紀行	寺師秋夫
北九州を廻りて	阿部善一郎
瀬戸内海沿岸周遊記録	宮本彬
信越温泉旅行記	田中勇
以上	佐久間常夫

北九州廻遊第一班旅行日誌

序文

益々複雑繁多になつて行く都會生活者にとつて、殊に吾々の如き精神的勞働者にとつて、旅行は何にも増して心の慰みとなるものである。本當に心を落付かせる事のない實生活から逃れて自然の中に入りこめばそれ丈で、もう人の心は新鮮な刺戟に蘇つてくるのを感じるものである。此潑刺としたる蘇生氣分を味ふ丈でも旅行は十分に喜ばれる價值をもつてゐる。まして未知のものを、はじめて探る喜びや自分丈の氣持を樂々と味ふ事の出来る氣分は又得も言はれぬ快味を持つものである。さるにつけ一たび勤め人として實社會に足をふみ入れた時に於て我々サラリーマンは、既に長期長途の旅行から享受しうる慾望の満足といふものから遙かに遠のかしめられるのが普通であり、又自身左様に諦めて來てゐたのである。それが此度圖らずも銀行有史以來の劃期的企てに依つて、吾々勤め人の誰しもが渴仰して止まざりし願望を如實に充足せしめられるに至つたのである。吾々全行員は今回の此催しを企て下されたる重役御一同様に對し、衷心から感謝と喜びの意を表する次第であります。

出發前

此歴史的企てのトップを承る名譽ある先發隊としての吾々北九州廻遊團第一班は左記十三名から成り立つ。

- 班長 鑑定課 吉村慎一
- 貸付課 中村毅、中村美、上村林、
- 償還課 加地堤、井上、後藤、高原、
- 預金課 岡田
- 出納課 名取
- 小松川支店 丸山
- 會計係 上村堤、
- 記録係 加地

日程は七月廿八日東京發八月三日東京着の七日間であつてそのコースは左の通りである。

自昭和九年七月廿八日有樂會北九州廻遊時刻豫定表

28 後 〇、四 東京發櫻(特急) 29 前 八、三 下關着

" 八、五 同 發連絡船
 " 九、五 門司着
 " 九、四〇 同 發急行
 " 二、〇八 博多着博多見物
 後 一、四 同 發
 " 七、三 長崎着長崎泊
 30 前 九、二五 同 發
 " 一〇、八 諫早着
 " 一〇、一〇 同 發
 " 一〇、四 愛野村着島原線
 " 一〇、三 同 發雲仙線
 " 一、三 雲仙小濱着
 同 發五十分自動車

雲仙公園着
 同 發
 島原湊着 一時間自動車
 後 四、四〇 同 發
 " 六、一〇 三角着
 " 六、四 同 發
 " 七、三 熊本着熊本泊
 31 前 九、二五 同 發
 " 一〇、五 坊中着阿蘇見物
 後 四、一〇 同 發
 " 六、五 大分着
 " 七、〇 同 發
 " 七、三 別府着

終日	別府泊	別府發(水路)
2 前 九、四	別府發	2 前 一、四
" 二、四	中津着	" 八、〇
" 二、五〇	同發	" 八、五
後 〇、四	羅漢寺着 耶馬溪見物	3 " 四、四〇
" 五、四	同發	別府發
" 六、〇	中津着	2 前 二、四
" 六、八	同發	3 " 八、五
" 七、五	門司着	" 九、四
		後 八、五
		東京着
		大阪港着
		大阪商船航路
		大阪發急行

これは最初發表せられたるものとは大部コース上に變更を來たしてゐるが、我等の班には九州人が三人もゐる事としてこれらの人々の意見を尊重して、最良のものだといふ確信のもとに編成せられたるものである。我々が第一回出發隊として七月廿八日東京をたつてもいいといふ事が決定したのが五日前の廿四日の正午近くであつた。此時直ちに庶務課長より東京驛の特急櫻の寢臺券の問合せをして頂い

た所全部午前中に既に賣切との事であつた。吾々はまづここに第一班であるがための貴重なる體驗上の失敗をなめさされたのである。兎に角元氣潑瀾たる吾々は寢臺なしで長崎まで、ぶつ飛ばす覺悟をきめてゐた所庶務課長のお骨折によつて、廿六日に至りビューローで寢臺を五個丈都合つけてくれる事となつたのである。これで班長はまづゆつくり寢て行つて頂ける様になつたので安心した。

旅え出て心配な事の一つは旅館の事である。そこでまずビューローでクーポンに依る旅館券を全コースを通じて買求める事にした。切符は割引九州遊覽券が鐵道省で發賣せられてゐるので、それを買求めた。これで費用の大部分は東京を立つ前に支出してしまつたから會計を預る人はあとの豫算がはつきりについて大變にやりいと思ふ。

斯くて吾々の出發準備は完了した所で愈々出發の前日たる廿七日、先發隊の一行十三名は銀行三階會議室に集合、支配人より左の通り今回の團體旅行の企てられたる趣旨及び色々と旅行中の心得に關し御懇切なる訓話があつた。其大要は左の通りである。

「今回團體旅行を催す事になつた趣旨は平素の諸君の功勞に報ゆるためである。可愛い子には旅をさせといふ諺の通り此旅行に依て、大いに見聞を擴るめ、智識を高めると同時に團體生活をなす事に

依りて親睦をはかり、お互が我を仰えて圓滿に心の疏通をはかる美德を養ふ事、一、成る可く支給額の範囲内で旅行をなし來たる事各自が餘分の金を使ふといふ事は本來の趣旨にもとるものであるといふ事、一、旅行中は團體的精神を以て同一行動をとる事一心同體となりお互に犠牲的精神を示せ、一、飲食物には特に注意すべし、一、既定コースを必ず遂行する事」等々其他種々と御懇切なる行先き先きの旅行上の注意ありて了る。

斯くて待ちに待たれし我等の出發の日は遂に來たのである。

七月廿八日 土曜日 晴天 (第一日)

早晝を食つて特に正十二時銀行を出發するの便宜を與へられた吾等一同は、重役並に各課長に挨拶をなして銀行を出で午後零時四十五分東京驛發の特急櫻に乗込む。照るでなし曇るでなし有樂會には珍らしい上々の天氣である。

暑中休暇で歸省する人が多いのであらう列車は満員だ。五個の寢臺は班長の一つを除いた四個を抽籤できめる事にした。班長と此籤にあたつた中村毅、林、後藤、岡田の諸君は二號車へ雲がくれしてしまつて四號車に残つたものは八人である。列車が東京を少し離れ出した頃我等一同は直ちに浴衣着に

着かえる。吉村さん丈が着換がないらしい。長途の然かも眞夏の旅には矢張りシャツもぬぎすてて浴衣着にくつろぐのが一番樂である様だ。横濱につく頃誰いふともなしに咽喉がかわき出したので、アイスクリームを買ふ事にした勿論あみだである。

東京を出て初めて、あつた難關は昔も今も變らぬ箱根である。國府津で電氣機關車が取はずされたためにトンネル又トンネルの箱根山中に列車が差しかかるや、窓を全部しめきる事を餘儀なくせしめられた時の蒸し暑いこと、まるで土耳其風呂にはいつた様だ。苦しかつたのはここ丈である。走つてゐる限りは汽車の旅は存外涼しい。濱松を過ぐる頃濱名湖の景勝を眺め乍ら一同食堂車にいらして夕飯をとる。腹のすいてゐたせいでもあるのか、食事をとつたあとは一同急に元氣づいた様だ。名古屋についた頃から漸く日が暮れ初める。丁度七時十分前である列車が大津驛を離れた時そろ／＼寢臺が戀しくなり又寢臺にいる連中が羨しくもなつて來たので一寸のぞきに行く。何でも寢臺專屬のボーイに握らせば寢臺の一つや二つ位必ず都合のつくものであるといふ人の話に、ためしに二圓丈ボーイに握らせて是非二つ都合つけて呉れる様に頼んだ所、早速注文通り二つ都合して來て呉れた。此手で又京都をすぐる頃頼みこんだ所これもオー・ケーである。勿論希望者のみが寢臺車え引越すことにした

私も寢臺にありつけた者の一人である。神戸をすぎた時今一つ都合がついたので結局これで寢臺九人普通車四人となる。寢臺券が全部賣切だといふ發賣驛の貼出しも何のこともない。列車に乗込んでしまえば幾らでも都合のつくらしい裏には裏のあるのにあきれる。姫路をすぐる頃は全く夜のとばりも打ちおろされて吾等の行程第一日の夜は車中に、横たえた身體を運んで西え西え。

廿九日 日曜日 晴天 (第二日)

徳山あたりで漸く眼をさます。仲々にいゝ旅行日和である。一同頗る元氣だ此調子だと満洲まで行つても平氣だと意氣けんこう。三田尻附近の海の眺めを鑑賞し乍ら一同食堂車にがんばる。午前八時卅五分下關着。こゝで特に目立つのは朝鮮人の非常に多い事だ構内からすぐ連絡船に乗れる。此あたりは要塞地帯であるから寫眞機には注意をうける。直ぐ發航して約十五分で門司港に着いたこゝでも構内からすぐ急行車え連絡出來ていて仲々に便利である。九州線の汽車は嘸東海道線の汽車とは比べものにはなるまいと思つていた所存外である。ラヂオが備えつけられてある丈九州線の方が寧ろ氣がきいている位だ。

團體の旅にあれしば朗かに

笑ひはしやぐよ子供ヤの如くに

(中村毅)

午前九時四十五分の急行長崎行にて門司を立つ。愈々これから九州路にはいつたのである。海岸すたいに走る車中の眺望は非常によい。小倉をすぎれば日明海水浴場といふのがある。一杯の人出だ初めて夏氣分だなあと感じる。沿道驚いたのは八幡製鐵所の大きい事だ列車が幾ら走つても仲々に工場はつきない。幾ら威張られてもこれ程規模の大きい工場を他に見出す事は恐らく出來ないであらう。八幡の次ぎに急行車は折尾といふ所に停車する。ひよつと氣がつくと後部列車の方から人たすね氣キにせつせと歩いてくる人がある。よく見れば庶務の村田壽衛夫さんではないか夢ではないのだらうか。全く吾等にとつては突然でもあり、想像だにせなかつた事である。何でも奥さんの父君が、なくなられて歸省中との事であつて、今こゝに態々吾々のために食料品をさげて訪れて来て下さつたのである。旅の御空の吾々にとつて一人の親切味となつかしみとがつくづくと味われてならない。このあたりから段々海岸を遠ざかつて行く。九州え来て誰にも目立つものは稻のそだちの非常に悪い事である。苗の高さは精々四、五寸であらう既に黄色くかれはじめている所すら諸々に見受られる。車中土地の人の話によると九州地方一帯は近年稀にみる旱天續きにて至る所雨乞ひの迷信は行はれ、殊に實彈演習を

行ふ時は必ず雨をみるといふ昔からの言ひならはしに従ふて、通常八・九月の候に行はれるものを特に各縣知事より各師團への懇請により特に、七月下旬九州縣下一齋に實彈演習を施行してもらつたそうだ。その結果この三四日前に初めて降雨があり只鹿兒島地方丈が未だに降雨がないので、これも軍艦のはいる時は必ず雨がふるといふ迷信に従ひ、目下官崎縣下に寄港中の練習艦隊に向つて知事より來港方を申請中との事である。

汽車は約一時間半で博多驛につく。時に午前十一時だ驛前の九軌食堂にはいり今日は土用の丑の日だからとて一同鰻井を食つて大いに元氣を養ふ。こゝに荷物を預けて自動車二臺に分乗箱崎宮に至る。東公園には日蓮上人の大銅像が嚴然と大宇宙を睥睨せるかの如く聳え立てるあり。此前で一同記念寫眞をとる。

國を思ふ聖のすがた仰ぎ見よ

博多の空も今日ぞ晴れける

非常時に日蓮の像昭乎たり

(堤)

(上村)

これより大濠公園西公園福岡城博多銀座の稱ある中州などを見物して約一時間すぎに再び九軌食堂

に歸へりつく。食堂につゞいて賣店がある我々はここで博多人形を買求めて東京へ荷造りさせて送らせる。こゝの名産は博多織博多人形二輪加煎餅等々である。午後一時四十七分博多發長崎行の普通列車に乗込む。昨日に比べて今日は非常に暑い日だ。太陽は容赦なくかんかん吾等の頭上に照りつく。殊に列車は一つ残らずこの驛にも停車するので、そのまどろくさい事筆致の限りではない。東京をたつて以來車中暑くてつらいなあとしみじみと味はされたのは恐らく此長崎迄の列車の中だけであつたであらう。特に暑い日盛りではあり、まるでうだる思ひだ。此間約五時間半である。列車が博多を動き出した時中村美君がビール箱を吾等の席へ運んで來た。博多にある親戚の人からの贈りものなのだそうだ。勿論長崎につくまでにはすっかりなくなつてしまふ。佐賀をすぎれば吾々は白カラスの飛んでいるのに氣がつくであらう。これはカチカラスと呼ぶんであつて此地方特有の白黒まんだら模様の鳥なのである。斯くて長崎に着いたのは夜も漸くたれこめかけた午後七時半であつた。

驛頭には中村毅君の父君母堂それにミス・長崎の稱ある妹さん達が出迎へてゐて下された。直ちに出迎の宿の自動車で縣廳前福屋旅館に到着。つくや否や直ちに服をぬぎすてゝむさぼる様に風呂に飛び込んだ時の氣持の落ちくつろいだ事、何ともいゝ様がない程よかつた。夜の長崎の眺めは仲々にい

、けれ共有名な夕風でその暑いことお話にならない。夕食後音に名高き丸山に出掛けてこゝで班長殿より御馳走になる。クーポンではあつたが別に中村君の方の顔で宿のサービス振りは大變に良い。ワイシャツから靴下に至るまで全部宿の女中が洗濯してくれる、これでは着がえをもつてくる必要もない位だ。料理もこゝが一番よかつた。實はクーポン券なんか買つてこなくても私の方で、もつと安くて相當にいゝ宿えお世話が出来たんだつたのに惜しい事でしたとお父さんの言葉である。ここより第一信を銀行え出す。長崎の名産はカラスミ、カステラ、鼈甲、珊瑚、眞珠、金銀細工、海産物等々がある。

世日 月曜日 晴天 (第三日)

中村君のお宅から手土産を一同に戴く。午前九時自動車二臺に分乗中村君父君の案内で長崎市の名所舊跡をさぐる。吾國唯一の、且つては海外文化輸入の門戸であつた丈に、流石吾等の眼に映するものは舊都なれ共京都奈良とは自ら趣きを異にした、異國情緒顯著なりし往昔を偲び出すに充分なるものがある、まず天主堂に到る。ここは往時幕府より最も迫害を受けしものなりしが今日では國寶となつてゐる、嘸歴史はにこやかに笑つている事であろう。

崇福寺青き苔むすいらかの上に

過ぎし錦の跡惜しぞ思ふ

(堤)

天主堂今更ら國寶と笑つてる

(林)

江戸ツ子が無理して使ふバツテン語

(高原)

外國人相手の商店街を兩側にみながら崇福禪寺につく。ここは支那寺であつて矢張り國寶である。山内にいけば一峰門あり此兩側には「天空海濶無双地、虎伏龍歸不二門」とあり、護法堂鐘鼓樓等々吾々の眼にとつては珍らしき數々を拜觀して再び車上の人となる。蜀山人の

長崎の彦山やまの月はよかばい

こんげん月はえつとなかばい

の歌を以て有名な彦山や支那人によつて往時つくられたといふ不思議なメガネ橋等の由緒深い街街を見物し乍ら國幣中社諏訪神社に參拜する。この社殿は長崎全市を眼下に一目に見渡せられる景勝の地に所在する。ここより愈々中村君一家の人々の見送りを受け乍ら雲仙え一路自動車を走らせる事となる。長崎島原間の豫定コースはここで全然變更せられるに至つた。東京を出發前には輕便鐵道と自動

車に依て島原へ出る豫定であつたのが、當地へ来て中村君のお世話により非常に割安でハイヤー二臺



(雲仙地獄ニテ)

とは氣温が可成りに違つて、ひえびえとするのを感じられる。ここより第二信を銀行へ出す。目下雲

を借切る事が出来たのでここより島原までを自動車でぶつ飛ばす事にしたものである。輕便鐵道によるよりも遙に料金も安いのでこのコースはハイヤーを雇ふに限ると思ふ。流石上海よりの外人客のドライヴコース丈あつて道は存外によく、火見トンネルをすぐる頃よりスピードは益々加つて氣持よいこと限りない。途中東洋一の愛野發信所(諫早は受信所)を左に見、千石灣を右にみつゝ愈々急坂を上つて行く。橋灣をすぎれば左手に橋中佐のおられた部落がみえる。自動車は益々上つて寄場をすぐる頃には既に氣温の急に冷却せるに誰しも氣づかれるであろう。雲仙九州ホテルに着いたのは長崎を出てから約二時間後の十二時過であつた。ここに至れば下界

仙には六百人以上の外人客が滞在している由にて九州ホテル丈でも百人以上いるそうである。ここは



(九州ホテル食堂ニテ)

突然来たのでは晝食すらとる事が出来ないといふので、豫め中村君の方から交渉しておいてもらった。値段も特に勉強して下さつてあるはずである。

晝食の時上衣を着て食堂にはいつて下さいとホテルの人から注意されたのには一同困つた。何となれば上衣は何れもトランクの中につめこんでありそのトランクはがんに、うに自動車の後ろにしばりつけられてあつたからである。

特にたのんで別室で、でも涼しい部屋で食事をとる。

雲仙や暑さ忘れて午餐かな

(加地)

此あたりを雲仙地獄と呼び日中は白煙騰々と立てこもり夜遠くより見あぐれば噴火山の如く赤くみえるといふ。午後二時半ここを出發眺望のいいのは愈々これから島原に下る約一時間ばかりの間である。日本に初め

て出来たといふ大規模のゴルフ場を左に見乍ら雲仙岳を右や左に、俵石展望臺に着く。ここで一寸自動車ですて外へ出すればその眺望の壯且つ大にしてまるで一幅の繪の如きには、流石日本八景の一たる丈あるなあと驚嘆の聲を放たしむる。

繪の如し島あり舟あり波靜か

(中村毅)

有明の島を行き通ふ白帆かな

(加地)

島原についたのは午後三時半だ。四時四十分發の連絡船佐世保丸に乗つて三角に渡る。この約一時間半程の間の眺望のいい事が又えもいわれんばかりに素晴らしいのである。天氣はよし波は靜である。日覆のあるおかげで日光にも直接照らされずまるで瀬戸内海と松島の間を進んで行く様である。

噴煙かと、見まちがえたり入道雲

(加地)

松島と瀬戸を兼ねたる有明海

(中村毅)

三角發午後六時廿六分の列車で熊本に向ふここからは林君の繩張りだ。吾等はクーポン券で松乃井旅館を指定して来たのであるが、林君のお世話で笹屋といふ旅館に泊ることに急に變更したのである。ついでみると旅館は古くて林君自身も事の以外に驚いたらしい。でも宿泊料は飛切り安くてサーピス

振りも仲々にいい。斯うしてみるとクーポン券を買つてくるのがいいものか悪いものかの見當がつかなくなる。クーポンで宿泊券を買求めておけば宿の心配もなく、あとあとの豫算もはつきりつくといふわけではあるが、こうして長崎にしる熊本にしる其土地の人がおられるとすれば、その人に御迷惑をかけないといふ條件で豫め宿を交渉して頂ければ、クーポンによるよりも安く且つサーピスよく泊まれるものとすれば一寸考えものである。夕食後林君の家よりは非江津花壇から畫津湖え舟遊びに招待したいといふ招請をうける。一たび林君から此親切なるお言葉に接した時吉村班長以下一同緊急動議にはかつて、結局これはおうけしない方がよろしかろう。有樂會に先例を残す様な事となつては最も責任ある第一班としては重大なる過失を犯す事となるから、御好意丈は感謝して御辭退する事に決議したのである。然るに林君の方からは準備が萬端整つてしまつているし今更ことわるわけにもいからまあビールをのむ丈でいいから是非来てくれとの事に、數次の辭退もむなしく遂に折角御親切なる御招待をおうけする事としたり。熊本へ来て畫津湖の舟遊び以上の御馳走はないといふ、その水清らかに月光さゆる湖上に浮べて夜の更け行くのも忘れ異國の空に面白楽しく思ふ存分に遊ばせて頂いた事を林君に心から感謝する。

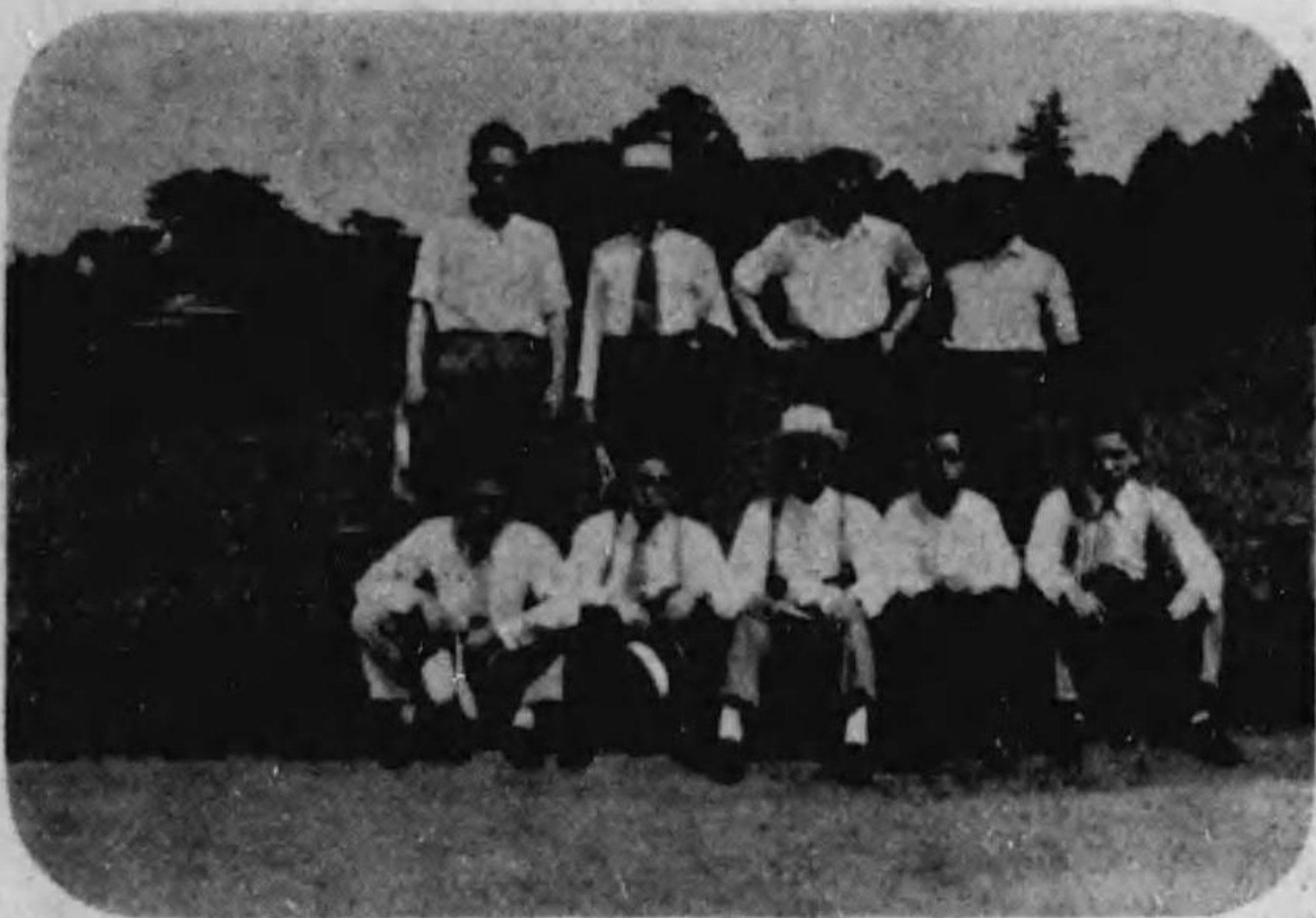
熊本も亦暑い所である、夜は夕風で特に暑い。洗濯物はここでも宿へつくと同時に全部宿屋の女中

さんに洗ってもらふ。第三信を銀行へ出す。

名産 肥後すゐき、各種飴類、柿球肥、天草雲丹、赤酒等々がある。

世一日 火曜日 晴天 (第四日)

今日も亦快晴だ眞夏である。昨今が熊本では一番暑い頂上だそう、八月十日もすぎれば涼風位立ちそめるであらうとの事だ。洗濯物がかわききらないので出発の時間が豫定よりおくれる。午前十時宿屋の主人の案内にて自動車に分乗熊本市中の名所舊跡見物へと出掛ける。まず水前寺公園に至れば流石は細川侯の別邸なりし丈に三公園に劣らぬ立派なものである。ここより車を驅つて本妙寺に着、南無妙法蓮華經を以



(水前寺 = テ)

て思ひ出す加藤清正公の悌を偲ぶ。

加藤神社を左に見ながら次いで熊本城に至る。三名城の一である

丈あつて仲々に堅固な築城だ。熊本全市を眼下一目に見下しつつ熊本驛へ向ふ。大阿蘇に上る可く熊



(阿蘇山上 = テ)

本を發したのは午後零時十五分だ。車中で晝食をとる。列車が外輪山近くの立野をすぎた頃から気温が急に激變して冷やか味をおびて來るのがはつきり感ぜられる。ここより大阿蘇火山帯にはいる峠越なんだ。汽車は或は右に或は左に山をうねり乍ら次第に頂上に近づく。外輪山をくぐれば愈々廣漠たる世にも珍らしい火山内の大盆地だ。三ヶ町十一村から成り人口五萬人のものが此中で主として農業に従事してゐるのである。勿論稻もつくれば豆類もとれる、外輪山には凋葉樹が多く盆地には針葉樹が多く見うけられる。

阿蘇登山口坊中驛についたの午後二時卅分である。ここから乗合自動車にて頂上に向ふ。車内には女車掌がいて一々丁寧に説明してくれる。芭蕉が作ったといふ歌までソプラノで仲々いい聲で歌つて聞かせてくれる、

サービス満点だ。段々山に上つて行くに従ひ愈々展開せられる大阿蘇山の眺望の雄大さ外輪山によつて圍われたる火山帯の大盆地の美しさ、恐らく今回の北九州旅行中第一の眺望であるであらう。根子岳、高岳、中岳、烏帽子岳、杵島岳、の五岳よりなる大阿蘇山は尙多數の死火山を有して、その規模の大なる日本の名火山であるばかりでなく、實に世界第一の名火山（複成式）であるといふもはばからないであらう。現在では西に雲仙東に別府を控え國立公園の中軸をなすものである。

車掌の話によれば今日は珍らしく見晴のよくきく日だといふ。さもありません西方遠く有明灣がみえ雲仙岳の空高く聳え立てるを望み、東には九州アルプスの稱ある九住山を眺め直徑六里の外輪山と共にその眺望の廣大且つ壯絶なる他にその比類を求めえないであらう。此美しき外輪山内の盆地には阿蘇神社あり、栃木湯の島其他の温泉場もあれば京都帝國大學火山研究所などもあるそうだ。頂上近くに草千里ヶ原といふ所がある、ここには珍しい牛馬の放牧がありキャンプ村もみえる。吾々が今たどりつきつつあるのは目下盛に火煙を噴出しつつある中岳だ。四五日前に一寸爆發したそうであるが惜しい事をした。山上神社前で自動車をおりる。ここから噴火口まで約十町だそうだ。その途中は全て火山岩であり火山灰を以ておほわれている。山頂に至れば火煙騰々と立のぼりて火口は絶壁削るが如く

のぞくも氣味悪い。自動車乗り場へ歸つてくる迄約五十分大忙ぎで坊中に下りて午後四時十五分發の列車で別府に向ふ。此間の汽車が又恐らく日本一であるであらう程にのろい。それ丈に暑さも身にこたえる。別府に着いたのは午後十時卅五分差まわしの自動車にて直ちにクーボン指定旅館高砂屋に到る。夕飯後夜の別府を散歩する。ウツカリするとたもとの袖位はもぎとられるからとの注意をうけて一同要小心よろしく見物して宿に歸へり、明日よりの日程上の相談にとりかかる。此土地は非常に人の悪い所だそうである自動車をたのむにつけ何彼につけて番頭の間搾取のひどい所だそうである。幸い預金課岡田君の友人が別府におられるので明日の地獄めぐり其他の自動車の交渉を御迷惑ではあるがたのむことにした。番頭の言ひ値と大部開きのあるのに驚かされた。例に依つて洗濯物丈は全部たのみこむ。第四信を銀行へ出す。

名産 地獄染、諸染物、文且漬、縫針、湯の花等々。

八月一日 水曜日 晴天(第五日)

私達一行はここで二班に別れる。一つは陸路に依つて既定コースに従ひ宮島大阪等に立寄つて歸へるものと、他の一つはもう一晚當地に滞在二日別府發瀬戸内海の風光を鑑賞しつつ海路大阪を経て歸

京するものとである。午前九時兎に角一同は貸切自動車にて別府地獄巡りに出掛ける。天下の樂園と稱せられる別府に地獄とは奇異な感じをいだかせるが、此地獄は浄土の隣の地獄ではなく地下から絶えず水蒸氣を噴出し又は熱湯を沸湧する個所である。その有名なものに鶴見地獄、坊主地獄、海地獄、かまど地獄、血の海地獄等々がある。とりわけて血の海地獄と海地獄の物凄さと凄惨さとは先づ見るものを驚嘆せしむるに充分なるものがあるであらう。是等の地獄見物をするのには一つ一つ見料をとられる。何でも「地獄の沙汰も金次第」といふわけでもあるまいに。車中案内ガールが別府小唄を歌つてくれる、いとも風情のあるものだ。一旦宿に歸へり浴衣をぬぎすてて洋服に着換午前十一時十分の列車に乗込んで宇佐八幡に向ふ。約四十分の後宇佐驛に着、ここより軽便に乗換えて八幡驛に達する。此八幡様の祭神は譽田別尊（應仁天皇）、比賣大神、大帯姫命の三柱を祀り和氣清麿の古事を以て有名な八幡様である。八幡驛につけば町が非常に賑やかである。驛前の茶店にはいつて手荷物を預け乍ら様子を聞いて見ると今日は一年一回のお祭りの日だとの事だ。當地では今日尙古來からの、しりつめりの慣習が實行されているようで、七月卅一日の夜即ち昨夜はしりをつめるのを合圖に誰でも關係が出来るのだそうである。勿論これは土地の結婚風習の一つであらう、左様な話を聞き乍ら山内に

上つて行く。この本殿は八幡造りで國寶となつてゐる丈に仲々立派なものである。歸途はハイヤーにて宇佐驛に出で中津驛に着いたのは三時すぎであつた。値段を交渉した所軽便にのるよりも自動車の方が安いとのこと吾等は驛を出てハイヤーを雇ふ事にした。特に案内ガールが乗車してくれて一説明してくれる。中津の町外れからそろ／＼耶馬の溪流に沿ふて走るのである。耶馬溪はそも／＼北九州の名山英彦山にその源を發し一、本耶馬溪 二、羅漢寺耶馬溪 三、奥耶馬溪 四、東耶馬溪 五、葛美溪 六、深耶馬溪 七、麗し谷 八、裏耶馬溪 九、南耶馬溪 十、椎屋耶馬溪の十溪から成りたつてゐるものであつて、此全部を通觀せねば耶馬溪の眞價は知る事が出来ないそうである。今吾等の行かんとせる所はこの中の一つ羅漢寺溪である。耶馬溪なるものが天下の名勝地となつたのは頼山陽が「之を海内第一と云ふも或は誣ひざるなり」と言つて以來の事であつて今日九州に足をふみ入れるもの必ず一度は訪れる所とはなつたのである。

途中菊池寛の「恩讐の彼方」や或は此劇化又は映畫化により或は國定教科書に依て有名な青ノ洞門がある。これは禪海上人なる人が三十年間獨力を以て掘鑿したる長さ百二間の洞門である。此物語は誰しもよく知れる有名なる話であるから略する。此洞門の上に聳え立てる數十丈の奇峰を競秀峰と呼

びその奇巖と雜渾なる輪廓とは畫致にとめる景勝である。右に溪流を左に集塊岩の双壁を眺め乍ら自動車は更に奥深く疾走して羅漢寺溪につく。二王門より道は三つに別れて、正門を二王門といひ本道である。右は裏路にして左は最も急坂な然し最も眺めのよい岩涯づたいの道であつて、先年秩父宮殿下もここを御登り遊ばされたとのことである。私達は此急坂をよじ登つて行く事にした。靴などではウツカリすると足をふみすべらしそうだ。鐵の鎖りなどに縋る所もあり、あぶない事限りが無い。然し景色が佳いので此道を選ぶ人が非常に多いそうである。指月庵より見おろし見渡す景色のいい事一幅の繪卷の様だ。頂上の無漏窟に至れば五百羅漢が安置せられてある。いと奇觀といふべし。本堂にて少し汗をいれこれより本道につたひて山を下る。此あたり老杉參差として名こそ本道といえ小道づたいにおりる何れが道か何れが道でないのか一向に區別がつかない。二王門附近まで下れば漸く石敷の道を見出す。羅漢寺下より再び自動車を驅つて中津驛についたのが午後六時だ。東京を出て雨をみたのはこの間の自動車の中に於てのほんの一二分間丈である。中津の町にはいつた時には又々暑い暑い太陽が空から顔をのぞいてゐた。

斯くて私達はこれから愈々、海路の者は別府泊りで明日の氣船に乗つて大阪に出るものと、ここよ

り陸路宮島、大阪を見物して歸京する者との二班にわかれるのである。吾々の日誌も同一行動を了つたここで筆をおく事とする。

陸路	八月一日	車中泊
	八月二日 木曜日 晴天 (第六日)	大阪泊
	八月三日 金曜日 晴天 (第七日)	東京着
海路	八月一日	別府泊
	八月二日 木曜日 晴天 (第六日)	汽船泊
	八月三日 金曜日 晴天 (第七日)	東京着

結論

今回の旅行で感じた事どもを書きならべてみよう。先づ第一に寢臺券である。私達は三度寢臺券を買求めて三度共驛では全部賣切だからとて買そこねたのである。然かも列車に乗つてから三度共寢臺車にのる事が出来得た。幾ら驛で寢臺車が満員だからとことわられても、三四人位だと必ず心配なしに寢臺券を列車につてから手にいれる事の出来るものだといふ確信を得た次第である。今度の經驗

で一人當り五十錢のチップを寢臺車專屬のボーイに握らせばそれで充分である。それから何時もの事ではあるが手荷物は出来る丈尠く小さくしたい事である。それがためには幾ら眞夏だからとて着換は澤山にもつて行く必要はない。我々が實行して來た事ではあるが行き先きの宿に着いたらすぐにYシャツから靴下に至る迄女中に洗濯させる事である。暑い時ではあり翌朝出發する迄にはアイロンもかけてくれるし立派にかわいてしまつてゐる。斯うすれば雨の時の用意に着換は一枚宛もあれば充分であり手荷物は小さくてすむわけである。次に長途の旅には浴衣とスリツパを用意したい事である。一番疲れを感じるのは足を樂にするかしないかに依つてきまる。その足に窮屈なズボンをはいてゐるのでは少しも樂が出来ないわけである。車中シャツもぬぎすてて浴衣着にきかえた気分は又格別にいいものである。又常備藥の携行をも忘れてはならない。吾々は途中是等を色々必要とした次第である。行く先き先きでの土産物はそこから小荷物として自分の家を送りとどかせる様にすれば何時も手輕であられていい。此場合銀行宛に送らせる様にした方が、心理作用で送り人の方でごまかしが出来ないもの様だといふ支配人の話に従ひ、吾等一同は大抵銀行へ送り届けさせる様にした。

私達は旅館はクーボン券を東京で買求めて出掛けたのであるが、團體旅行の場合若し其土地に知人

でもあり、その人がどこかの旅館を知つておられる時、豫めその人の手から旅館に交渉しておいて頂くといい様な事にしたら、最も經濟的に泊る事が出来然かも宿の取扱も大變にその方がいい様である。但しその人に多少でも迷惑をかける様な事があつてはならないけれ共。クーボン券は行く先き先きに斯る知人がないか又は小人數で行く場合は非常に便利だと思ふ。けれ共大體にクーボンによるものはサービスは悪い様である。又今回の様に割引九州遊覽券は省線區間は幾ら乗つても九州線内ならばロハですむとはいふものの、私線を利用せねばならない所の多かつた旅行に於て、五人もおれば自動車を利用する事の方が安くて早い所が随分にあつたから注意を要する。

最後に我が第一班は今回の此劃期的企てのトップを承つた丈に、あらゆる點で非常に束縛をうけてゐる様な感であり、模範的行動をなさねばならないといふ重大なる責任を負わされて來たのであつた。幸い連日文字通りの好天氣に恵まれ一名の落伍者も出す事なしに我等の一行は、大變に愉快に楽しく長途の旅を和氣霽々裏に完了しましたる事は、一つに班長殿の指導よろしきを得たと共に一同がよく團體的精神を以て一心同體となり、最も紳士的に御行動下されし賜と共共に慶祝すると共に、我々の旅行が大成功であつたといふ事を大いに高唱する次第であります。一たび勤め人として、實社會

に出ましたる以上時間的に最も拘束をうくる吾等サラリーマンにとつて、斯る長期長途の旅行の出来えまして見聞をひろめ智識をたかめましたる事を、一同は非常に喜んでおりますと同時に重役御一同様に對し厚く厚く御禮申上ぐる次第であります。

希くば今後共出來うべくんば毎年斯る有益なる催しを御繼續なし下さらん事を重ねて御切願申上て筆をおく事と致します。

加地克太郎記

尙同行者一同の各自各地別紀行文を是に併せて御紹介致します。

中 村 毅

長崎より雲仙まで

福岡を簡單に見物した我々一行は再び疲れた體を持てあましたながら車上の人となつた。

夕陽を受けて夕風の車中は中々暑いが團體の旅行である。自分一人で旅行するよりも所謂群衆心理で不様な格好が出来るので樂だ。

鳥栖を過ぎ佐賀に近くなる頃より「ハゼノ木」の多いのが眼につく、畦のあちこちは「ハゼノ木」の林だ、佐賀を過ぎて未だこの「ハゼノ木」が続く、日本でも有名な所だ相だ。

佐賀を過ぎ武雄と云ふ處がある九州では相當名

の賣れた温泉である。

武雄を過ぎ有田だ、有田は彼の有名な有田焼の産地である、質の密にして光澤あるを以て昔よりその製品の悦れたもので周知の事であらう。

早岐近くなると海軍々人の乗り降りが見立つて多くなる、早岐は佐世保軍港行の線の分れる所だからである、早岐を過ぎ暫くすると波靜かに、水清く、島々の間に白帆が見える、即ち大村灣。暑さに疲れ切つた我々に一服の清涼劑である、瀬戸内海より規模こそ小さいが、變化が多く眺めにあきない。

大村諫早を過ぎ、愈本日の目的地長崎に近づく、長崎は筆者の搖籃の地である、いざ一行を案内し、一行にいゝ感じを與へ様と胸のときめくを覚え、

今迄の疲れもなくなり緊張して来る、云ふ迄もなく人口二十四萬九千工業都市福岡に次ぐ九州第二の海港都市である、車を降りて直ちに氣が附くが、彦山、烽火山、金比羅山、裏は稻佐岳と諸山が目前にさしせまり、何處に町があるのかと思はれる位である、旅館より差し廻しの自動車に分乗し直ちに旅館へ、三十有時間を汽車に身を托し思へば遠く來つるかな。

一風呂あびて、一行は皆元氣だ、長崎料理と江戸でも聞くが、流石に美味だと一行に賞られ、嬉しい限である、簡単に夕食を終へて班長吉村氏の御馳走で、長崎の丸山か、丸山の長崎かと云ふ程有名な丸山へ行く、途中道が小高くなり、低くな

り、一行は奇異な眼で見えてゐる、所により石を敷きつめた道がある、明治時代の舗装道路である、この上を人力車の鐵の輪がガタ／＼走つてゐて、それで、舗装道路だ文化の開けた處は成程道がぬかるみにならぬと威張つてゐたのだから面白い、江戸の銀座とも云ふ可き「濱の町」を経て、思案橋を渡り、丸山に入る、往時の華かさこそ無けれ、銀座張りにネオンを輝し賑かである、一料亭に上り飲む程に歌ふ程に時間のたつのも分らない、今流行の長崎小唄長崎音頭と美妓が繰返し歌つては呉れたが、疲れた體に酔つた頭には覚えきれぬものぢやない。

肥前長崎丸山華魁業

阿彌陀さんも異人さんも右ひだり
鶴の枕で寝て白む

アラ耶穌寺の鐘ソラ歸りやんせ

と粹に歌つてゐた、程よく御馳走になつた一行は三々五々打つれて丸山を味ひに行く、時間がなく、案内する事も出来なかつたが、丸山には天保時代歐洲の砲術を研究し、門弟の多くを指導したる我國砲術界の先驅者高島秋帆の史蹟がある。

東京出發以來初めて足を長々と延して寝たのであるが、先を急ぐ旅であれば朝寝も出来ず長崎市内見物にと出掛ける、雲仙への自動車が十時頃だと云ふので見物の時間は唯の二時間位しかない。二時間の見物では一行に見て貰ひたい名所も舊跡

も見盡くせるものぢやない、仕方がないから代表的な處を二三個所廻る事にした。

波止場近くの河に場所柄必要とも思へない頑強な橋がかゝつてゐる。明治三十七、八年日露戦争の時急造した鐵橋だ相で、名を出師橋と云ふ。明治時代の鐵橋として有名である。先づ、大浦の天主堂に行く、長崎港出島(地名)の直ぐ上にあり、慶應元年異教徒として切支丹信者二十六人死刑に處せられたるを、元治元年その靈を祀る爲め建てられたもので、二十六聖人記念堂とも稱へられる相である、兎に角日本最古の天主堂として目下國寶に指定されてある。

『天主堂今更國寶と笑つてる』

と皮肉つた人があつた。

成程石段は磨滅し、傾いてゐる、右側に「アマ」の住居であらう、今でこそ驚きもしないが、當時は立派な文化式の洋館であつたのだらう、二階造りの廊下には四五尺の飾のある「テスリ」が附いてゐる、門衛の許を得て、天主堂の中に這入つた、若き女の人二、三人頭より白き布をかぶり脆づいて、靜かに聖書を読んでゐる、光が五色の玻璃を通して來る、思はず、敬虔な氣分に打たれる、堂を一廻りして石段を降りる。港は一望の中にある。向側は稻佐(地名)で、三菱造船所がある、ガントリークレーンがあり、ドックがある、長崎市は三菱造船所で持つと云はれる程に、此處からは工場の

雑音こそ聞えないが、廣い地域に渡る一大工場である。

天主堂附近一帶は所謂異人屋敷區域で學校も活水女學校、鎮西學院、海星中學、東山學院等皆ミツションスクールである、有名な歌劇「マダムバツターフライ」のお蝶さんも此の邊にピンカートンと愛を巢をかまへてゐたのだらう。

同じく天主堂に浦上天主堂がある、これこそ貧しい農民の教徒が出資しつゝ其の竣成に二十年もかゝつたと云ふ日本最大のカトリック天主堂である、時間の都合で見物に出掛けられなかつたのが残念ではあつたが唯外觀だけは汽車の上から遠望し説明して置いた、切支丹の長崎にはこの外に數

多い歴史のある天主堂があるが、時間の都合もあり略似た様なものであるから省く事にした。

次に支那寺、崇福寺に趣いた。寛永六年支那福建省から渡來した超然、超元等の開創したものである。入口の門からして奇妙な形をしてゐる、昔物語に出る龍宮の門にそつくりの形で朱塗りである、其他寺に附屬する壁から柱から全くの朱塗りである、これが支那式なんだらう。本堂、三門、鐘鼓樓其他國寶だ相で釋迦牟尼如來の人相が奈良京都で見ると全然異つてゐるのが面白い。又提灯の細い竹の辛棒が横に圓く輪を作らず縦にピンと張つてゐるのも奇妙である、如何して灯を附けるのかと心配する人もある。この外福濟寺と云ふやはり

國寶の支那寺があるが大同小異であるから見物を略した。

ではより長崎全市を一目に見る市の産土神國幣中社諏訪神社に行く、途中市の中央を流るる中島川に架せられた石造の眼鏡橋を見る。長さ約五十米で、日本最古の大きな石橋だとて、現在國寶に指定されてある、一行に説明したが、別に珍らしがらぬ。文化の發達した今日何も珍らしがる事もないが、唯昔科學の幼稚な時代の建造物として當時は餘程珍重な橋だつたんだらう。

諏訪神社は相當大きな神社である、石段が二百段もあらうか、その二百段が途中で、四つ位に切れてゐる。疲れてゐる一行が登れるかと心配した

が、案外皆元氣である、市を足下に見降り眺望絶佳、對峙せる彦山の山の形がいゝ、蜀山人は此處で讀んだのだらうか、

彦山の山に出た月ほんによか

こんげん月はえつとなかばい

と、實に、市を圍繞せる丘陵の中腹に散在する人家の灯、彦山の松林から出る月、夜の景色を見せたいものだと思つた。

拜殿に至り一行の平安を祈り左折して港灣を一目に見る廣場に出た、港内には巨船眠れるが如く靜止し、水清らかに波はなし、港口に點在する島々、一幅の名畫である、歐洲人が東洋のナポリと稱へたるも首肯ける。此處の眺めは夕方にある、

夕靄全市にせまり、町の灯チラホラする頃、後の山の樹の茂に鳥の聲を聞き、町の天主堂の鐘が鳴り、港の船のボート汽笛を夢の如くに聞く邊り、必ずや旅人をノスタルヂヤに陥し入れずには置かないものである。

此處で長崎の見物は終へた。蘭醫學を輸入し我國醫學の恩人シーボルト氏住宅跡、出島和蘭屋敷、踏繪、唐八景等案内したい處は山々あるが、時間がない、今日一日で雲仙を超え、島原に下り、有明海を渡つて熊本に泊らうと云ふのだから己むを得ず、見物を切り上げた。餘りに短時間の御滞在で満足な案内も出来なかつたが、出發前支配人杉本氏の御注文以上に一行が打解けて愉快に御見物

下さつた事を皆様に改めて御禮申上げる次第である。

尙長崎獨特の有名な年中行事を二、三書いて御参考に供したいと思ふ。

鶴ノ港、黒船の長崎港内で六月上旬「ペーロン競漕」なるものがある、港に近接する各町村民が獨木舟の如き船に三十人から四十人乗り中央にて太鼓、銅羅で勇しい調子を囃子立て、競争するので、近年長崎人が集り江戸隅田川にて長崎懐しさの餘り舉行した相だが、やはり氣分が出ない相だ、支那式競漕で長崎獨特のものである、六月頃になれば、市内では子供が、太鼓銅羅の調子を口づさんで走り廻つてゐるから愉快である。

次に前記諏訪神社の祭である、故郷を出で、筆者は相當日本を廻つたが、この祭程、全市をあげ、統一的に行はれる祭は外にないと思ふ。この祭事は遠く寛永十一年頃より始められたと聞くが、その盛大さは毎年同じく決して衰微する事がない、六月一日に「小屋入」と稱し、この日より毎日河舟、コッコデショ、蛇船、蛇踊などの囃子及踊を祭の日十月九日迄練習する程の念入なものである。十月三日は「庭見せ」なるものが行はれる、祭の日に用ふる道具衣類を列べ庭を美しく手入れし、家毎に竹を立てダンダラの幕を張る、市民之を見物して歩く、之の行事は幕末禁教時代、家に基督教を信するものなし、竹の如く眞正に異教徒に非ら

ざる事を明かにすると云ふ故事より行はれたものだ相だ、祭は十月の八、九、十の三日間に行はれる。その盛観全市を揺し、諸官廳、銀行、學校は全部休むのであるが、ミツシヨンスクールのみが休まない、道具、衣類など想像も及ばぬ程金を掛けたもので、揃ひの衣裳換へ迄準備してやるのだからその絢爛さ諸彦の御想像に任すとしやう。

「ハタ揚げ」は三、四月の花見頃行はれる。紙鳶をあげるので、「ビードロ」と稱する硝子粉を糊でねつたものを糸にねりつけた獨特の糸を以て鳶をあげ、他の鳶の糸とからませ他のを切り飛ばす鳶合戦で、市を取り圍む山々に一定の日を限つて舉行されるが、老若男女、辨當に酒を持參の上朝か

ら夕方まで行ひ、數千枚の鳶は空を掩ふ盛大さで、中にはこの道樂に資産を傾けたと云ふ人もある位に熱中する。

次に孟蘭盆である、九州の盆の盛んな事は有名であるが特に長崎は支那式を入れ賑かに華かなもので、七月十三日から向ふ三日間は市を圍繞せる山々の中腹にある墓所に詣り、御馳走持參酒まで運び、提灯の下で夜更けまで、時間を過すのである。その提灯の數多きを以て、得意としてゐる。提灯で各家の紋を畫いたのも多々あるが、その費用など大したものだらう、市中到る所爆竹を鳴らし、矢火矢をあげ、騒々しいもので、三日目の夜十時頃より、陸續として精靈船が港目掛けて運ば

れて来る、その船の數は二千個を越える相だ、勿論一人で抱える様な小形の船ぢやない大きいものになると四十人位で擔ふのがある、船の帆さへ、昔は二十二反の帆を作つた所もあつたと聞いた。

愈々我等を乗せた自動車は料理美味の長崎、バツテンの長崎、江戸の仇を長崎で討つ長崎を後に一路雲仙へと向ふ、市を離れんとする處に市に水を供給する水源池の一つである中川水源池がある、村山貯水池の小規模のものであるが、堤防壁からしても年代のものである、往年文化輸入地として華かなりし頃得意の建造物の一つであつた。その貯水池の側をひた走りに走つてグン／＼坂を登つて行く、日見トンネルを通過すれば直ちに眼界

開け矢上村を足下に見降し續くは千々石灘である、本日



の目的地 雲仙も彷彿として 望の中に 村窺れる、 千々石村に 矢上村に 這入らんとする處 に東望の 濱がある

砂こまやかに海岸線長く水の清きを以て長崎市民

の海水浴場となつてゐる。

自動車は雑談に花咲かせてゐる我等におかまいなしにコンクリートの舗装道路を諫早へと走つて行く、炎天のコンクリートは焼付いてゐるのだから、車上は大して苦痛を感じない、諫早より右折して左方遙かに有明海を眺め愛野村を過ぎて急坂にさしかゝる。

頂上を越せば、目覚むるばかりの絶景、思はず快哉を叫ぶ、千々石灘である。千々石村は軍神橋中佐の出生地であるから橋灣の名稱がある、波靜かに、天氣快晴、銀波は遠く天草灘へ續く。左側の千々石村より小濱への海岸線の美しさ、宛ら一幅の盆景である。

車は温泉小濱を遠くに見つゝ雲仙へと輕捷を辿る、温泉小濱は地理の利さへあれば、相當流行る温泉である。橋中佐銅像下を通り愈々雲仙への急坂を登る、千々石灘の方面を換へて見る景色も亦面白い。長崎を出發したのが午前九時半頃であつた約二時間少して早雲仙へ着くのだから遠い様で近いものである、流石は海拔七二七米の山嶽である丈に、汗ばんだ頬をなでる風も冷い、道路の端を流れる溝が鑛泉で赤く色附いてゐる、是で雲仙が間近になつた事が判る、小さき丘が眞白く、頰げてゐる、異様な香がする、強い硫黄の香である、一週間も此處へ滞在しやうものなら銀製の持物は皆黒くなつて了ふ。

外人の子供が嬉々としてあちらにもこちらにも遊び戯れてゐる。正午近いので九州ホテルに入る。外國の婦人が椅子にかけて雑誌を讀んでゐる、麻雀をやつてゐる、編物をやつてゐる、日本人は全然見當らぬ。食堂に入らうとすると給仕が、外人が多いから上衣を着て呉れとの註文だ、或人は此處は日本ぢやないか、日本で日本流にするのに何の不都合があるかと憤慨する、又或人は否此處は國際避暑地だから外人の氣分を幾分でも傷なはない方が日本國家經濟上いゝぢやないかと辨解する、雲仙は斯の如く外人多く日本の避暑地か外國の避暑地か分らない程である、一小部落であるが、多い時には千人以上の外人が避暑に來てゐる相で

ある。實に酷暑の折八十度を水銀が昇る事は珍しいと云はれ、山嶽美と海洋美に恵れたる東洋第一の好避暑地ではある。地獄廻りを簡單にやらうと思つたが、別府で地獄は見物するからと云ふ人もあるし、疲勞もしてゐる事だから止めにした。が別府の地獄は壁を廻し、鐵條網を張つたりしてあるが、此處のは自然の儘だから、興味があり、自然に沸出す地獄を見物するのに入場料も拂はなく、いゝから氣持がいゝ。少くとも二三日は滞在して白雲の牧場に羊を追ひ白雲の池のスワンを眺め、ゴルフ場にて白球を飛ばせば日本八景と撰定され國立公園となつた所、以も判つて頂け様ものをと案内の地位に立つ筆者

は髀肉の歎を託つた次第である。

中食後附近を散策し自動車に乗り、ゴルフ場を左に見、島原へ降らんとす、ゴルフ場の向側に聳



え立つのが海拔一三五二米の普賢丘である、普賢丘頂上の鳩穴には眞夏にても天然氷が、岩に喰付いてゐる。ゴルフ場を後に數分走つたかと思ふ

四〇

時、天下の絶景俵石展望に着く、車を止むる事暫し、誰も再び車に乗らうともせず壯大な景色に見惚れてゐる、渺然たる有明海は鏡の如く、眞帆片

帆は興をそへ、雲かと迷ふ彼方に熊本、天草方面を望み阿蘇山に列らなる諸山を窺ふ、實に頼山陽が

(雲仙 = テ)

『雲か山か吳か越か』

水天髻髯青一髮』

と讀んだのも此處だらうかと想像される。

『天か地か海かと迷ふ遠望を』

眺めて涼し俵石臺』

『繪の如し島あり山あり波靜か』

と駄作が口からすべり出した、呵々。

飽かぬ眺めを惜しみつゝ時間に迫られて車上の

人となる、島原湊近く秩父ヶ浦とて景勝の地がある、見物の餘裕が無くて残念であつた、此の浦にて興を添ふ妙なる島嶼は背後の眉山が爆發したる時山が飛散して、形成したるものと聞く。

午後四時四十分船は島原湊を發す、東京出發以來初めての船の旅である、気分は又變るので、旅の疲労と睡眠不足の一行に誰一人として横になる者もなく

『松島と瀬戸を兼ねたる有明海』

の景色を賞てゐる。

愈々船は三角港に入り、三角より汽車にて今夜の宿泊地熊本へと向ふ。

筆者はペンのパトンを堤氏に渡して擱筆する。

拙文多謝

崎陽生

熊本紀行

一 槐

東京を出發して早や三日、我等は夕暗淡く銀杏城に立ちこむる頃あこがれの都熊本市に着いた。直ちに當地出身の林氏の斡旋で笹屋旅館に旅装を解き一風呂浴びて夕風に打たれたいと三階の欄干に出て見たけれども風といふものは薬にしたくもない、夕風である、昨夜は長崎でこの夕風に逢ひ

今日亦熊本でこれに逢ふ九州路の旅は赤い土と夕
風とを左右にして歩いてゐるやうものだとか誰か
呟いた。

遠くに見ゆる熊本城の森、近くに見えるネオン
の光盡くこれ熱い南國の感じである、夕食後一度
は我々が固辭したのではあるが是非にといはれて
林氏令兄の車に一行十三人身を委ねる。十五分、
二十分、二十五分車はひた走りに走つた相當の距
離を走つたなと思つてゐるとやがて車は止まつた
「こゝは熊本郊外畫津湖といひます、熱い熊本の
夏の夜はこゝで涼を取つて貰はねば他にはない
のです」

と林氏令兄の御挨拶に成程とうなづかれる。確か

に涼しい今まであんなに熱い／＼と呟いた一行も
涼風自ら起つて膚を通ふ感じは正に納涼三昧境で
あるといふ。こゝの畫津花壇といふ大規模な料亭
に一夜の宴を張つて我等の行を犒つて頂いたので
ある。夕靄立ちこめる畫津湖上に夜の帳を降し舟
を浮べて、涼風と美妓と冷たいビールに我等一行
陶酔境に浸つたこの夜こそ本當に九州路の旅の疲
れの一切を癒してくれたのである、こゝに林氏及
御令兄に深く感謝しておく。

明くれば七月三十一日、朝日は強い夏の光を熊
本全市に投げてゐる、今日こそ天下の熊本城、不
世出の英雄加藤清正公に接するの日だ。午前八時
三十分旅館を出發、水前寺公園に向ふ。

水前寺とは寺でなくして山水木石の雅致と、水
の朗かさとに天下にその名を知られた大庭園であ
る。

湧くからに流るゝからに春の水

かの文豪夏目漱石が五高に教鞭を執つてゐた頃讚
嘆の聲を惜しまなかつたこの庭園は成趣園と稱し
寛永九年加藤氏の後を襲つた細川忠利公が入國に
際し、隨伴し來つた耶馬溪羅漢寺の僧支宅の爲め
に建立した水前寺の境内であつたが後この寺を他
に移し茶道の名人菅野甚齋、古堀某に命じて作ら
しめたる細川藩主の別邸であつた。然し現在は一
般に公開せられて熊本民謡に「お寺もないのに水
前寺」と歌はれてゐる。

我等は車を捨て、森閑とした樹陰を縫い、快よ
い庭土と芝の香りを踏みしめながら、清流を渡り
小山を横切り一周した然もその清流の清淨さは何
に譬えん物もなしといひたい位だ。さもありなん
この清流には遠く阿蘇の外輪山の西部に擴がる一
大平野肥後臺地の下を潜つて來る伏流が澄みきつ
て園内各所から滾々と湧出してゐるからである。
我等は暫しこの人工の自然美——敢へてさういひ
たい——の中にたゞ一體となつてとけこみ、黙々
として水面を見守つた、やがて促されるまゝにこ
の名園をカメラに收めて再び車中の人となる。案
内人の談によればこの水前寺の清流が淀んで畫津
湖となり周圍約六軒、熊本人の納涼場となつてゐ

るとのこと、成程車も昨夜と同方向に走つてゐた

ことが分
つた。

我等は

砂塵の煙

ニを残して

北進又北

進・熊本

市街を縦

断して本

妙寺へ向

つた。

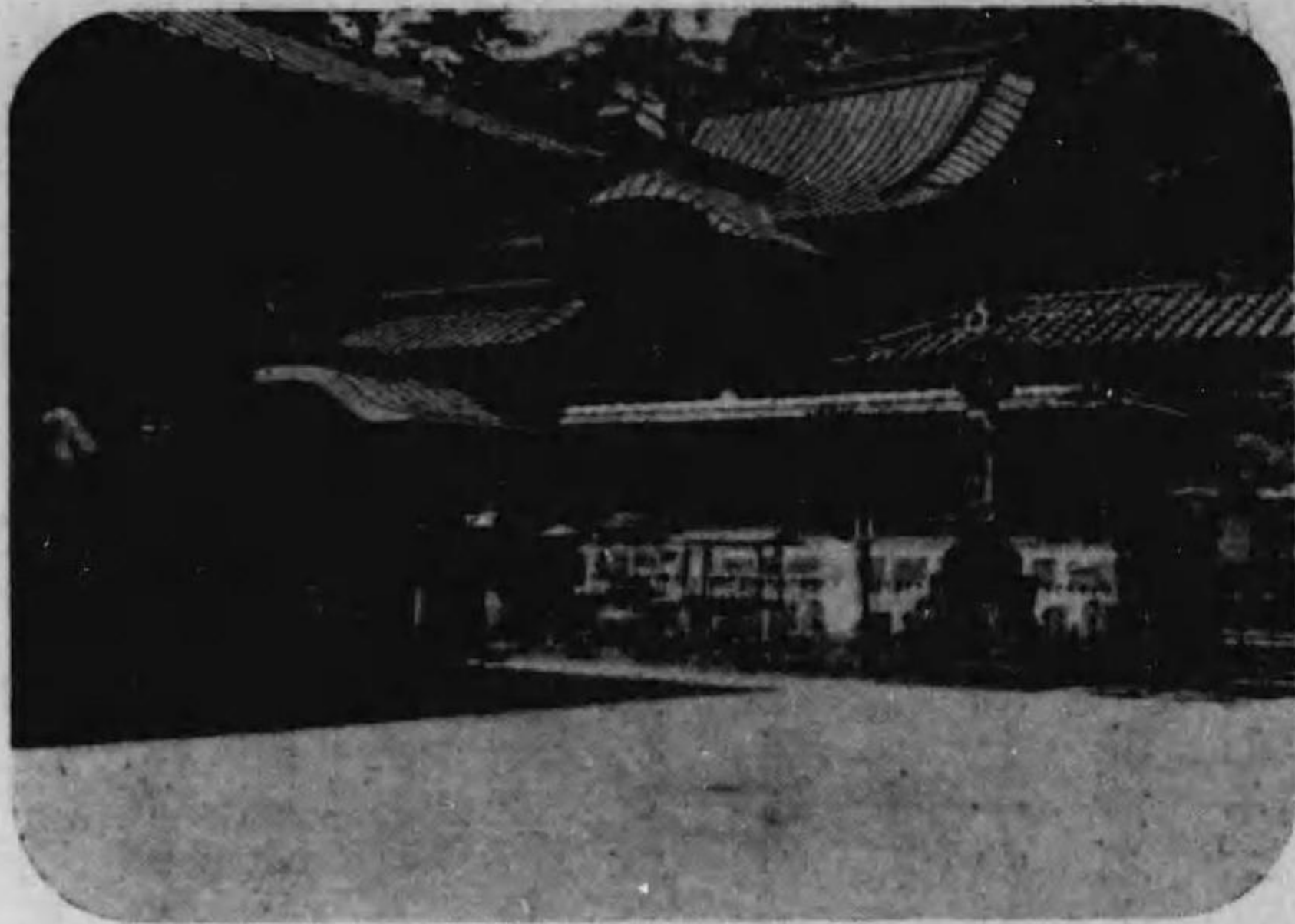


燦々たる太陽に映えて緑林の群る所中尾山中腹の

蕨こそ眼ざす浄池廟である。仁王門の前で車はび
たと停つた。仁王門から三百米櫻馬場の参道を進
む頃我等は異形の人の出迎へを受けた。黙々とし
てその後に随へば「胸つきがんぎ」である。こゝで
一寸説明しなければならぬのはこの「胸つきが
んぎ」である。これは熊本の方言で石段のことを
言ひそれが急角度で登る人の胸を突きさうなので
この稱があるとか。

この「胸つきがんぎ」の磴道を息はづませなが
ら何百段か登ると漆塗りの中門が我等を迎へ入れ
て呉れる。仰げば「浄池廟」の額が目に入る、三條
實美公の筆になるとか、これをくゞれば正面に拜
殿、その奥には椎の密林に蔽はれて御靈屋がある。

先づ頼む椎の木もあり夏木立



嗽き廟前に額づく。

松尾芭蕉

がこの廟

に参詣し

た時の句

寺といふが

妙我等も亦

(本廟の傍の

椎の木陰

で一汗入

れて浄め

の水で口

すると先程の異形の案内者はこゝで初めて口を
切つた。「頃は慶長十六年三月、かの二條城の會見
に於いて、徳川家康公をして豊臣の後繼者たる秀
頼公を認めしめ若し徳川公にして豊家に敵對する
氣配あれば直ちにその場に於いて徳川公を斬り捨
て自刃せんとの覺悟を以てせられた對決も、徳川
方の讓歩により大役果された我清正公は同年五月
下旬當熊本城に歸られたが大坂からの船中で圖ら
ずも病を得られ六月二十四日午前二時遂に白玉樓
中の人となられた。時に齡僅かに五十歳、この報
一度び傳はるや肥後の士民上下は勿論日本全土津
々浦々哀傷悼惜措かなかつた。或ひは毒を以て殺
され給ふたと噂するものもあり、或は豊家の運命

の行末を落膽されたとも傳へられたが、この大英雄の最後を悼まぬ者はなかつた。殊に公の寵將大木土佐兼能は突發せる大事變に哀悼の極遂にその翌朝從容として割腹し壯烈な殉死を遂げたのであつた人々皆この君にしてこの臣ありと感激し中にも重臣三宅角左衛門は

「異國本朝にかけて數度の忠功を致し今亦黄泉に御供を致すといふは誠に美しい武士の最後である。」

と兼能の死骸から流るゝ血潮を手の平に受けて押し戴いて嘗めた程であつた。我清正公の薨去は更らに今一人の殉死者を出してゐる。」

こういつて彼は額の汗を拭ひ靈廟の左にあ

る「朝鮮人金宦の墓」を指さしながら語を繼いだ。

「それは朝鮮人金宦のいたましい最後であつた。いふまでもなく我清正公の武威は四海を壓し遠く海を距てゝ朝鮮の山野にも及んだのであるが、他面又公の慈愛は朝鮮人から非常に敬慕を受け、この金宦の如きもその一人である。彼は公が彼の地に渡らるゝや間もなく歸順し常に公に隨つて通譯に従事し公の行く所必らず彼ありで、凱旋の後も公に隨件して熊本に來てゐたのであるが、公の薨去を知るや

「仁君に放れ一日片時も永らふべきにあらず黄泉の御供申さん」

とて潔く切腹し殉死を遂げたのであつた。

寛永十六年秋も更けて十月十三日公の葬儀は勿論盛大であつた。遺言によつて公の遺愛の地、城西中尾山なるこの地に葬り英靈永へに國を護る淨池廟が建設せられたのである。爾來三百餘年無妙法蓮華經の聲は靈山に衍し參詣者踵を接して絶ゆる時がない。」

彼はこう説明し終ると廟前に跪坐して禮拜した我等も勿論敬虔の念を以て公の英靈に一遍の題目をさゝげ更に左右の殉士「大木土佐藤原兼能之墓」及「朝鮮人金宦之墓」にも禮拜した。

願れば現代も亦決して公の生前にも劣らざる非常時である、太平洋上波立ち騒ぎ、ウスリー江上

風龍を呼ぶ秋、吾人も亦清正公の盡忠の一端たりとも習ひ、更らにそれ以上の報國の至誠を吐露せんと誓つたのである。

かくて我等はいつしか先程のがんぎでなく今度は新しく積まれた石段を降つて居た。見ると先程あんなに熱心に説明して呉れた異形の人の姿は見えない。思へば現代人とはかなりかけ離れた風俗ではあつたがこれは確かに我等が昨夜林氏から寄贈された「景勝の熊本」の著者が幻覺となつて——この小冊子によつて得た暗示とこの自然の神祕境とが合體して——いつしか我等の眼前に立つて説明して呉れたのであつた。

裏參道に待たしてあつた車は再び灰色と紫色の

烟を出して走つた。公の靈を祭る加藤神社を左に見ながら。間もなく老樹鬱蒼と繁る中に壘壁高く紺碧の空にくつきりと聳え立つ銀杏城に着いた。仰げば高き宇土櫓、我等は先程本妙寺で感したとは自ら異つた雰圍氣に包まれた。

思ひは回る三百有餘年前の慶長の昔、奇謀縦横の策略と周到徹密の築城技術と七ヶ年の歳月を費し幾億の人工と経費とを伴つて完成せられた一巻の繪巻物これぞ熊本城建設史であらう。さりながらその續卷は卷を逐ふに従つて榮枯盛衰幾轉變、星移り年代り今はたゞ偲ぶ當時の威風それはこの宇土櫓と不開門のみとなつた、然しながら公の遺されたる築城技術の巧妙さは歴然として我等の眼

前にありよくその本旨を傳へて公の偉大性を傳へて居る。

抑々古來の築城は主として防禦戰鬪の爲めにする、防禦築城である。防禦築城に際しては寡兵よく敵の攻撃を抑へ機を見て攻勢に轉すること東西古今の軍書の教ふる所、現在の戰鬪綱要亦これを規律せること勿論である。こゝで斷つて置きたいことは薄學非戈の筆者がかゝる軍事上の説明をすることは甚だ不適なものであるが、熊本紀行の所感のまゝに寸楮を割かして頂きたいと思ふのである。

さて熊本城は前述の爲めに様々の施設をなしてゐることに氣がつく、即ち我々が今これ

から這入らんとする西大手門の石垣である。これが下の方から約五六間は誰でも這上れる程傾斜が緩である、何んだ城といつてもこれならずぐ這上れると誰でも思ふ、が然し仰ぐと七八間の所では垂直である更らにその上はむしろ反對に彎曲してゐる、この石垣の上の櫓は現在はないが兩側にこゝういふ石垣を見ながら四五間行くと突き當り右折する又突き當るすぐ左折する又四五間で突き當るやうになつてゐる。この曲折は抑何の必要の爲めであらうか、これぞ現代戦にも喧しくいはれる側防機能の活用である、敵は多勢を頼んで先づ石垣をよち登るであらうこれが五六間上るとはたと當惑する何故なら垂直部分となるから然し下から

はどんどん上つて來るから先頭の者は降りられない、この騒ぎに今まで沈黙を守つて居た城内から然も曲折を利用して横なぎに亂射を浴びせる、さうすると敵は混亂に陥り上より落ちる者、その下敷となる者算を亂して自軍の同志討となる、この時城内より攻勢に轉するといふのがこの付近の戰略であつたのであらう。勿論現代戦の如く飛行機あり火砲あり、攻撃築城あり、毒瓦斯あり、化學兵器ありではかくの如きことは大した効果もあるまいが要するに戰勝の要訣とする本旨は同じである。次にこの城には「腹道」が完備されてゐる、俗に「腹が減つては戦は出來ぬ」で城中から四方八方に通ずる凹道はこの必要のための設備である、

往時の如く偵察戦が僅かに騎馬による外なかつた戦闘では濠さへ完備してあればこの凹道を利用すれば永年の籠城にも堪え得られる譯である。

我等は更らに歩を進めて嶽の丸趾を見る、こゝは一面竹藪である、公は籠城戦になれば刀の目釘の修理に忙しいこの點に着意せられ京都から良質の竹を移植されたと聞く。やがて我等は第六師團司令部前に達した。こゝには銀杏樹が亭々と天を摩して聳えて居るこれぞこの熊本城が銀杏城と稱せらるゝ所以で、

光悦が金を塗りたる宮と見ゆ

銀杏めでたき熊本の城

と與謝野晶子が歌つてゐる。この銀杏樹は平時そ

の實を收拾して下のくらやみ門趾の上にあつた千疊敷の大殿堂に貯藏し然もこの疊の際には芋殻を敷いて中の濕氣を取り一朝有事にはこの芋殻と共に食料とする爲めのものであつた。我等は更らに月見櫓の上に出た、こゝには大きな井戸が城内百二十個の井戸を代表して残されて居るこれも亦籠城に付きものゝ水饑饉から免れる爲めである、更らに城内に鬱蒼と繁る老樹は盡く楠、榎、でこれが籠城時には伐り倒されて燃料となる等、一木一石一塊の土壤に到るまで盡く戦時の用に供される計畫は流石と讚嘆せしめずにはおかぬであらう。

更らに防禦築城に必須のものは障碍物である敵をして陣地前に逡巡せしむるものは鐵條網、移動

障碍物、或ひは自然を利用しての障碍物、(竹木林又は氾濫等)である。近代戦に於いては勿論これら苟しくも軍用に供せらるゝものは皆必須條件として陣地占領にも多大の影響を與えるものである

が熊本城も亦この點に留意し然も大規模の計畫が樹立されて居た。それは城が高臺にあり特に城の西南方には花岡山、段山、藤崎臺などの丘陵が連つてゐて比較的城内に迫り易いので同方面の防禦策として坪井川井芹川の分流地點附近に寺を多く集め同方面より敵の肉迫し來る時は墓石を川に投ずれば直ちに氾濫をなし得る如く計畫されて居た。更らに天下の偉視であつたのは天守閣である、當時の天守閣は所謂複合天守で第一七層第二五層

の兩天守閣に同體雙翼の外廓があり、毅然として天空を摩して居たのである。

さればこそ日本三名城の一として大阪城、名古屋城と並び稱せらるるもの故あるかなである。かくの如き名城の熊本城も春風秋雨三百餘年、その歴史を顧れば清正公の治世は僅かに二十餘年にして嗣子忠廣公に及び、後幾ばくもなくして細川家の居城となり爾後二百四十年明治維新に到つた。明治四年熊本鎮臺を置かれ同九年には神風連の變あり、明治十年の西南役には薩軍大舉して入熊の三日前城内にこれに内應するものり怪火の爲めに第三の天守宇土櫓を残したのみで、さすがの大建築も殆んど烏有に歸したのであるが、時の鎮臺司令

官谷干城將軍よく忍苦し籠城五十有餘日遂に敵を
して一步も城に近づけしめなかつたものは一に清
正公の靈が城内の一木一石一塊の土にも通つて居
たからであらう。

戦後谷司令官は天守閣趾に立ち

熊城元是好道寰 焦土蕭條人未還

と概嘆したといふ。其後残された第三天守宇土櫓
の修築成り現在熊本城を代表して聳え立つて居る
のである。

我等は城の展望臺月見櫓趾に立つてこれらの回
顧と教訓とに少時を費した。見れば東方遙かに阿
蘇を懐に抱く外輪の連峰、それに接してつゝじの
名所立田山更らにその右に名園水前寺と水郷畫津

湖が鏡の様に光つて居る、それに續いて眼下は熊
本市である和洋大小の建物が夏の白い光を反射し
た緑樹に包まれて見ゆる所正に漱石のいふ「森の
都」の感を深くする。更らに西方にはその名も美
しい金峰山が荒尾花園等の西山を前にして我等に
微笑みかけてゐる。

終りに西北方西山に接して白く光る藁、本妙寺
淨池廟に盡きぬ名前を措しみつゝ行幸阪に降りて
行つた。この邊りは櫻の名所で熊本城南の登城口
南阪と古來稱されたのであるが、明治三十五年明
治天皇行幸に際し坂の左右兩側に植樹した吉野櫻
が今は大樹となつて春の日の我等の來觀を約して
ゐる。

櫻吹雪は天まで染めよ

森の都の城の上

五十四萬石穩にさく國は

虹も田に敷く畠に敷く

ホンニヨカ／＼ヨカバイのバイ

熊本民謡火の國小唄に春の花見の氣分を聯想して
我等は左側谷村計介氏の銅像に敬意を表しながら
一路熊本驛へと車をかつた。

西に雲仙東に別府阿蘇、これらを結ぶ國際觀光
路の中核熊本市は又經濟文化の中樞としても九州
屈指の大都市である「高樓摩天の姿態大厦櫛比の
形状」は我等にはさほどに感じないがとにかく歴史
の都といひ文化の都と謳はれる南國的自然美の

パラダイスといつても過言ではあるまい。かくし
て我等の熊本紀行も正午驛に到着と同時に次のコ
ースプリンター後藤氏にこの筆のバトンを譲ら
ねばならぬことゝなつた。

城に幸あれ 榮あれ 銀杏城よ、さらば。

街に幸あれ 榮あれ 森の都よ、さらば。

(完)

阿 蘇

後 藤 基 光

汽車と云ふと皆もはや飽いて嫌惡さへ感じ煤煙
と脂汗に塗みれた顔を聯想するのだが阿蘇登山口
坊中驛までは一時間半ばかりだと聞いて熊本から
鐵道に身を委ねる。暫くして山にさしかゝつたな

と思つた時には汽車は既に相當の高さを喘いでゐた。後にして來た肥後平原が遙かに見下ろせる。遂に外輪山を破つて落ちる深い火口瀬の斷崖を縫うて火口原へ突き進むのである。時々崖を迸り落ちる小さい奔流が車窓をかすめる。やがて右側の彼方、緑の丘上を壓して堂々たるコンクリートの近代的大建築物が目に入る。京大の火山研究所だと云ふ。

車中土地の男に阿蘇五岳を教はる、向ふの方から根子岳、高岳、中岳、烏帽子岳、杵島岳と云ふんださうだが、どれも喬木らしいものは一本も見當らぬ様だ。根子岳は大江山の酒頭童子の話を聯想する様な怪奇な山容をしてゐる。山頂が鋸の齒

の様なのは案内書によれば集塊岩の浸蝕によると云ふ。この山だけ黒味がかつた緑をしてゐるのは灌木が密生してゐる爲らしい。杵島、烏帽子の二岳は美しいエメラルド、グリーンの草に覆はれてゐる。其土地の男は根子岳は誰も登つた者がない等と神秘さうな顔をして見せた。案内書によれば大正十四年春、細川護立侯が楨有恒氏と踏破して以來漸次登山者が多くなつたとある。五岳は最高峰高岳の海拔約一、六〇〇米から杵島の約一、三〇〇餘米の間にあるから高さでは問題にはならぬ。

緑に覆はれた山容を遠く眺めて地質學の挿繪か何かの様に頭の中に眼前の山の断面圖を描いて見たりなどしてゐるうちに坊中驛に着いた。坊中驛

からの登山バスもドライブウェイも立派なものだがそんなことはどうでもいゝ。然し刻々眼下に開ける景色には無關係に丁度説明嬢の解説の様に涼しい顔して此の素晴らしいスロープを走り上るのは或る意味から云へば實に味のないわざではあるが、火口原を横斷する鐵道がなかつた頃、バスのなかつた頃を思へば、こんなスピーディな旅程を組む事の出来る今日が有難い。

古い噴火山だと云ふ杵島岳の右側の山腹を廻りながら吾々の車は次第に高くなつて行く。鮮緑の山肌を物凄く割つて所々流水のあとが眞黒い土を見せてゐる。

成る程此處に登つて初めて氣がついたのである

が五岳に挑戦するが如く摺伏するが如く遙かの彼方に外輪の絶壁が圍繞してゐるのではないか。外輪の内壁が岩の肌を思はず堅い色であるほかは外輪の山背も平坦な廣い火口原も登りつゝある山腹も満目すべてエメラルド、グリーンの柔い感觸であるが其の雄大なことはこれ迄に見た如何なる種類の眺めとも異なる阿蘇獨特なものである。阿蘇についての感想を一言にして云へば雄大と云ふ感じに盡きる。それも水のない景觀であり従つて一層「力」を感じる雄大さである。然し凡そ此完全な外輪山がなかつたら阿蘇の景觀は半減どころか大部分失れるに相違あるまい。

眼下の緑野には所々人家の聚落が目につく。こ

れが若し一步一步踏みしめて登るならば人間社會



本を讀んでゐる奴も居るだらうし、借金の云ひわ

を足下に
見下ろす
時必ず一
種の登高
の感懐を
味ひ得る
里 千
千 だらう。
草 あのがチ
ヤくし
た街の中
で殊勝に

けして居る者もゐるだらうし、今日は思はぬ儲けがあつたと北叟笑んでゐる奴も居ようし、威張つて見たり、阿諛つて見たり、さては横丁で立小便してゐる奴もあるかと思ふと微笑さへ感じられ、何だか自分だけ超越して悟つた様な氣持になるのが愉快だ。然し自動車の中から眺める感じはおのづから別だ。そんな事を思ふ暇も無い。

車窓は一轉して草千里ヶ濱と云ふ杵島岳と烏帽子岳の間のスロープなだらかな廣い草原となる。放牧の馬が三々五々群れてゐる。間もなく終點だ。阿蘇山上神社の前である。このあたりから見上げる山肌は草など一本もなく赤茶けた焦げ色で何となく凄惨な氣分に打たれる。これが五岳中現在活

動してゐる中岳である。

陽が照りつけて熱氣を反射する砂地を登ること十町ばかり案外あつけなく火口に辿りついた。周圍一里ばかりの瓢形の火口で活動の中心は時折その内部で移動するさうである。吾々の望む部分は今休止してゐるもので六七町上の方にかすかな煙があがつてゐるのが十日許り前に噴火したのであつて今はそれも鎮靜してゐて餘り面白くない時だと云ふ。

冷たい堅い靜止した火口壁ではあるが鋭く抉られた無数の線の走向に物凄くエネルギーが内在してゐる様に感じられ一種の強大な壓迫感に胸を押される様でもあり、強烈な引力が火口の内部から

作用して引ずり込まれる様にも感じられ充分に窺き込む事が出来ない。火口の内部は尺度となるものすべて異常であり目測がきかない。こわく石を投げて見ても反響がない。

外輪山等全體を俯瞰した時の自然力の膨大さは又異つて、もつと生々しい、物凄く惡靈的な大自然の力を眼前に體驗して原始宗教的一種の敬虔な氣持になつて一寸の間放心してゐる背後で「ボンヤリしてゐると汽車に間に合はぬぞ」と浴せられる。

もうあと六七分あれば次の煙を噴いてゐる所まで行けるのだがと、上つて行く人々を羨ましく思つたが斷念して火口を後にする。

薄蒼い煙を振り返り／＼下山してゐた所いつの間にかバスの終點を横に見下ろす様な方向へ出てゐたのには苦笑させられた。

往復二十町ばかりの間にまくり上げた腕などすつかり赤く日焼けしてしまつた。「紫外線が強いのかな」などと知つたかぶりをする。今度は上りと同じ景色が左側の窓に展開する。下りは何となく氣易い樂な氣持で眺める。

烏帽子岳を背景にした草千里ヶ濱にはキャンプの天幕が三四見える。

學生の頃軍事教練で石見の國、三瓶の火口原で夜野砲の實彈演習を見學した時、牧舎へ歸り損ねた放牧の牛に眞暗闇の中で突き當つた事などとり

とめもない斷想が蘇つて懐かしかつた。

夜ともなれば此のあたり一體に降る様な蟲の聲を聞き頭上近く輝く鮮かな星座を仰ぎ最も靜寂な大自然の懷に存分浸る事が出来るであらうキャンパーの幸福さを想つて見る。草千里ヶ濱を過ぎて登りと同じ杵島岳の山腹をどえらいスピードで下りながら飽かず眺める。直徑東西一六軒南北二四軒もある火口原がポツカリこれだけ陥没したとはすごい。然しどうもさうとより外考へ様がない。

案内書には「阿蘇の熔岩は九州全土に及んでゐるさうだ」なんて書いてゐるのを見ても或程さうかなとも思はれる事程左様にスケールが總て大きい。

の下に霞む山々の彼方に淡いノスタルヂアを誘はれる。

山麓の森林帯も瞬く間に突き切つて坊中驛に着く。大分行の汽車の車窓からもう一度山を見上げて見る。

それにしても何と云ふ恵まれた天氣だらう。雨に降られたお前等の惨めな姿を想像して見るがいゝ！」と自分に云ひ聞かせて見る。外輪山の遠く彼方を見渡せば入道雲が盛んに湧き立つて恰も阿蘇を遠巻きにしてゐるのは一層眺望を雄大にしてゐる。

山の彼方の空遠く

幸ひ住むと人の云ふ……

と云つたあの有名な譯詩をふと思ひ出し、入道雲

凡そ山は聖淨清純な雰圍氣であり都塵に塗みれ俗臭の泌みたはらわたを洗ひ日常生活を顧みるには最も好ましい處である。東京から幾百里離れ、而もこんな大自然に接する機會が吾々の生活に與へられた事は感謝に堪へない事であつた。「カネの番人かね」など、意地悪く皮肉られたりする銀行生活から完全に解放されて銀行業務に關する事を一言も口にしたり思ひ出したりする人の無いのは

不思議な位だつた。

唯車窓に素晴らしい樹木の茂つた山が過ぎる時など「あの山の鑑定価格は幾らだらうな」など、云ふのや田圃を眺めて吉村班長に「あれは畦畔でせうか道路でせうか」など、聞いてゐる人もあると云つた様なものと「少し飲み過ぎて全部償還しさうだ」など、辛い駄洒落を飛ばす位なもの。年と共に餘裕のないコチ／＼な心になりさうな生活へこんな素晴らしい其時効中斷が企てられたのは吾々の生活を多彩的にし非常に有意義であつた。これだけの團體行動だからこそ此短時日の間に充實した旅程が實行されるのであつて單獨では途中でノビちやつたゞらうし、旅の朗かな快さも餘程

六〇

滅殺されたに違ひない。それは兎も角三時間前のあの雄大な澄み切つた氣持もどつかへ曇み込んでしまつて、俗境別府の湯の街にキヨロ／＼と何か桃色の面白い事もがたと云つた様子で下り立つた吾々を見出したとは人の世は愉快だ。

別府にて

如 猿

七月參拾壹日我々一同は北九州廻遊の最後の目的地別府へ到着したのである。

身體も溶けよとばかりに照りつける直射日光と目と云はず耳と云はず又鼻と云はず遠慮もなく這入つて來る汽車の煤煙に苦しめられつゝも唯一人

の落伍者もなく別府の高砂旅館へ着いた時は口こそ出さなかつたけれ共「やれ／＼」と思つた者は自分一人ではなかつたであらう。田の中と云はず海の中と云はず停車場のホームに迄温泉の湧く別府は餘りにも有名である、泉源と稱するものばかりでも現在は千個以上もあり浴槽と名のつくものが三千五百以上もあり普通の民家に迄も浴槽を有する家が多いと云はれている(別府市内だけで)。實に別府は温泉都市と云ふべく保養の地として又遊樂の地として世界にその名聲を誇り得べき資格を充分に有しているのである。

而して別府温泉の起原を探るならば遠く神代迄遡らなければならない。

即ち大己貴命小彥名命が入湯せられたのが抑々今日の如くなる第一歩なのである、其後景行天皇が九州御親征の際速見の湯に行幸せられ聖武天皇の天平二年には大神朝臣田磨が國司として任命せられて温泉を修理し近衛天皇の御代大暴風のため破壊せられたが源爲朝が之を復興し明治七年には縣費を以て別府濱脇の兩湯を改造修理してより益々繁榮して來たのであるローマが一朝にして成つたのではないと同様に別府が温泉都市としてその名を世に誇り得る様になつたのは昔しより相當の努力が拂はれている事を忘れてはならない。温泉は斷層に沿ふて湧出せるものであつて(一)龜川一里屋、(二)明礬、紺屋地獄、海地獄、(三)堀田

坂地、別府市内一圓、海岸砂湯、(四)観音寺、乙原の四郡に分たれ観音寺、堀田、鐵輪、明礬、柴石、龜川、由布院、塚原、新別府、大別府が十湯と稱されてゐる。

別府市内には立派な浴場は數多くある。その内でも最も代表的のものは不老泉と海岸砂湯であらう。

不老泉は別府驛より約二丁の所にある。こゝの建物は實に堂々たるものであり、内容も充實して別府第一と云はれてゐる。浴場を三段に分けてあつて並湯が無料、上等湯——砂湯、瀧湯、併浴——(有料)に十錢拂へば下足を預り階上の休憩室に招じ茶を出し又浴衣、手拭なども貸してくれるそ

うである、たゞの入浴であれば五錢でいゝとか、又家族湯と云ふのがあつて二人迄一時間一圓二人以上を増す毎に三十錢。浴場と休憩室をも貸し切ることが出来るそうである。こゝは炭酸泉で無色透明無臭皮膚病に特效ありと云はれてゐる。

我々は何代別府へ着いたのが午後七時半頃であつたので中へ這入る事が出来なかつた。たゞ表てから「ゑらくすごい風呂屋だなう」と感心だけして來た。

海岸砂湯。これは北濱海岸一帯に湧き出する天然砂湯でこれこそ實に天下一品別府の一大特長で入浴料は一等二十錢、二等十五錢、料金を拂ふと浴用の浴衣を貸してくれる。又砂かけ女と云ふの

が居て波打際に砂の寢床をこしらへてくれるそうである。この名物砂湯へ入いらうと云ふ者もあつ

たが「何となく氣味が悪いから止さう」と云ふ者もあつてたゞ表より一寸のぞいて止めとした。しかし今になつてせめて自分一人だけでも入ればよかつたと思はれ残念である。

我々一同旅館に着くや何をおいても先づ風呂とばかりに浴場へ馳け込んだ。旅の汚れをすつかりと洗ひ落し、小ざつぱりとした浴衣を着た時は、何とも云へない程いゝ氣分になり、今迄の疲れなんかは忘れてしまつた。

久方ぶりにゆつくりとした氣分で東京のビール(即ちキリン、エビスビールを云ふ、九州のそれ

はアサヒビールで何となく東京のよりうすくて不味い)にありつき晩飯を終る。

さて我々は之より夜の別府を見物せんものと旅館を出たのが十時頃であつた、道路は大して廣くはない、道の兩側には土産物の賣る店、カフェー、旅館等々櫛比し相當賑やかである。歩いてゐる人達も所謂湯治客の方が割合に多く、まるで宿屋の浴衣の展覽會の様だ。我々も展覽會の一員となつて町中をぶら／＼と散歩をしたが賑やかと云ふ事には慣れてゐるので、大して注意もひかない。龜の井バスの車掌嬢が「旅館商店軒並び夜は不夜城で御座居ます」と我々に云ふが少々誇大に云ひすぎてゐる様だ。此位のなら東京の場末へにでも

ある。従つて自然我々の足は八幡神社附近に向いて居た。

こんなにおそく参詣に行つたのではなく、お宮附近にある景色を見んがためなのである。

温泉町に花街はつきものだ。熱海然り、伊東然り、——が熱海、伊東が温泉町として別府に比すれば問題ではなく、同様にその方面に於ても到底問題にならない。客引の猛烈さは一寸恐ろしい様なものがある。

熱海あたりも相當に凄い事は凄いが、例へ宿屋の浴衣を着ていても彼奴は今金を持つてゐないと見れば、決して相手にしないが別府では敢て之をなし後宿屋へ金を取りに来ると云ふのだから凄

い。その附近をぶら／＼してゐれば着物の袖のいつや二つとられる位は先づいゝ方で、下手をするところにかつき込まれる相である。

折角別府迄来てかゝる所を見ざるは東京人の恥とばかりに出かけて行つたものゝ、最初のうちは話程でもない、「何だ！大した事もねーや」とばかりに奥へ奥へと行つた。行く程に話しに違はず段々と凄くなつて来た。先づとある店の縁臺に腰をかけて馬鹿話をしていたが、一行中の一番年下の者が恐ろしがつて道の真中に立つて「早く歸ろう！」と今にも泣き出し相な顔をして居るので、余は他の者と別れ二人で元来た道を歩るいて行つた。途中迄来ると横道より「一寸！一寸！高砂や

さん」(宿屋の名)と叫びつゝ二人の客引女が我々を目がけて突撃して来るではないか。友人は余の帯をつかんでふるえているし、自分とても大勢であつたか故に別府迄来てこゝを見ざるは恥とばかりに元氣もあつたが、二人きり而も一人がかゝる有様だと如何にも心細い。思はず胴ぶるいしたの事實だつた。目をむき、上づゝた聲で「来るなよ！来るなつたら！」と叫びつゝ逃げた。後ろの方で「あの人喧嘩腰でどなつているよ、恐いこと！」なんて云つているのが聞える。馬鹿にされた様で心中甚だ面白くはなかつたが、つかまつて着物を破られでもしたら途中いゝ恥さらしだし、かつき込まれては尙大變であるが故に逃げた。ど

の道をどう走つたかを知らないがとに角捕つてはと云ふので走つた——がどこへ行つてもあやしげな店のある所へ出るのには弱つた。此處はいけないと他の方向へ曲ると其處にもある、又曲ると此處にもあると云ふ風で、丁度それ等の店に囲まれてしまつた形だ。餘り調子に乗つてこんな處へ来たのが悪いと思つたが今更どうし様もない。漸くにそれ等の店のない所に出るには出たが、今度は宿屋へ行く途が分らなくなつた。幸ひ風呂へでも行くのであらう。——二人の女の人に會つたので我々の宿屋へ行く道順を聞いて漸く安心した形だつた。ところが突然友人が又々余の帯をつかんで「あの女はうその途を教へて我々を引ばるのでは

ないかしら」とふるへ聲を出してゐる。

とんだ所で赤毛布ぶりを出してしまった。旅館へ着いた時は早十二時も過ぎ一時に近かつた。

八月一日、思はず寝過して目の覺めたのが七時近かつた。高砂の二階より左りに國東半島、右に大分市より佐賀關に至る半島にかこまれた別府灣を見たときそのすがくしさは例へ様もない。二階より眞正面に見へる三四千噸位の船は瀬戸内海廻遊の紅丸である。波一つない別府灣の沖には漁船であらう。點々と小舟が見ゆるのもこの海の景色を一層雅致あるものにしてゐる。

別府の人達は云ふ

「左右に見ゆる半島は丁度美人の腕であつて之は

ミス、ベツプが柔かい双腕をさしのべて我々湯治客、觀光客を迎へる意味深長なポーズである」と。

別府灣の咽喉とも云ふべき豊後水道は我が帝國海軍の好き演習場所と云はれてゐる。

別府の町も漸く眠りより覺めた。大阪商船別府支店も人の出入りが繁くなつて來たし、地獄廻りをするバスも頻繁に動き出した。

朝食を済し最後の温泉にひたり我々も地獄廻りをなす可く旅館を出たのがもう八時を過ぎていた。我々一行中の者の友人の世話で料金も普通より安く而も臨時に(八幡地獄迄)バスを出してもらふ事が出來たのも嬉しい事の一つであつた。愈々

バスの人となつて別府名物の地獄廻りは之から始まる。車中美人車掌が美聲にて而も一種特別の節で途中の名所くを説明してくれるのも遊覽都市別府らしい。

車が動き出すや車掌嬢

「お待遠様、之から地獄廻りで御座居ます。御案内申上ます。

此處は名高い流し川、情の厚い湯の町を眞直に通る大通り、旅館商店軒並び夜は不夜城で御座ます」

説明して居る所は流れ川通りと云ひ所謂別府市のメイン、ストリートである。

いくらか勾配のある道をバスは走る。乙原山。

(こゝにはケーブルカーの便がある。山には展望温泉とて浴槽に浸つて臥て居ながらに別府市全景を俯瞰するを得、尙天氣のいゝときには豊後灣から瀬戸内海、中國、四國の山々をも眺むる事が出來ると云はれている。)

道の右手の一角は此處はお國の何百里、離れて遠い滿洲の其滿鐵の療養所、此處も櫻の咲き誇る花の名所で御座います。

南滿洲鐵道株式會社の療養所

京大地球物理學研究所、或は歌劇あり温泉ありて九州の寶塚と云はるる鶴見園をすぎて

行く手に見へるあの丘は、八幡鶴見の兩地獄煮へ立ち返る熱湯は此の世からなる恐ろしき焦焼

地獄で御座います。

の第一の地獄——鶴見、八幡の兩地獄へ到着。

八幡で御座います、地獄の御見物遊ばしませ、

御案内致させます。

の車掌嬢の聲にてバスより降り地獄とはどんなものかと入つて行く。

入場料十錢、各地獄通しならば五十錢。

地から出ているものを唯見るだけで入場料をとるのは随分變な事であるのに、尙折角風光のいゝ所にあるものを態々高いコンクリートの塀で圍んである事は餘りいゝ氣持がしなかつた。

地獄でも金で出すとこ入れるとこ

鶴見地獄は第一と第二とがあつて第二の方は大

正十四年の夏掘りたる時大音響を立て、湧出したるもので地獄中最も盛んなものと云はれている。

これは深さ三百餘尺溫度攝氏百二十度溫泉湧出量一日二萬石とか。

案内書には

四六時中休む時なく一見觀客をして慄然肌に粟を生ぜしむる實に凄絶壯絶の一大奇觀であります。

とあるが余は神経がにぶいせい肌か肌粟などは生じなかつたが、大地より朦々たる湯氣を立てつつわく／＼の湯の出ているのを見た時は確に凄いと云つた。

八幡地獄も大正十四年の夏始めて出来たもので

あつて數分毎に熱氣を數丈の高さにあげる間歇溫泉である。

惜しい事に時間の都合で見物を止めてしまつたが、今更ながら見ておけばよかつたと思はれてならない。自分としては折角の事なのだから見たかつたのだが、自分一人のために他の人々に迷惑をかけるのもどうかと考へ到々見逃してしまつた。

見物を終り次の地獄へ行く可く又バスの人となる。今度は我々より前に出發した人達と一緒になつたので車は満員、たゞでさへ暑いのに人の溫氣でたまつたものではない。我々は之を自動車地獄と名付けた。

此處で一つ問題が起つた。それは他でもない、

我々だけなら如何様にしてゞも時間を單縮するとは出来るが、他の人達と一緒にだとはゆつくりせられて、折角八幡地獄の見物を省て迄時間を單縮せんとしている事が何にもならなくなりはいかと思ふ事だ。

何とかしてゆつくりさせない様にと「早く見物をして自動車のいゝ場所に坐らう」とわざと大きな聲で云ひつゝばた／＼と走つたものだ。それが完全に當つて他の人達も遅れじと走る。お蔭で結局に於て二十分ばかり短縮する事が出来た。閑話休題。バスは次の地獄、坊主、海の兩地獄に向けて走る。やがて石垣原の古戦場の所へ來た。この古戦場は今より三百三十四年前天下分け目の關ヶ

原の合戦と同じ慶長五年九月秋徳川勢の黒田如水と豊臣方の大友義統が五日五晩に亘る大激戦を交へ大友方の大將吉弘統幸は武運拙く

あすは誰が草の屍や照すらん

石垣原の今日の月影

と辭世の一首を讀殘して自刃した所。

この古戰場を中心に東南北に廣がつている鶴見の裾野の一帶約五哩四方は温泉地帯と呼ばれ湯口の數は約二千あり湧出する湯の量は一晝夜凡そ二十五萬石と云はれている。流石は大したものだと唯々驚くより外はなかつた。

次は其の名も珍しい山の中なる海地獄、綠滴る絶壁を背景とせる谷合に深く湛へし熱湯は色

七〇

紺碧の海に似て其物凄さ美しき嘗て今上陛下には未だ東宮におわす時其處台臨遊ばせし別府別所で御座居ます

の海地獄及坊地獄へ到着。

海地獄は明礬泉で丁度海水の様な色をしているのだが物をかく簡単に云つてしまつたのでは何の事はない。矢張り車掌嬢が云ふ通り山の中に海水の色そのままの熱湯が天をも覆ふが如き湯氣を立てつつ湧出しているのも壯觀なものであり、又別府以外では一寸見る事の出来ないものである。風景も前の鶴見地獄の様に殺風景なものでなく、背に山を負ふて居るだけにいゝ。

その西に坊主地獄がある。

坊主地獄は新坊主地獄、小坊主地獄及坊主地獄の三つある。我々はその中の坊主地獄を見た、此の地獄が他のそれと異つてゐる所は一面が泥土で滿され湧出する蒸氣で泥土が丁度坊主の頭の様な泡を立てゝゐることである。我々の見た時はその泡は直径一寸位のものであつたが天氣が續きこの泥土がもつとかたくなると未だく大きな泡が出る相である。

その泡が此處彼處と一面にぶつくと出て居て一つの泡が消へるや他の所へ泡が出その泡のあとに又泡が出る、大きい時あり、小さい時あり、而も何百何千と云ふ泡が出たり消へたりしてゐるのであるが故に見て居てあきない。出たり消へたり

してゐる泡をじつと見て居ると大自然のこの惡戯に注意力を奪はれて他の事なんかは完全に忘れてしまふ。

泡のあとへ泡が出るために泥土に皺が出来る、その皺と他の皺とがくつついて泥土一面に大きな皺が出来一寸グロテスクなものである。此處の見物も了へ次の地獄、かまど、血の池兩地獄へ出發。車が動き出して一寸行くと眞下に白い大きな瓢箪形の建物が我々の目をひく。

その建物附近一帯を鐵輪(カンナワ)温泉と稱し別府十湯の一つに數へられてゐる所であり、その瓢箪形の建物はその形通り瓢箪温泉と云はれてゐる、此處は庭の泉水は勿論、築山、お盆、お皿、

七一

お茶碗に至る迄瓢箪すくめとか、えらく又こつた所だ相である。湯治客が又負けずに瓢箪よろしくぶらり〜と此處へ出掛けて行くと聞いてはむしろ愉快だ。

次の地獄の血の池は赤く湛へし大地獄、血の湧く様な熱泥の其の物凄い紅は海の地獄の紺碧と思ひ併せて不可思議なコントラストで御座居ます。

の血の池地獄及かまど地獄へ到着。

血の池地獄は鐵分が沈澱してかく赤色を呈してゐるものであつてたゞ同じ地方に青いのあり赤いのあり又無色のありで大自然の不思議なのに感心せしめられたのみ、其の他はたゞ青と赤の相違だ

けで見た所海地獄と大して異なる所なく別に注意もひかない。

それよりか次のかまど地獄の方が凡の愉快な存在であつた。

この地獄は前記の地獄の様に湯が湧出してゐるのではなく、丁度かまどの形をした所(之は人間が作りたるもの)より蒸氣が出てゐるのであつてそのかまども精々一坪あるかなし位の小さなものである。そして蒸氣も所謂かまどの蓋を開けなければ出てはこない。何が愉快なる存在であるかと云へばむしろ地獄そのものよりも地獄について説明する案内人それである。

勿論今迄の地獄でも案内人は居たが何れも平

凡單に温度とか或は効能の説明位だつたのにこゝのは人を小馬鹿にした様な節をつけて次の様な説明をする。その節はこゝで云ひ現す事が出来ないのは惜しき極みである。

入口

此處は圓魔のお茶場で御座居ます。

この銘泉は胃腸によくあります、お歸りたんとお飲み下さい——次は

地獄の一丁目

之より地獄の釜の蓋があきます。

かまど地獄の釜地獄

この蓋をけると湯玉が見えます。

湯氣に火をやりますと湯氣は数十倍になります

之は今博士が研究中で御座居ます。

我々は之を圓魔の手工品と申しております——次は

地獄の二丁目(地獄の一丁目のかまどの中より

蒸氣をひいて來たもの)

この湯氣にて御飯がたけます。

二升の御飯で三十分、玉子は四分で全熟になります。

其他豆でも芋でも蓋し物は何でも出來ます——

次は

地獄の三丁目

こゝは地獄の湯氣を利用して温泉から胃腸薬とかまど膏を製造しております。胃腸と皮膚病で

御難儀のお方は是非お試し下さい。之で地獄終り次は

極樂

お休になつて(ごく、らく)名物かまどパン一個召上りますと八十五日長生が出来ます。

この所謂極樂こそ我々には地獄である故に此處は敬遠して馳歩で、バスに乗る。

この地獄のある村はかまど村と云ふ。

各地獄には夫々茶屋があつて地獄を見ながら一杯やる様になつてゐる。又そこでは地獄染とか、繪葉書、タオル其他色々の土産品及びその温泉より製造してゐる薬等をも賣つてゐるし、記念スタンプを捺す所もある。(但し捺印料一冊につき金五

錢也。)それ〴〵特色を表はしたもので後日地獄を回想するためには好個の記念である。又ハンケチ、タオル、白木綿等に随意に揮毫して熱湯にひたすと忽ちに「地獄染」が出来、而も何れも泉質を異にして居るが故に色合が違つて非常に興味のあるものであつて、之又地獄の好き記念品が出来る相である。

之で別府に於ける主なる地獄の見物は終つた。之より南へ〴〵と左りに扇山、鶴見山、由布山、高峰山の山々を見、左りに別府灣を眺めつゝ坦々たる四哩の道をほこりをあげつゝ別府へとバスは走る。

行く程に斜右手の林の中に丸々と頭を表はして

ゐる大佛像が見える。高さ八丈世界にも稀な大佛像である。(但し之はコンクリート造り)。その前方に面白い事に一本の煙突がある。それが此の巨大なる佛像に供へたる決してへらない、而も之又世界に稀な大線香と別府の人々は云つてゐる。

如何にもこじつけた云ひ方だが、然し物も見方だ。かく見れば一本の煙突も決してその大佛像のためには邪魔な存在ではないではないか。

別府市に近き海岸には天然砂湯がある、干潮のときその砂に埋れて繪の様な別府灣を眺めつつゆあみするのは實に天下一品のものではあらう。

この四哩の道すがらミス車掌とミスター運轉手がソプラノとバスの二重奏で別府小唄を聞かして

下れた。普通は唄はないのだ相だが我々の頼みで特別に唄つて呉れたのである。此の點で散々に忙しい思をさせられた、他の人人も埋合せが出来たであらうと信ずる。

別府小唄

鷗飛び交ふ砂湯の沖に

響く汽笛はサ、唯呼ぶ聲ぞ

なびく湯煙りや鶴見の裾野

あつい情のトコサイ〴〵燃へるよに

鶴見枕に齒齧灣を

抱いて夢みるサ、姿のいとし

四季の風情は湯靄にかすむ

花に月雲トコサイ人に戀

いで湯渦巻きや湯煙おどる
 櫻紅葉のサ、里にも野にも
 湯の香ほのぼの身もほのぼのと
 ほんに湯の國トコサイ、湯の世界
 お湯ほてりて情けに酔へば
 月もおぼろにサ、更け行く灯影
 今宵別れていつ又逢へる
 浮名流れりやトコサイ流れ川
 夢か寝さめの一と村雨に
 またの逢ふ瀬をサ、契るもうつゝ
 留めてとまらぬ出船に銅鑼に
 名残綱ひくトコサイ海と陸

次は海岸流れ川、盡きぬ名残を惜まれて地獄廻りはすぎました。謹んで皆様の御健康を祝します。
 之で地獄廻りも了り愈々バスともお別れであると同時に湯の町別府市ともおさらばである。こゝで我々の一行は二組となり他は海上より我々は陸路にて宇佐八幡に参詣し、耶馬溪の景を探ぐるべく午前九時四十四分別府發門司行きの列車に乗込んだのである。

北海道駆けある記

前田正之

◎北海道班の行程畧圖



▲印ハ宿泊地

月日	コース	走行距離
八月五日	函館—長萬部—登別	約 二一五軒
六日	登別—岩見澤—旭川—上川—層雲峡	二九五軒
七日	層雲峡—上川—遠軽—美幌—阿寒	二四五軒
八日	阿寒—大楽毛—狩勝—瀧川—定山溪	四七五軒
九日	定山溪—札幌—小樽—長萬部—函館	三一六軒

◎班 長 小森 幹事

參加者 荻澤、武藤(敏)、村田(壽)、前田、堀、長本、中村(長)

◎日程左の如し

八月四日 上野發午後二、三五

八月五日 青森着午前六、三〇

青函連絡船(青森發午前七、一〇 函館着同一、四〇)

函館發午後〇、三〇

登別着午後五、三七 (下車)

登別——登別溫泉着 (第一瀧本館投宿)

八月六日 登別溫泉發午前六、〇〇——登別着

登別發午前六、四八

苫小牧着午前七、五六 (乗換)

同 發 八、三一

岩見澤着 一〇、二五 (乗換)

同 發 一一、二三

旭川着午後二、一三 (乗換)

同 發 三、一〇

上川着 四、五三 (下車)

上川發(乗合)——層雲峽溫泉着 (層雲閣投宿)

八月七日 層雲峽溫泉發午前七、〇〇(乗合) 上川着

上川發午前八、五九

野付牛着午後二、二八 (乗換)

同 發午後三、一〇

美幌着 三、四七 (乗換)

同 發 四、三五

北見相生着 六、〇九 (下車)

同 發 (乗合) 阿寒湖畔着午後七、三〇 (雄阿寒ホテル投宿)

八月八日 雄阿寒ホテル發午前四、〇〇 (阿寒湖半周)

同ホテル發 " 七、〇〇 (乗合貸切)

大樂毛着 " 九、〇〇

同 發 " 一〇、一八 (函館行)

札幌着 午後九、三三 (ハイヤーにて豊平驛へ)

豊平發 " 一〇、〇〇 (定山溪鐵道)

定山溪着 " 一〇、四九 (定山溪ホテル投宿)

八月九日 定山溪發 午前七、四〇

豊平着 " 八、三〇 (ハイヤーにて札幌驛へ)

札幌發 " 九、四五

函館着 午後四、四〇

青函連絡船 (函館發午後五、三〇 青森着同一〇、〇〇)

青森發 午後二一、〇〇

八月十日 上野着 午後二、三〇 解散

八月五日 所謂名所舊蹟の探るべきもの乏しく追ふべき歡樂の境亦尠しとは言へ、廣漠たる大平原あり千古斧鉞を入れざる大原始林は尙諸所に在つて各種礦物の藏有殆んど無盡藏と稱され沿海は幾多の良港を擁して魚族豊富に海藻繁茂せる事は我北門の寶庫なりと言はしむる所以、殊に今日行詰れる人口食糧問題解決の上に重大なる存在價值ある我北海道、而もその風光は自ら大陸的の面影があり雄渾の氣天地に漲り到る處進んで止まざる新創の都市ありて我等を招く我北海道に思ひを馳せつゝ上野を發して北へくと驀進する事七三〇餘キロ、一行の汽車が大きく吐息して青森に休めば我々は早や青函連絡船に移つてゐる。船はいさゝかの動搖も見せず青森の岩壁防波堤も次第に朝霧の中に消えて一時間近くもたてば早くも白神岬は手をさし延べて迎へ、更に遠く秀峰駒ヶ嶽が鋭い圓錐狀の突起を以て高く天空を指せるを望見する。この繪の如き光景に恍惚たる折柄左舷にあたり海馬の如く船を追ひかけては波上數尺も跳躍するイルカの大群が見えるその白き腹を旭光に曝しつゝジャムプする様は波の紺空の碧に相映じて壯快の極みである。一六〇キロ四時間半の明朗快適なる航海を了へて函館着。

こゝは昔から「網知らずの港」と言はれた良港然もその上に特殊にして豊富なる天然の資源に恵まれてゐる。北にしては北洋貿易、南は對支貿易が夫れ、之等は正に函館の獨壇場であらう。尙幕軍が最後の決戦を交へし五稜郭、或は夕べを祈るトラピストの鐘、又は「東海の小島の磯の白砂に我れ泣き濡れて蟹とたはむる」とうたひ若くして逝ける啄木の墓碑ある立待岬も近くに在り、湯の川で旅塵を流してから訪れたい處だ。けれ共先を急ぐ一同は今春の大火を物ともせず力強く更生の歩を進めつゝある市民諸氏に敬意を表し乍ら直ちに稚内行急行に身を托した。駒ヶ嶽を右に左に望みつつ行けば早くも大沼驛に着く。驛は直ちに大沼に臨み沼は大小百餘の小島を浮べ輕舟その間を去來し雄大なる駒ヶ嶽の奇峰をうつしたる様は我々の眼を奪ふに足る。間もなく汽車は噴火灣に沿つて進む。沿線に菖蒲が咲きみだれてゐるのには一寸變な氣がした。長萬部近く迄は魚臭粉々として鼻をつく。見ると至る所魚肥とわかめ昆布の乾したのがつゞいてゐる。この臭い話しの酣なる頃通過した驛名をフト見ると何とオトシベ（落部）とある。道理で好い臭いと大笑ひであつた。

エカシケナル、この名は長萬部驛のホームを歩けば目につく。「尊き祖先の家」の意味で驛から近い舊土人部落の名前であり、初めての我々には何となく惹きつけられる名稱だ。もうこゝは早くも涼しさを覚えて夏らしくない。

こゝより室蘭本線を行けば驛々の呼び名も北海道らしくなる。辨邊、伊達紋別、稀府、黄金薬、幌別等々そしてたゞ見る荒涼たる原野だ。車中聞く處によれば苫小牧あたりまで水利の便悪くために耕作に不適で可惜抛つておくそうな。廣い／＼場所をたゞ雑草に任しておくのは勿體ない氣がしてならなかつた。

黄金薬驛を過ぎれば右方海上に突出した繪鞆岬に抱かれて室蘭港が半分程見える。波靜かに風光明媚な處だが非常時を反映して輪西あたりにかけ黒煙濛々と立ち昇つてゐる。一瞬身も心も引き緊つて遠くクレーンの動きをみつめ長蛇の列を布く貨車に目を据へる。

夕刻登別温泉着、クリサンベツ川が湯街の中を流れ流石北海道一の歡樂境と謳はれる丈けあつて設備も良く整ひ泉量も豊富で且つ峰巒四周し翠影樓を罩むると言つた工合のところ、泉質も多種多様でその上脂粉の香を濃厚に漂してゐるのが浴客を喜ばせるのかも知れない。湯元地獄谷は温泉のすぐ上手にあり附近一帯の岩石恰かも劍を植えた如き劍ヶ峯の下に白煙濛々として熱湯を噴出する様は壯絶凄絶の極みである。

衣を更へれば冷涼を覺えて早々に湯壺に下る。我々の旅宿の揭示する所によれば浴槽三十三、泉種七つもあると言ふ。浴槽を埋める湯煙は絶へず立ち昇る。その朦朧たる中に年々に見るサロンの名畫にも似たる裸體美數十、今一步を踏み出せば折角の嫦娥もあはれ俗界に墮落するよと思ふ利那線の髪はサツと靡いて白い姿は渦捲く湯煙の彼方に消えてゆく。

八月六日 一行も最初の泊りのこゝにはすつかり氣を良くし極樂湯の光景を目に浮べつきぬ名残を夢に残して早朝出發。アイヌ部落で有名な白老を過ぎれば社臺附近より愈々大陸的風景の中に入る。樽前山を望み乍ら製紙工場で發展した苦小牧より追分、岩見澤へと來る。岩見澤はこのあたりの中心地街路整然たる市街、限りなく伸び行く明日を持つ都市である。この附近豊富な大炭田として夕張、空知、幾春別、美唄等があり省線を挟んで縦横に炭鑛鐵道が走つてゐる。深川から旭川に行く間に神居古潭の風景を右に眺める。石狩川が神居山脈を貫く所神居古潭の深淵があるが、深さが非凡な以外に勝地として傳へられる程の風致も感じなかつたのは單に我一人のみではあるまい。

正午頃旭川着、乗換の間を利用して市内を見る。近代都市計劃に則して作られた街路は碁盤の目の如く正確に縦横に走り實に整然たる様は殆んど内地に見られぬ氣持のいゝ處だ。旭川平野の中心たる

のみならず將來本道の中心たるべく目覺しい發展振りを示してゐる。

岩見澤、瀧川と過ぎゆく程に石狩平野と旭川平野とは神居古潭附近を中にしてキツパリと區分されてゐるのも面白く共に第一、第二の大平野として沿線の兩側稀に迫る小丘もあるが殆んど視野を遮るものなき大平野の連続だ。果てしなき平野、遙か彼方にエゾ松の植



林ありポプラの並木も見える。而も時折り白雲に妨げられる丈で太陽は中天より西に傾きやがて沒せんとする頃まで汽車はひた走りに平野を快走しつづける。内地では到底見られぬ廣大さだ。一望千里とか沃野千里とか言ふがそれを此處では現實に示して呉れる。果ての果てまで山影を見ず蒼空と大平野とが相合して水平に一直線を描く所へ太陽は沒して行く。我々は初めて胸一杯に呼吸して窮屈さを感じない處へ來た氣がした。

暮近く名も美しい愛別附近からやつと山々が迫り始めてくる。沿道には薄荷と除蟲菊の栽培が盛んである。年産巨額に上り主に小樽を経て輸出される由。

夕刻上川驛着、層雲峽行きバスに投ずる。今まで大平野を走つた我々は之れから大森林の中に入つてゆく。層雲別附近に來れば愈々層雲峽となる。こゝは旭岳を主峰とする大雪山彙（ヌタクカムシユツペ）の北を劃する石狩川の大峽谷がやゝ開かふとする處、緑山、碧水、巖峰、飛瀑加之温泉豊かに湧出してその雄大壯絶なる到底拙き筆では盡くす事が出來ない。乞ふ大町桂月をしてその絶景を述べさしめよ。曰く、

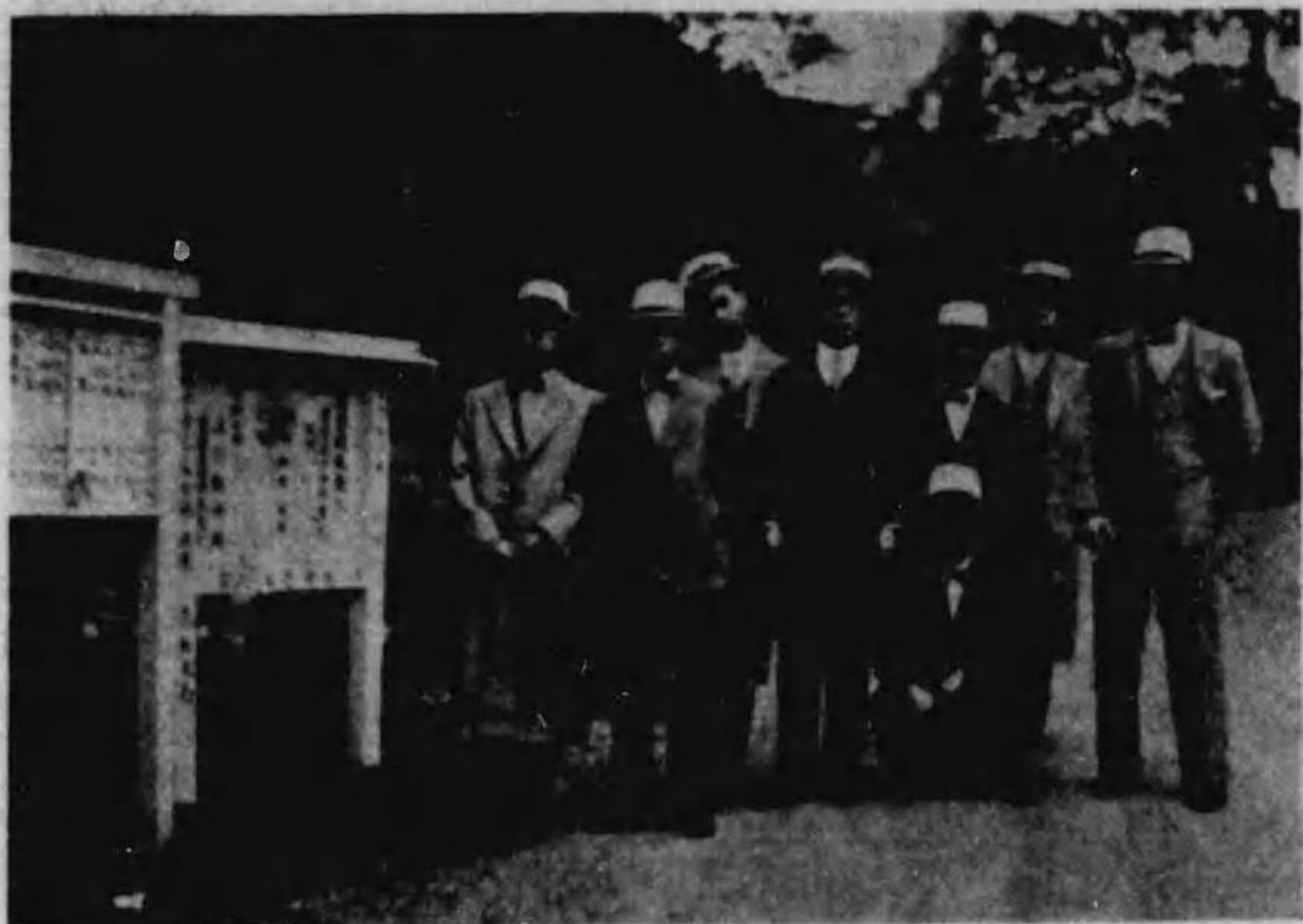
『大雪山の腰を貫く處即ち層雲峽也。層雲峽は未だ世に知られざるが天下の絶勝也。石狩川こゝにて凡そ五里の間高きは二千尺、低きも千尺を下らざる絶壁に挟まる。川の幅は三、四十間より漸次狭くなり終に十間内外となる。水は淺くして殆んど音なし。石狩川も神居古潭あたりは濁れり。旭川あたりは澄ます。層雲峽に至りては澄みて底石數ふべし。兩岸の絶壁は相距ること始めは十町内外五六町となり一二町となり終に十間内外となる。その絶壁の頂は一様に平かなるに非ず。巖峰の連續にして支溪をりく單調を破る。その巖峰は流紋岩にして柱狀の節理を成す。奇怪と云ひても盡

さず。靈妙と云ひても盡さず。唯これ鬼神が天上に樓閣を造れるかと思はるゝばかり也』

之等の奇巖に對して乗合バスの案内嬢は櫻雲壁、大羅漢、小羅漢、蠟燭岩、萬景壁、殘月峰等々節面白く幾多の名を述べる。見上げるだに冷りとさせられる奇岩巨巖の連續せる中を清冽なる石狩の溪水急湍となり瀨となつて流れる。長さ十六キロの層雲峽の中程にある層雲峽温泉附近は『河原廣く且つ長く川の中に巨大な蓬萊巖があり二つの丸木橋にて對岸に達すべく巖頭に立てば大雪山の數峰の頂も見えて川を見上げ見下す風致も浮世のものならざる也』と述べてゐる。

而も層雲峽の絶景は温泉から川を溯つてその眞價を發揮する。即ち桂月は更に景を敘して曰く、

『一峰直立して高さは二千尺もあらむ。峰の正面は流紋岩の長柱を連ねその長柱は峰の兩側面に及ぶ。余巖峰を見ること多けれ共、斯ばかり不可思議なる巖峰



を見たることなし、驚歎して腰を石におろし煙草呑みても物足らず一杯を傾けて山靈に謝す。嗚呼これ山か。山ならば神鑿鬼斧の奥手を盡したる也。昨日層雲峽に入りて鬼神の樓閣かと思ひしも今日より見ればまだほんの鬼神の門戸なりし也』又曰く、

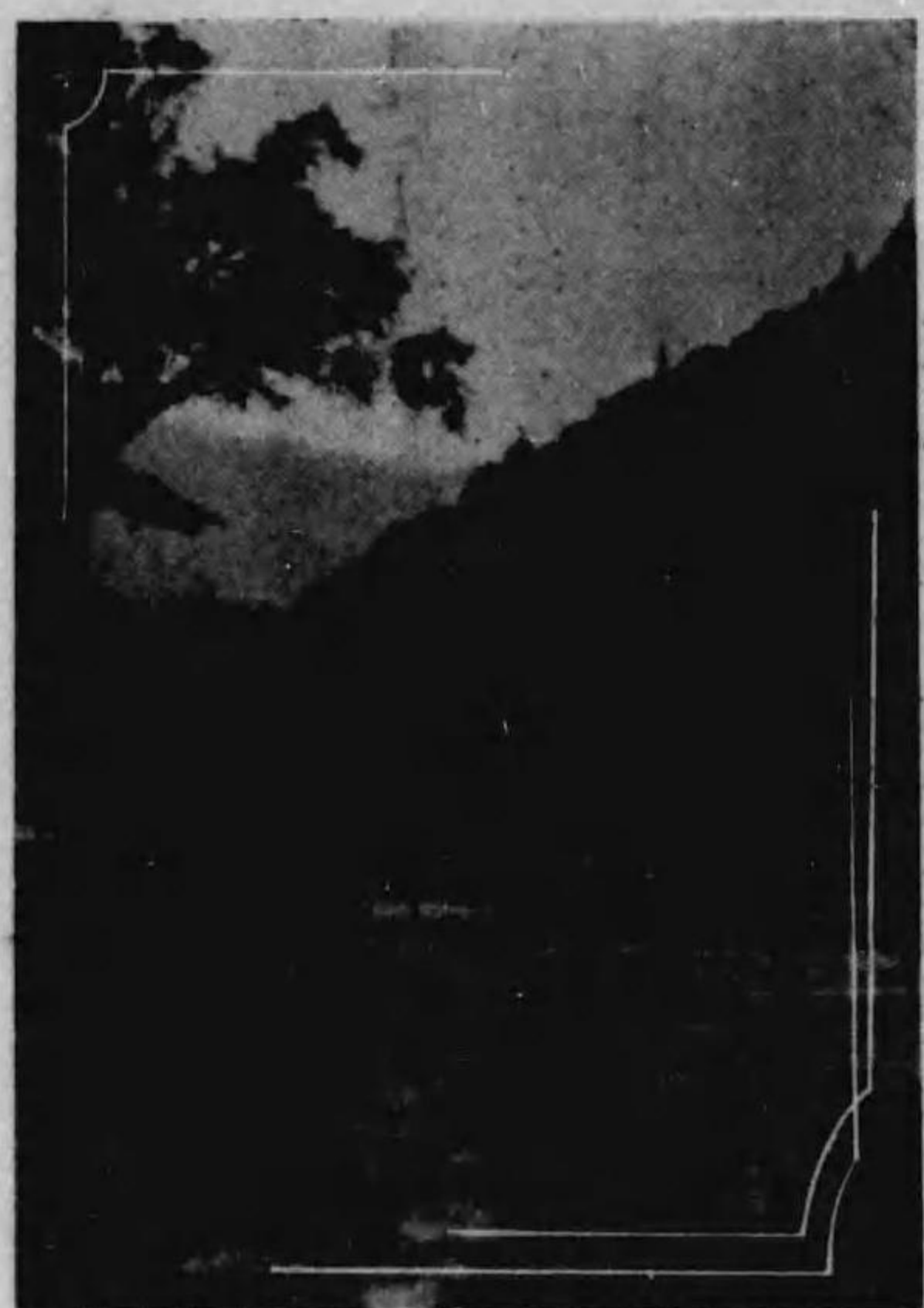
『昨日は鬼神の門戸を鬼神の樓閣と思ひしが今日は始めて鬼神の樓閣を見たり。その鬼神の樓閣一下して牆壁となるかと思はれしが又崛起して二長瀑（註、銀河、流星と呼ぶる）を挂く。右なるは三百尺、左なるは五百尺もやあらむ。南畫も描いてこゝまでは到らずと又も一杯を山靈に捧ぐ。その樓閣の石柱續きて盡くる所を知らず』

之れより小箱の壯觀となり大箱の絶景となり層雲峽の景觀は頂點に達する。例へば諸氏よ小箱に在つて桂月が鬼神の樓閣と述べしものの中今呼び名を天城壁と言はれる岩壁につき述べんか、高さ六百尺幅數百尺にも達する削れる如き垂直の大絶壁は折からの夕映に一入高く聳へて天を摩し急湍岩下に泡を噴き一度その頂に據らんか如何なる天魔鬼神をも容易くは寄せ付くべくもなからむと思はれる。更に曰く、

『鹽谷温泉（註、今の層雲峽温泉）迄の巖峰だけにても天下の絶景なるがこれなほ鬼神の門戸にして

温泉からが樓閣也。その小箱に至るまでの神秘的光景は耶馬溪になく昇仙峽になく妙義山になく金剛山になし。天下無双也。層雲峽を窮めたるものにして始めて巖峰の奇を説くべき也』と結ぶ。

以て如何に雄大壯絶ならびなきものかを知るであらう。小箱から愈々大箱に入らんとする頃早や薄闇迫つて前進を許さず。不倒岩なる巨巖の頭上を蔽ふを走りぬけて宿に還る。桂月氏が前に述べた蓬萊巖を中繼として架けられた丸木橋は今は吊橋となり層雲橋と呼ばれ巖上には桂月氏の句碑が立つてゐる。晴れた晨など此處に立てば大雪山連峰を仰ぎ、伏しては石狩の清流を掬すべく、對岸朝陽山の翠黛の下幽邃の氣漲り身は仙境にあるを思はせる。八月土用中なるに夜となれば火鉢を圍み吐く息のほの白く浮ぶのも趣きがある。地圖をひもどけば北海道山岳の雄を誇るに足るものは旭岳を中心とする所謂大雪山彙であつて本道中央山脈の骨髓をなし晴れた



日には旭川平野を走る汽車中よりその雪峰を仰ぐことが出来、層雲峡温泉地より數時間にして登れる。温泉は鹽類泉とか病なき身の疲れを醫するにはうれしい處である。少々寒い。

八月七日 早朝出發阿寒に向ふ。上川驛近くに來て見返れば左より黒岳、桂月岳、凌雲、北嶺等旭岳の前衛部隊が見送つてゐる。驛で朝八時十四度の低温だ、袷が欲しい位肌冷たさを覺へる。構内には白樺の待合室を作つて旅行者に提供してゐるのも氣持がよい。話は變るが昨日旭川からの車中土地の人が北海道は冬は冷たいが寒くない、内地は冷たくないが寒いと云つた。その相違が面白いと思ひ出してはこゝは冷たいと語り合つた。

上川から遠輕までは山又山の大森林を上下する。上越、奥白瀧附近は分水嶺だ、右を見ても左を見ても數十尺に及ぶエゾ松、カラ松等白樺も交る大原生林行けども、盡きざる山又山、谷又谷を縫ふやうにして通つてゆく。下りになつたと感ずる頃は既に石狩から北見の國へ入つてゐる。

遠輕から野付牛に至る左右の山々には金、銀鑛あり盛に採掘中の由、同乗の一客はこれから鑛區願ひを出しに行くとか、何某は二ヶ月間に何十匁かの金を掘り出したとか、十萬分の一あれば有望とか等々話しは現實の景氣のいゝ所に入つて車中は賑つてゐる。あれも金山ですと指すをみれば成程山腹

に工事場が見えてゐる。インフレ景氣なるかな、人事ならずとき、耳を立てる。上生田原附近はそのためか乗降が激しい。

野付牛はこの附近網走に次ぐ新進の都市、此處より美幌、北見相生へと向ふ。美幌峠の展望はかの狩勝峠にも勝るとも劣らないとは近時耳にするところなるも生憎の悪天候にて行けなかつたのは残念だつた。北見相生より阿寒湖までバスで約二十二キロ、途中は同じく原始林にして晝尙暗き羊腸たる道を上る事時餘、「こゝが釧北峠です」と云ふ聲で今や釧路と北見の境に來たことが判る。下り坂となつて展望臺に暫時停車すれば下方迫りくる夕闇に仄白く光つてゐるのは阿寒湖だ。之を挟んで右に雌阿寒、左に雄阿寒の兩岳は、何に恥ぢてか白雲をまとつて肌を見せぬ。フツプンスプリが右方中腹まで見せるのみ。足下に廣く黒く延びるは鬱蒼たる密林地帯だ。全貌を眺めるのも良いがかゝる雨雲にボカされた山水畫も一寸みられぬであらう。

抑も阿寒湖盆地たるや、「一の火山陥没地で中央火山たる雄阿寒は富士形の英姿を現して海拔一、六〇〇米頂上には著しい火口なく、全山針葉樹にて覆はれてゐる。雌阿寒はマチネシリ、ボンマチネシリ、阿寒富士より成り海拔一、五八六米活火山で山嶺には青沼赤沼の二湯沼あり四周に爆發龜裂があ

つて凄愴を極む」とある。雌阿寒岳よりはオホーツク海、太平洋、釧路十勝の平原を望み遠く石狩岳



がしなくていよとの話した。尤もこの事は彼等にとつて好い事か悪い事かは判らない。焼酎一本を御

大雪山に對し風光雄大である由、時間に餘裕あれば是非登り度く思つた。阿寒湖は兩阿寒岳の中間にあり周圍二十七キロ餘の火口原湖で海拔六〇〇米の處。湖畔五十戸の中アイヌの家が六戸。中で頭領とも言ふべき土佐藤太郎君を訪ふ。今年七月下旬さる宮様が御出の節一諸に寫眞に入つたとかその胡麻鹽交りの長髯を賞めると彼氏得意になつて何度もく抜いて見せる。餘程御自慢らしい。皆がほめると尙しごく。全くきりが無い。宮様の御髭もきれいだが私の鬚は尙いゝだらうと自慢する。私はチューサン(十三)の時からシヤモに使はれてゐたので日本語は迎もうまいと云つては中々人の好さそうなお爺さんだ。白老、近文あたりのアイヌと違つて人すれ

土産に差上げる。

ピリカメノコとトナセノモロコ

ニサタチシコロバシヌラシ

この歌の意味は何度も讀めば意自ら通ずる。之れに哀調を帯びた譜をつけ、アイヌ服をまとわして、唄はしたらどんなに聞き甲斐がある事だらうと思つた。

この夜七時すぎ投宿、今回の旅行では最奥地まで来たわけである。宿は清湯豊富に湧き出る温泉を持ち林の中の一軒家である。定山溪、登別に比しこゝは清淨なる氣分の温泉であり靜思して默想し得る此の上なき處と一旅人は言つてゐた。更けゆくにつれ靜寂の中にかすかに松風の音、阿寒川のせゝ



らぎのみが枕邊にさゝやく。

八月八日 明くれば午前四時と云ふに早くも起床、阿寒川の水源地瀧の口附近よりモーターボート

にて湖畔を半周する事になった。阿寒湖は前述の如く雄、雌阿寒岳、フツプシヌプリの山袖に包まれた火口原湖で船の進むにつれて湖岸一帯千古不滅の原始林に覆はれ、その間諸所につゝじ、秋もみじ等點在し美観は何とも云へない。概して雄阿寒沿岸がよろしいやうだ。早朝のため雄阿寒の雄姿、雌阿寒の噴煙を眺め得ざるも湖上を悠遊すれば底知れぬ紺碧の水は澄み切つて明鏡の如く正に文字通り神詔縹渺として仙境に遊ぶの興趣がある。あれがオンネムシリ島で最大の島でありこの附近が最も深い處水深約三〇〇尺位ですと案内者が教へる。少し天候が良くなつて山々の肌から丸で浮き立つやうな白雲とも霧ともつかぬ雲が浮き上る。と共に雄阿寒が裾から少しづつ湖面に姿をうつし始める。あたりは未だ醒めやらぬ時分だ。みとれてゐる中に口笛さへも出てくる。

オンネムシリ島をすぎて南岸に近づく頃沿岸のボツケ（泥火山）に舟を寄せる。見れば汀數個所には熱湯を噴出して白煙を上げ、又小丘を上げれば暗灰色の熱泥の噴出する様坊主地獄の觀がある所に來る。丘上より俯瞰すれば今過ぎたオンネムシリ島は全島樹木を以て蔽はれて夢の如く浮んでゐる。フツプシヌプリも雌阿寒もまだヴェールをかぶつたまゝだ。

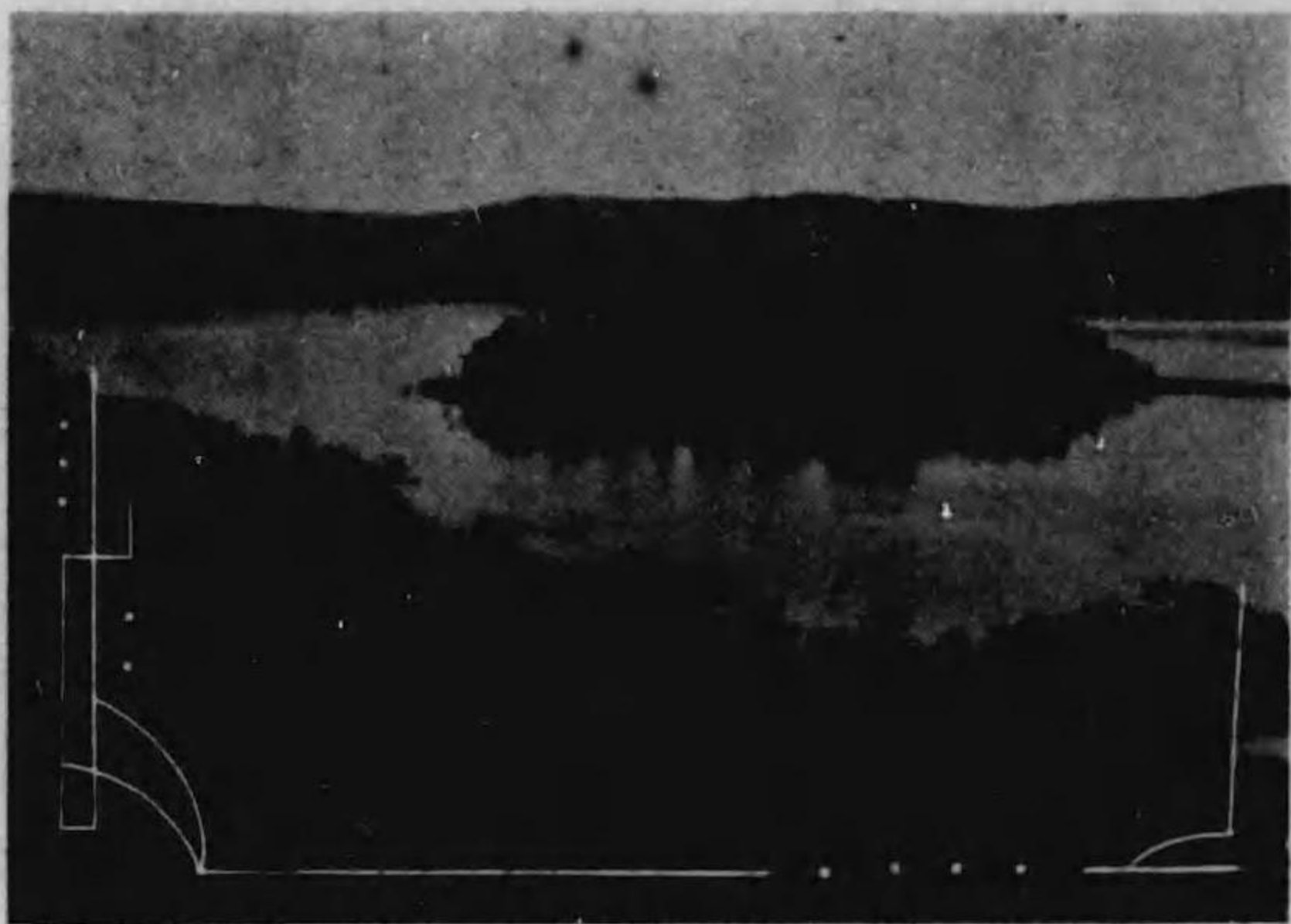
北海道では此處が最も原始的な神祕境とされてゐる處、底知れぬ紺碧の水と相映じて湖を圍む兩阿

寒の雄姿を背景とした風趣は幽邃の氣満ち／＼て原始的山水美の極致とされてゐる。

天然記念物蘘藻を見てから舟を棄てた一行は前夜會つたアイヌ土佐藤太郎翁と一しよにカメラに入る。彼氏も正装してうつりたかつたらうが急ぐ我々には待つ時間がない。即ち日本服浴衣姿の彼等夫妻とうつたわけである。尙藉すに時日を以てすれば屈斜路湖を圍りアトサヌプリ（硫黄山）にも登り度いと思ふ。

尙昨日班長の發案により偶然狩勝峠を廻れるやうになつたので勇躍ホテルを出發一路山中を突破して大樂毛に向ひ池田、帯廣を通過して之れが偉觀を眺める事になつた。

阿寒より大樂毛^{オダシゲ}まで約六〇キロ、此の間殆んど原始林を貫く阿寒川に沿つて下る。七曲りの嶮を過ぎると道路はやゝ平坦となる。徹別附近にて小憩すれば今朝は姿を見せなかつた阿寒富士が雲表に突出して後方に見える。



あたりはなだらかな傾斜の小平野だ。大樹をきり倒しては段々と山を畑に拓いてゆく尊き開拓者の努力も並大抵の辛苦ではあるまい。附近は農家が二軒三軒と一軒、二軒おき位にあつて平和な陽光に包まれてゐる。各家毎に、きまつたやうに放牧場が設けられ牛や馬が悠々と寝そべつてゐるのも田園らしく家の構造が内地と全然異つてゐるのも趣きがある。作物も山間から丘、平野となるに従ひ段々變つてゆく。道路は二軒、三軒位づつ殆んど一直線をなして平野を横ぎり遠く見えなくなると思はれる處が即ち曲り目となつてゐる。この氣持の良い程眞直な道路は内地では絶対に見られぬ點でありドライヴとしては爽快極まりないものであつた。

大樂毛まで二時間餘で走破、太平洋の浪寄せる驛前廣場には丁度馬の驪市が開かれてゐるのに會つて喜んだ。毎年八、十、十一月の三回開かれる由、今夏も四千頭ばかり集つたとの事。驪市の催される屋内に入れば中央正面に構へてゐるのは畜産組合長であらう。右上壇には値を呼び上げる三人の壯漢が居る。屋内土間をめぐつて博勞が目白押しに並んでゐる處へ、一隅から馬が引入られ場内を三周、四周する間に壇上の壯漢は先づ最低値を呼び上げる、之れが立合の博勞によつて段々と驪上げられてゆく。例へば始め三十圓位のものが百圓、百五十圓、二百圓となつて之れ以上呼び値が無ければ

壇上の壯漢は聲をからしつゝもう無いか、二百兩もうないかと繰返し應答無き場合はシャン／＼と手を拍く。之れで値がきまつたわけで最高値をつけた博勞はその馬について出てゆく。仲々の盛大さだ。長くも今上陛下が攝政に在りました頃御成りになつた由御座所も廣場に見える。

こゝより函館行列車に乗る。十弗あたりから十勝川に沿ひ沿線はひろくなり池田を過ぎればやがて十勝平野の中心地、帯廣である。物資集散に活氣を呈してゐる都市だ。新得附近より勾配をたどる。間もなく十勝、石狩の境に近き新内驛につく。視野は上るに従つて段々廣大となる。

新内より峠までの景觀こそ名高き狩勝峠の絶勝となる。即ち北海道の中央を南北に縦走する脊梁山脈——地圖をひろげれば北海の第一峯旭岳をはじめ第二峯の石狩岳、活火山としての十勝岳之等は凡て石狩、十勝の國境に蝟集してゐるその大山脈——を根室本線が横斷する處であ



りその雄大なる展望美は之れ亦北海道でなければ見られぬ壯観である。足下遠く延びるは今まで我等が走つて来た十勝平野であらう。その裾のひろがつて盡きる處は太平洋の蒼波となるであらう。「新八景の一狩勝峠」なる木標の立つ所が汽車から望むには最上の場所である。まことに密林も野も丘も凡てがこの峠の前にひれ伏してゐるかのやう、人工の美の如何に大自然の前には哀れなるものであるかを示すかのやうに、この峠は悠然と構へてゐる。この俯瞰的眺望を更に雄大にし遙に太平洋の波濤をも双眸に收めんには、峠の守護神のやうに立つサホロ岳に登らねばならぬ。サホロ岳は前記春梁山脈の末流に伍し更に十勝日高の國境に連るトツカベシ山彙の起點をなすもの、傳ふるところに依れば約百年前松浦武四郎はこのあたりを跋涉し其の「十勝日誌」にもサホロ岳の名を記し又十勝石狩の兩アイヌが大争鬪をかもした際能辯な少年がサホロの高原にのり出して十勝アイヌの酋長を説破したとかの傳説もこの山川草木に心ある彩りを與へる。又バツタの大群がかつて石狩から十勝に侵入しやうとした時にこの峠の各所に網を張つてやつと喰ひ止め、ためにバツタの死屍累々として山河時ならぬ黄に染んだと言ふ話、北海道の地勢さすがに大陸的と思はせるとある本に書いてあるが全くその通りだ。飽かぬ大自然の眺望を満喫すれば汽車は既に石狩の國に入る。空知平野を横斷して下富良野、瀧川を経て

夜九時半札幌着。

直ちに豊平に至り電車にて定山溪温泉に着いたのは十一時、本道に於ける最長途の汽車旅行であつた。定山溪温泉は泉量豊富の上に溪谷美と相俟つて登別に劣らぬ歡樂境となつてゐる。夜更けて月見橋に倚れば清澄な靄氣は測々として身に迫り谿聲は瑟瑟として胸を搏つ靜閑な谷底だ。橋下の河床より濛々と湯煙を上げて宛然河中が温泉プールとなつてゐるのも奇観である。

八月九日 定山溪から中山峠を突破して洞爺湖を巡り虻田へ出るコースを豫定したのが道路修理中のため不能となり止むを得ず札幌に引返す。豊平川に沿つて電車は進む、やがて眞駒内牧場を過ぎる。この頃より空は晴れて白い雲が動き牧舎からは物憂い牛の聲が聞へて來そうだ。曠野の朝の静けさ何處か異國の詩にでもありそうな景色、地平を撫でゆく風に牧草はほのかに匂つてゐる。

間もなく香りの高い林檎畑の中をすぎて豊平に着きアカシヤの並木ボブラの通りの札幌に入る。エラムの都として特異な風景を醸し出し時計臺の時鐘に明け暮れるこゝの情緒には得も言はれぬ味があるとか。石狩平野の中心地として旭川と同様整然たる街路だ。文句を言へば、家が揃つたらどんなに立派になるだらうと思ふ。月寒の牧場は近くにあるが時間の都合で他日に割愛。平和な羊の群が此處

彼處に大自然に溶け合つてゆる／＼と幸福を満喫してゐる有様、あたかもミレーの畫にも似て南歐の風物そのまゝの如きを心に畫き乍ら朝九時半の函館行急行にのり札幌に別れる。

間もなく北の神戸小樽を通過、今や新進留萌と覇を争ひつゝある貿易港。市の北平宮の洞窟の岩壁に刻まれた古代民族の遺した『我は部下を率ひ大海を渡り………戦ひ………この洞窟に入る』の謎の古代文字は北國の港の情緒と共に名高い。港のすぐ傍は高島岬だ。目をつぶれば車輪のひびきに消され乍らも「忍路高島及びもないが」の江差追分が哀調を帯びて聞えてくるやうだ。

汽車は一路函館指して南下する。

我々が今日まで四日間を巡つた處は日高、天鹽、根室を除いて他の七ヶ國全部に足跡を印してゐる。之れは最短時日を以て最大地域を巡つた事になり更に思ひ残すことはない。

今日は函館から登別へ——明日は旭川から層雲峽へ——次は美幌から阿寒へ——そして大迂廻して札幌定山溪へと、思へば熱河征服の快速挺身隊のやう、毎日／＼數百キロづつ走破しては新進の都市、大平野、大原生林等々と巡つてゐる。實に痛快な氣がするではないか。敢へて名所舊蹟を探り歡樂を追ふて移動するのみが旅行の本義ではあるまいと思ふ時に今回のコースは非常に愉快且つ有意義だつ

たと信ずる。

俱知安あたりより後方羊蹄山を遠望しつゝ長萬部に來りこゝよりは往路を逆行して夕刻函館着。滞在した時日は僅かに四日あまりに過ぎずと雖も、等しく別離の情に堪へやらずで松前丸上より願れば蝦夷の昔より斯くありしものか出船を追ふて見送りの人々は岸壁より伸びあがりいつまでも陸と船と相呼應し想ひをのせた我等の船は段々と遠ざかり行く。葛登支岬の燈臺が燦めき出してから、あたりは愈々うす暗くなる。夕闇に消えてゆく懐しい駒ヶ嶽を忘れまいと眼底に残して船室に引上げんとする頃、まわりは眞暗となり只船首にくだける浪のみが白い。

—了—

南紀州を廻る

高桑生

有樂會南紀廻遊 豫定表

八月四日	東京驛發	午後七、一〇	神戸行急行、車中一泊
八月五日	大阪着	午前六、五八	省線を利用大阪天王寺驛に至る
	大阪天王寺驛發	同 七、四〇	阪和超特急乗車々中朝食
	東和歌山驛着	同 八、二五	紀勢西線急行に乗換
	同發	同 八、二八	白濱温泉に直行
	紀伊白濱驛着	同 一〇、四九	明光バス連絡約十分温泉着
	白濱温泉着	同 一一、〇〇	中食、及一泊
八月六日	白濱温泉場發	午前五、三〇	明光バス
	田邊港發	午前六、〇〇	大阪商船勝浦航路(天保山—勝浦港)の船に乗 船海上潮岬を見て勝浦に至る(約四時間四十

(分)

勝浦着	午前一〇、四〇	中食
勝浦發	午後〇、三〇	自動車にて那智瀧見物
那智山着	同 一、〇〇	
同發	同 三、三〇	自動車利用
勝浦(越之湯温泉)着	同 四、〇〇頃	一泊
同驛發	午前五、五九	紀勢中線利用
新宮着	同 六、四六	
同	同 七、三〇	プロペラ船にて熊野川を廻り瀨峽見物の後本 宮へ、途中晝食
本宮着	午後三、三〇	
同發	同 四、〇〇	自動車
湯ノ峰着	同 四、一〇	一泊

八月八日

同 發 午前 八、〇〇 自動車

朝 來 着 午後 二、〇〇 紀勢西線に乗換 中食(汽車辨)

同 發 同 一、四三

和歌山市着 午後 三、五七 約二時間和歌浦見物夕食

同 發 同 五、五六 汽車(和歌山線)にて橋本乗換高野ケーブル

カー乗車

高野山着 同 八、四〇 女人堂へ自動車連絡お寺へ一泊

八月九日

朝より案内により山上見物

高野 發 午前 一〇、三五 大阪に至る

天王寺着 午後 三、〇四 中食市内見物及夕食

大阪梅田驛發 同 八、五五 歸途へ、車中泊

八月十日

東京驛着 午前 八、三〇 朝食、解散

第一日 八月四日

東京から 汽車の中泊り
大阪まで

維時昭和九年土用も末期の八月四日我が紀州廻りの一團は午後七時十分發の神戸行に乗るべく東京驛にと集つた。一行凡て十二名遅参者もなく夫々椅子にも掛けられた。

間もなく時間だ、汽笛と共に愈々旅路の第一步を踏み出した、有樂町驛通過、銀行を右に暫しの別れを告げて新橋に停車、品川で停つて横濱へ着いた、八九人ドヤ／＼と荷物を抱えて入つて来たが満員立ン坊だ。發車の合圖に時計を見れば七時四十五分、急行ではあるが櫻木町行省線電車と大して速いとも思へぬ。

大船で水兵さんが大鞆持つて大分入り込んで来た、非常時日本を守る航空隊の徽章つけて居た、一寸敬意を表して話し合つたら休暇で故郷の阿母さんの乳呑みに行くのだそうな、何れもニコ／＼して居る。

國府津へ来た、救世軍の夫婦らしいのが乗り込んだ、寝てる人を起したり人の荷物を除けたり愛す

る彼氏を腰掛けさせた貞淑振りには感心させられた。

窓を開けても暑いので御無禮ながら上衣からズボン迄脱いでる爲めか逆も手足が痒ゆい、第一回の検札も済んで居る、蚊の奴も急行券買つて来たのか？ 談笑の中にか山北へ着いた、御殿場通過沼津で一才入り替りがあつた、十一時廿三分静岡着、六七人の乗降があつたが大半はゴゴチない格好して鼻の下長くして何かの夢路を辿つてゐるらしい、班長閣下も何の夢を見てか頻りと口をムニヤ／＼動かして御座る。

濱松着が十二時四十五分、一度眠つた連中も大分醒めて冷いものなどピチャピチャ飲み出した。中には横濱邊から二合瓶の驛傳で此邊では大御機嫌正にお天氣の絶頂の人なども見えた。

汽車の音が變つた濱名湖だ、向ふに大分灯が見える釣舟も出て居る廿三日の上弦の月が水に映つてキラ／＼光つてるのも美しい、之が晝間だつたら定めし好い眺めだらうに惜むらくは遠目が利き申さぬ。

豊橋に着いたのが一時半眞夜中だ、驛賣りの聲もなんとなく物憂げに聞える、といふのはこちらが睡氣さして来た爲め？ 車窓枕に發車の聲も夢のうち、いつか全く魔睡劑にかゝつてしまった。

ネン／＼と背叩くやうな汽車の音

「琵琶湖だ／＼」で眼が醒めた、間もなく米原に着いた、四時半だ黎明曉を告げてあたりが見えて来た、先づ天氣は好さそうだ何よりだ。北陸線の乗換やら洗面やらで一頻りザワめいた。

鏡山、三上山を左に唐橋、石山と見ながら大津着、六時に京都着。列車は殆どガラ空きになつた。此あたりの山河凡て何となく柔らかな感じがある。

「お早うさん！ 大けに」など如何にも物優しい。

言葉までおゝけに優さし京女

これでは句にもなりませんまい。

六時四十三分大阪着郊外電車？に乗換へて天王寺に向ふ、此邊本所深川邊の工場地帯の夫の如き感じがする、唯右に有名なる大阪城の天主閣が聳え立ち朝日を受けて一層クツキリと浮き出てるのは如何にも我々に物珍らしい、第一日の行程は之で終つた譯である。

第二日 八月五日 大阪から 白濱泊り

天氣は上々、チリ／＼照り付けて来る、何れも寝不足な眼を瞬きながら天王寺驛で待つこと約三十

分。

阪和急行に乗車、恰度日曜ではあり海邊へ涼を求めに出かける人達で二臺の車が忽ち満員の盛況だ七時四十分發車、超特急の名に叛かず速いはく、涼しい至つて乗り心地のよい電車だ。

窓から眼をやれば此邊一體田園よく開けて見渡す限りの青田、灌漑用の風車が所々に緩々廻はつてゐる、向ふの山の裾には白壁の民家が點在して如何にも清々しい。

やがて東和歌山に着、こゝで紀勢西線に乗換へた。至つて舊式極る客車だ、然も安石炭を使用する爲めか阪和線に引換へて煤煙は遠慮も會釋もなく入つて來るし迎も暑い列車だ。

有名な和歌浦が見える遙か向ふの山が紀三井寺だそうなら、「歸りに寄るぜ」いつてるうちにも汽車は煤を吹き飛ばしながら南へく。

箕島、藤並驛あたり有田川の沿岸此邊一帶山といはず丘といはず蜜柑の木で一パイだ、枝も撓は、に青い球が鈴なりに生つてるのも見事だ來年の正月あたり此中の一つ位我々の口へ入るのもあるかと思へばなつかしい。御丁寧にも一つくサツク被せてあるのも幾十本かあつた、定めし手數のかゝる事だらうと餘計な心配してゐる人もあつた。

餘り感じのよくない汽車ではあるが西海岸を縫つて行く線なのでトンネルを出れば海、海が隠れ、ば亦トンネル、然も眼下六尺位の處で岩に碎ける浪は沫となつて車窓をかすめる、遠く眼をやれば遙かに白帆が點々と「沖の明るいので白帆が見える」では聊か口調がよくないが紀文大盡の昔が懐はれる。

道成寺驛へ着いた。驛の直き左手の山がお寺だ「歸りに寄るぜ」といひながら四ツ五ツ小驛を過ぎて田邊に着いた。

此處は大阪商船の發着所があり白濱、椿、龍神等の温泉客は此處で上陸するのが好いそうである。數々の宿屋は軒を並べて佳なりに賑かな町だ、間もなく白濱口に着、時に十時五十分。

夫からバスで約十五分、暫く雨のないフカ／＼の道を砂塵りを立て、白濱に着、我等の宿館白良莊に入る、バスの車掌嬢の七五調で白濱紹介はサワリの處だけは今に忘れられぬ。

早速入浴して汗塵りを流して晝食の膳に就く、宿の庭木戸から先は直ぐ海で眺望は中々佳い、海から涼しい風が風鈴をならしに來る。

腹の皮が突つ張つたら眼の皮が弛んで來た。重ねた座布團に足をのせ天井見つめてたらいつの間に

か迎もいゝ気分になつて来た。

「足を天井に節穴見てりあ、座禪せずとも無我に入る」

「ボートのお仕度が出来ました」の聲で各自手拭頭に尻ツ端折りで海岸へと飛び出した。

成程純白雪の如き細砂を敷きつめたる文字通りの白砂、青松の岸邊に青波靜かに寄せては返へず遠淺の水に海水浴客の嬉々として泳ぎ廻つてゐる様は實に／＼好い眺めだ。殊に珍らしいのは海中から温泉が冲天高く噴出するなど如何にも壯觀を極めてゐる。全部揃つた處で記念撮影をやつた、どんな風に撮れる？

夫からモーターボートで千疊敷やら三段壁、圓月島等の名勝を探つて京都帝大の臨海研究所なるものを見た、浦島太郎の乗つた龜の子孫や凄^{スゲ}え海蛇やら色々珍らしいものが澤山



見えた、

尙珍らしいのは此邊一帶熱帯の珍花濱木綿^{ハムキ}や野生の水仙が簇生してゐる事である、定めし其道の人が見たら興味の湧く事だらうが惜むらくは我々には。折柄の日盛が眞上にカン／＼照り付けるのでソコ／＼ボートで引返へす。

腕に自信の二三は早速海へ飛び込んだ、我々は磯づたへに湯崎

へ向つた。

此處は有馬道後と共に古くから知られた温泉

の一つで有名な湯崎七湯といふのがあるそうなの我々の入つた崎の湯は自然の岩窟が浴槽になつ



てる何だか原始的感じの深い温泉だ、共同浴場で一人前金五錢也づゝ徴收してゐる。

日が落ちた、膳が出た、白濱音頭や本場串本節など賑かに拜聴した、歡談數刻の後、白濱夜の街を散歩して床に就いた、第二日目は斯くして面白く終りを告げた。

第三日 八月六日

白濱より 勝浦灣越の湯まで 越の湯温泉泊り

午前三時半といふのに起された、半殘の夢を噛みつゝ目を擦りくゝ床を出た、至つて眼が澁い、湯に飛び込んで漸く人心地がついた。寢不足に搗て加へての起き抜け、飯も咽喉へ通り申さぬ、仕度して車に乗り込んだ。綱不知ツナシラズに着いたのが四時四十五分、幾分あたりは明るくなつてきた。天氣は上々らしい、少し遅れた五時十分發のボン／＼蒸氣と稱するランチへ乗り込んだ、朝風渉る海上は如何にも清々しい、昨日の白良の濱や圓月島に別れを告げ田邊灣に繫留せる本船に到達した。「天祐丸」といふ至つて有り難い名だが千百噸と聞いて一寸豫想外だつた。

人品が善いのか(自惚)白良莊のマークが物言つたのか船員先生達悉しく一等船室へ案内して呉れたのは皮肉だつた。直ぐ甲板へ上つた、大部先客がある腰掛けなども殆んど満員だ。陽はカン／＼と照り出して來た、天幕の下や物の蔭は涼しいが、海上の船に居るとは思へぬ暑さだ。

市江崎を通つた頃から大分船は揺れ出した。物凄い浪が打ち寄せる、成程有名な熊野灘だ、夫にしても聞えませんが大阪商船だ、波靜かな瀬戸内海航路あたりに千七百の二千噸のといふ堂々たる船を置いて此の天下の難所へ小さな船ツツを廻はすなんて、會社も「利益がなければ」といへば夫までだが何とか改善すべき要がありやせぬかなど憤慨して見ても浪は益々荒れて來る。エレベーターで「ズーツト」昇つて「ズーフーツ」と降ろされる時の夫の如くお臍まで何處かへ持つて行かれる様な氣持ちだ歩いてもヨロ／＼する今迄盛んに話込んでた連中も黙り込んでしまつた、額に手を當て、俯向いてゐる何處からか「南無金比羅大權現」なんて至つて情ない様な聲も聞えて來る。用便に行つて一寸船室を覗いたら何れも金盥を抱えて、汚ないは／＼。ソコ／＼甲板へ飛び出した、之で決して時化シケといふ譯ではないのだそうな。

アノ暴風雨に(見た譯ではないが)アノ小さな船で、と紀文大盡の豪さ加減が泌み／＼と感心させられた。

食事の通知が來た。殆んど誰も行くものがない、會社の儲けだ(餘計な心配)

燈臺が見える潮ノ岬だ、我々は今、本州の最南端を歩いてゐるんだ、何だか非常に痛快な様な氣がす

る、岬を廻はつて方向の變る所で一層大揺れに揺れた。斯うして二十分三十分、串本沖で停船した、

荷物の積み卸しなど一頻り、波は大分靜になつて來た、蘇生の思ひだ。唄で有名な串本は左に、右に大島が手に取る様に見える。

中を取り持つ巡航船が往つたり來たりしてゐるのも至つて朗かだ。

串本は本州最南の町で冬知らずの土地、夫で夏も爽やかな涼風の爲め絶好の避暑地とある。加ふるに海岸は靜かな遠淺の砂濱續きと來てるから理想的の海水浴場なそうな、交通さへ便なら迎も物凄く發展するだらう、兎に角船つき場ではあり串本節の本場ではあり。

亦一動揺揺られながら、橋杭岩とか、浪を嘯む諸の岩壁、鯨の名所など左に見ながら勝浦灣にと入り込んだ。

紀州の奇勝は愈々變化の妙を極め此處へ來るとケロリと忘れた様に波は靜かだ。恰度山中の湖水を遊んでるやうな感がある。周囲の峯巒は松の翠濃やかに數多の白



帆の行き交ふさまは實に繪も及ばぬ眺めである。ヤガテ船は「終點であります」ガラ／＼、ボーツ／＼、棧橋へ横付けに錠は下された。

灣を廻つて浦島、赤島、湯川温泉などの廣告塔が山の松の間に高く見える。我々の宿は越の湯である、宿のモーターボートで宿の棧橋に着く。先づ湯に入つて晝の膳に就く、「天下の熊野灘を突破した」などフ／＼言つてた先刻の顔によく羞かしくもなく、中々に鼻息が荒い。足を延ばせば眼がく

つついて來る。

ウツラ／＼と漕ぐ舟よいが、

二度と乗るまい熊野灘！

夫から自動車で那智へ出かけた、路は九十九折、何回か冷やりとさせられた流石は日本第一の大瀧、直下八十餘丈、巾七丈、瀧壺の大きき一町と稱せられる二ノ瀧、三ノ瀧等所謂四十八瀧あるそうだが時間も許さず遺憾な



がら此處だけに止めた、文覺上人の荒行されたといふ文覺瀧はこの一ノ瀧の下にある。

あたりの老檜靈杉は森巖として晝尙暗く全く神秘の感にうたれる。瀧を背景にバチンとやつて貰つ

たのが此寫眞。

那智の瀧から四町、西國三十三番第一番の
札所那智觀音に詣でた土用の炎天に高い石段
は閉口の至りだ。

堂は特別保護建造物になつて居る、仁徳帝
の御宇裡形上人の開基にかゝるといはれてる
が兎に角立派なものだ。

之と背中合せに那智神社がある。官幣中社
で熊野三山の一、拜殿の奥に第一から第五殿まで夫々由緒深い神々をお祀り申して居るのも一寸外と
異つた趣きがある、境内整然として箒目の正しいのも嬉しい。暫し黙禱の後石段を下つて自動車で前
の路を宿へと向つた、歸りの山道も下り坂丈けにハラ／＼させられたのは往き以上だつた。



湯に入つて汗を流して座敷の椽先から釣を垂れたが大公望、河豚の子供だけしか引つかゝらぬ。
暫くして夕食の膳に就く、白濱、潮の岬、汽船、瀧の話……………等々素破抜きやら冷かしやら盛に
話がはづむ。

斯くして第三日も恙無く暮。

第四日 八月七日

越の湯温泉より
湯の峰温泉まで 湯の峰泊り

午前四時半起床、早速湯殿へ行つた、女が入つてた、御遠慮申上げて隣の浴槽へ行つたが未だ湯は
出来て居ぬ。マ、よど飛込んだ會釋を交したら今日瀧見物に行く夫婦者？なそうな。

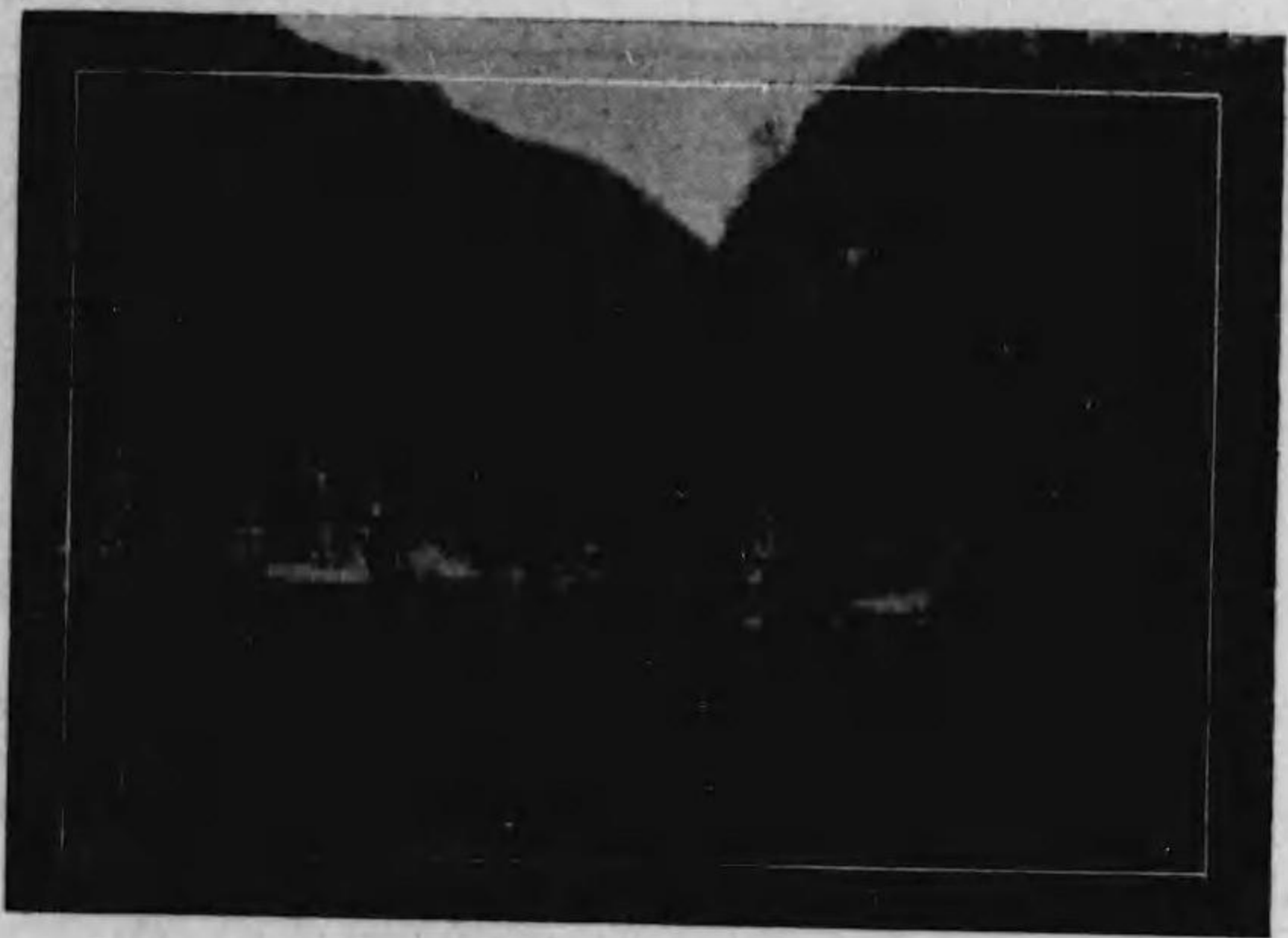
仕度も出来た、宿の人達に見送られて那智驛に着、七時發のガソリンカーに乗つて新宮着、此の線
も南紀の東南海岸を通るので海水浴場岩礁、怒濤凡て定跡通り。

新宮市は紀州家國老の居城した處で人口三萬三千餘、縣下第二の都會だそうで、奥深い熊野の山々
から伐り出される多くの木材の集散地で中々に賑かな有福らしい町並だ。時間が許さぬので街中を乗
打ちだ。殊に遺憾だつたのは國寶の多いこと全國三社の一に數へられる官幣大社速玉神社へ參拜出来
ず鳥居を拜んだ丈けであつた事だつた。

熊野川に至り有名なプロペラ船に乗込む、先刻湯殿で一緒になつた御夫婦と軍人が二人外に三人が同船した。七時五十分愈々エンヂンがかゝつた騒々しい話も何もトント聞えぬ、早速屋根天幕を

巻いて銘々頭を突ん出した。兩岸の景色、水の流を奇異の眼を睜つて眺める、深い處は二百尺もあり眞青だが浅いとなると膝まで處か礫が水の上へ出てる、此處へ來ると船頭さんは大變だ非常な努力で竿を突つ張る、船底は今にも破れるかと思ふ様に「ゴロ／＼、モリ／＼」無氣味極まる音がする。何だか一寸變な氣持になる。

京の三十三間堂棟木の柳も此處から出た、其處に見える祠が「お柳」を祭つたものである。向ふの瀧は白見の瀧と云つて那智の裏瀧である、あの先きのが三段瀧、之が猪倉の一枚岩など説明を聞きながら行くこと十一里、國立公園天下の瀧峽へと乗り入れた。



石まで流す激流の熊野川の上流に斯くも靜な處があるかと思はれる程靜寂其のもの、清流に鮎やら鰻やら數々の魚類がいつも愉快げに泳ぎ廻はつて居るのも手に取る様に見える。聞けば五十尺まではよく見えるそうなる。

夫から洞天門を入つて龜岩、天岩戸、六枚屏風岩、獅子岩一名濱口岩、松茸岩一名……可笑味タップリの説明宜しくあつて此間廻々實に三十一町上瀧迄心ゆくまで奇景を賞した、此の先きは所謂奥瀧で、河が細く眼界が少し小さい丈けで大した變りなし、夫に船の通れぬ處が何ヶ所かあり畫家か詩人の日數かまはぬ人でなければ、といふので引き返して瀧ホテルに休憩。此ホテルは斷崖の上に建てられた四層樓、眼界は聊か狭い憾みはあるが實に捨て難い眺めである。

殊に面白いのは小さな針金橋と稱する吊橋の向ふに別館があるが此處は和歌山縣、我々の居る本館



の方は奈良縣然も河の向岸六枚屏風岩の處は三重縣なそう、折からの暑さで此方の岸から向岸、斜に引返へし、三縣を股にかけて泳ぎ廻はつてる豪傑連もあつた。

ヤガテ食事も終つて亦プロペラ船の人となつた。下りになるので一層の速さで北山川を下り宮井の三ツ股から今度は歴史に名高い十津川を廻り、行く事四里、此間眼が肥え過ぎた爲めか興味を咬る様な大した景色も御座らぬ。本宮着、下船、時に午後二時、暑さの眞最中だつた。

ザアツと夕立が來たので熊野自動車の發着所から傘を借りて、然も相合傘なんかで熊野三社の隨一熊野座神社へと參拜した。小さいながらも有名な、音無川を渡つて鬱蒼たる老木の間の階を上れば神氣自ら襟に充つる、官幣大社である。社殿は第一殿から第四殿まで、八咫鳥を初めとして非常に山緒深い古くからのお宮である。境内も奇麗だつたが八咫鳥の糞の様なのが所どころに引つかゝつてる。歸りの途に那智石の硯やら至つて變な形の奇石など方々に並べてあつた。噴井戸に西瓜が冷やしてあつたには食慾を咬られた。

噴井戸や冷えし西瓜の浮き沈み

夫から自動車に分乗して湯の峯温泉に向ふ、途中は有名な熊野の山奥道、左は斷崖絶壁右は千仞の

谷、昨日の那智道に決して負けぬ、ヒヤ／＼させられる處が幾回かあつた、約一時間半目指す湯の峯なるあづまや旅館に着いた。

内湯のないのも一寸變つてる早速町營の共同温泉へと飛び込んだ、其代り湯槽は廣い、五六十人は優に入れる、千人風呂の小さな様なものだ。

湯の峯温泉は崇神帝の御宇に發見したもので泉効の聞え高く、文武帝を始め奉り歷朝天皇屢々此の鑛泉に御幸し給ふて居る、足利時代に遊行上人の教に依つて酒毒にあてられた小栗判官が來り治癒したと傳へられてゐる。湯は非常に熱く攝氏百度、村人の米麥、野菜の類は河中から湧出する温泉で煮てゐる態も誠に珍しい。

夕食後小栗判官の入つた壺の湯といふのへ行つて見た、大變熱いので何れも握り何かで顔をしかめて入つてゐる。出てから判官の力石といふのを動かして見たが一度位じゃ利かぬかビクともしなかつた。

泉一といふ醬油屋の團體百人ばかりが宿へ着いて一頻りガヤ／＼してた、最早旅程も半ば過ぎた、明晩は高野の山で坊さん相手に石童丸の話でも聞くのかな、など談話の中にか眠りに落ちた。

第五日 八月八日 湯の峯から 高野山泊り

一一二

四時半起床、(朝起きの習慣がついて)昨夜の團體は早立ちだ、ガヤ／＼、ガヤ／＼女達も大分交つてるので大騒ぎだった。我々は八時十五分發の自動車に分乗して愈々歸途に就く、小廣峠、大阪峠など羊腸たる山道を突破すること實に四十三哩、足はしびれるお尻は痛くなる、おまけにチヨイ／＼冷やりとさせられる、ドライブとして非常に有り難いものでもなかつた。漸くにして朝來驛に着く、途中野中の清水、秀衡の一方杉など古跡を探つた事は勿論である。

驛で少憩の後十二時三十三分發で和歌山に向ふ、車窓から眺める熊野灘の怒濤は旅程第一日に通つた處ではあるが逆に見る爲めか亦目新しい感じがする。

日高川を渡つて道成寺驛で下車、往きの約束果すべく道成寺へと參詣した、お寺は中々立派なものである、寶物拜觀、我々にはよく分らぬが何れも大したものらしい。

若いに似合はぬユーモアたつぶりの坊さんの説明を聞き、安珍に肖りたい様な氣持ちになつて寺を飛び出した、何しろ時間がない。之が悠つくり出来て、國寶安珍清姫の繪卷物の説明でも聞いたら定めし面白かつたらうに、と名残りを惜しみつゝ次驛の御坊へと自動車を飛ばした。急行の爲め道成

寺驛へは汽車が停まらぬので。

途中二三人の清姫に會つたが大したショックも與へられなかつた。

愈々東和歌山に着いた、降るのは未だ早い、和歌山へ来た、此處でもない、和歌山市驛といふのへ降りた、我々お上りさん(お下りさん?)には聊か面喰はせだ。

自動車を驅つて市を突き切つて紀三井寺へと向つた。

何分五十五萬石紀州様の舊御城下とあつて家並みもよし如何にも富有に見える。人口十二萬餘本縣文化の發祥地である、綿絲、綿ネル、メリヤス、指物などの生産多く年額二千萬の綿ネル即紀州ネルの名は餘りにも有名である。現在に於ては南海に於ける煙の都會とも稱すべく、各種工業は實に旺盛である。市の中央には有名な和歌山城が聳えて居る。天主閣へ登れば市内は勿論和歌の浦迄一目だそ
うなが時間がないので遠くの方から眺めた丈けであつた。

紀三井寺、西國三十三ヶ所第二番の札所、「古里や」の御詠歌を歌ひつゝ杖をひく巡禮の姿もポツポツ見える。境内には櫻樹が多い、花時には定めし見ものだらう。ベンチに腰をかければ和歌浦の全景を一眸の裡に集むる許りでなく晴れた日には淡路、四國の連山が手に取るやうに展開し殊に夏季には

一一三

毎年數回蜃氣樓の顯はれるのを見ると云はれて居る。今日あたり或は見えるかも知れぬ。千手觀音外二像及樓門は國寶なそうな。

引き返して和歌浦に至る、「和歌の浦には名所が御座る」と近松の麗筆に依つて古くから日本三景と並ひ天下に知られて居る。今では立派な遊覽地になつて居る。町は人口一萬餘大阪商船や攝陽汽船の寄港地で和歌山市の海の玄關とも稱せられて居る。妹背山、玉津島神社、東照宮、天満宮など探るべき所は中々に多い。一羽の鳶が浮見堂の上に大きく輪を畫いてるなど實に一幅の繪である。然し何分時間の餘裕を與へられぬ我々、凡て駈足で和歌山市驛へと戻つた、五時五十六分に乗車、高野山に向ふ。

橋本驛で南海電車を乗り捨て高野山電車に乗り替へ、お寺さんに縁の深い極樂橋で又ケーブルに乗り替へた。電車の兩横つぶした様な形だが中々乗り心地がよい。昔は針の山でも登る様に汗を流して一日がかりで登つたんだらうに成程極樂だ。晝間なら定めし大した景色だらう云つてるうちに高野山着、自動車で女人堂まで。案内所を通つて九時十五分一乗院の坊に着。先着の善男善女が甘何名とか泊つてるそうだが至つて靜肅なものだ。

湯に入つて座敷に來ると間もなく立派なお膳で精進料理が出た、見渡す限り眞面目其のものゝ顔が並んでゐる。何處押すとア、もなるものか、キチンと坐はり込んで「へーく」なんて實に高野山氣分を發揮したもんだ。一人一本宛ての般若湯も幾本も残つてゐる、恨めしそうに徳利をにらみながらお齋に就いたのも私一人でないらしい。

日本一のレイ山丈けあつて大分冷える、勿論蚊帳などは釣らぬ、至つて神妙に「偏照金剛」を唱へながら枕に就いた。

第六日 八月六日 高野山から 車中泊 東京まで

半鐘の音に驚かされて飛び起きた、朝の看經(おつとめ)だそうな。四時で未だ薄暗い、洗面をしてお勤めの終るのを待つて、奥の院拜觀と出かけた。荆萱堂、熊谷寺など途々有名な處へはチョイ／＼お詣りして一の橋へかゝつた。此處からは奥の院の淨域だ、中の橋までが九町更に奥の院まで九町、兩側には高貴のお方を初め歴史上有名な人達のお墓が澤山並んでゐる。

棺を負へば敵も味方も所謂吳越同舟? 武田信玄のお墓の向ふに上杉謙信のがある。明智光秀の少し先に豊臣家のがある。徳川家康に眞田幸村、一寸面白い取り合せである。

「ヤアあの節は失敬したね君の無茶には閉口したよ」など信玄が云つてるかも知れぬ。

「君さへ出て来なければ僕の天下になつてるのに」など光秀が述懐して居そうな気がする。其外島津前田、伊達家など有名な大名を初めとして圓光大師、法順、親鸞上人、市川團十郎などのお墓も此處にある。

水向地藏で「シヤツ／＼」と水をかけて奥の院、納骨堂とお詣りを済ませた。長者の萬燈と稱する燈籠堂では今年で實に一千百年間一度も消えた事のないといふ壽命の長いお燈明も拜んだ。

聊か腹が北山になつて来たので歸途は大急ぎであつた。

朝食後少憩の後此度は大門から寶物堂、所謂七堂伽藍の拜觀である靈寶館には全山各寺院の靈寶五千餘點其の中國寶となつてるもの實に七百餘點といふ事である、實に大したものだ。

金剛峯寺は眞言宗の總本山で主殿、別殿、經藏等に分れて居り探幽の襖繪、秀次切腹の柳の間など拜觀した、立派なものである。然し最早眼が食傷して、見る物大抵同じ様で餘りピンと來なくなつた。

抑も高野山は弘法大師により鎮國安民の法域、密教流布の根本道場として開かれた海内無双の靈場で海拔三千尺、約廿七萬坪の靈地には一千百有餘年法燈連綿として絶ゆることなく此世ながらの極樂

淨土を現はしてゐる。數百の伽藍堂塔に集る全國數百萬の信者は勿論、幽邃莊嚴なる山上の風光を探る人は四時あとをたゞす實に日本精神文化の淵藪として永久にその光輝を放つてゐる。

山内戸數 約一、四〇〇戸

山内人口 約八、〇〇〇人

寺院數 七八五人

僧侶 七八五人

特別保護建造物 六宇

境内面積 三十三萬坪（九年五月調）

といふ概況で、以て大師の偉大なる事は益々頷かれる次第である。

土産賣所は勿論、バー（酒場）もあり、食堂も何軒がある、眞白に塗つた顔なども大分見受けた。

誰やらの句に

餘所に咲け高野の奥の女郎花

といふのがあつた 今では山全體に女郎花が澤山居る。石童丸も地下で定めし苦笑ひして御座る事で

あらう？

之で今回の我々の旅程は全部豫定通り全く滞りなく終りを告げた譯だ。銘々色々の土産話を持つて愈々歸路に就く。

十二時三十五分のケーブルに乗車、高野驛で難波行に、夫から天王寺驛で途中下車、大阪市内の見物と洒落れ込んだ。中々暑い事だ。夕食後夜の道頓堀氣分を味ふべく出かけたが天下の銀座をブラつてゐる我々には大した興味も湧いて來ないので梅田驛へと引返へし東京行の車中におさまつた。之で安心、眠つて居やうが引つくりかへつて居やうが東京迄は連れて行つて呉れる譯だ。

「天氣には恵まれるし事故は起らず全く愉快に終つたね」「亦來年もやつて呉れるといふな」「此秋頃陽氣のいゝ時なら尙いゝ」など至つて朗らかに話てるうち、往きの元氣に引替へて氣が弛んだ爲め？疲れもあり旁々夜の更けるに従つて何れもコタリ〜。

遂う〜翌る日午前八時三十分東京驛に着いて終つた、明日を堅く約して解散した。萬歳を三唱して。

此旅行に於いて外のコースにはない色々の乗り物を利用した事の特筆大書して筆を擱く。

汽車、電車は無論の事、自動車、ガソリンカー、汽船、ボン〜蒸気、モーターボート、ケーブルカー、曰く飛行機船(プロペラ船)等

唯々日記係りの責任遁れに。つまらぬ文字を陳列した至つてメイ(迷)文右之通り。

因に南紀班一行の氏名は左の通りである(イロハ順)

班長	町田岐	内山信一
	細川元之介	會計係
	戸島平一郎	山下忠雄
記録係	高桑利基	前澤潔
	南保禮吉	松下市藏
會計係	村田春雄	小出義治
		佐々木辰次郎

佐々木生

南紀の印象

算盤と首引の生活から開放された南紀廻遊班一行は八月四日ネオンの都を後にして史趣と風光と人情に於て特殊の味を持つてゐる南紀を探勝すべく出發した。

我が建國創業の初頭に當つて神武天皇の東征を迎へた南紀は國史に曙光を輝かした、壽永の昔平氏没落の哀史も亦維盛入水の閉幕劇と共に最後の挽歌を熊野の海に奏でた。

戲曲的傳説を顧みるならば清姫の熱情は道成寺に梵鐘を溶かし、小栗判官と照手姫のローマンス

は湯の峰の峽地に其の名残を留め、三十三間堂の淨曲に謳はれる柳の精のミステリーは熊野の溪谷に遺跡を残して居る。

この豊かな史趣詩情は之に相應はしい秀麗な天景によつて飾られて居る。豪壯美麗な那智の大瀧、幽邃な瀨の深潭、颯爽たる九里峽の急流、勝浦を中心とした海岸一帯に亘る巖石群島の變幻極まりない美観は、其の規模の雄大にして神韻に富む爲めに一度此の地を訪れた者は深く印象づけられて南紀を禮讚せぬ者はない。

× × × ×

湖の岬

船はローリングにピツチングを續けて本州の最

南端の岬を廻航してゐる、海岸一帯は潮霧が立ちこめ白聖の燈臺の下は怒濤恠巖が有史以前のまゝの戰を續けてゐる。この聖化された悽愴な景色をながめてゐるうちに恍惚として我を忘れ大自然に溶け込んでしまつた……

申本港

我に歸ると右手に繪の様な大島が出迎へてゐる申本だ!! 「ハシケ」に乗つて申本節が近づいてくゝる、海に親しみ海に生きてゐる申本には非常時日本本の觸覺として海の生命線を守るに足る海洋的活氣が横溢してゐたのには意を強ふした。

× × × ×

勝浦と那智の瀧

動搖に幾何かなれて來た頃船はいつしか勝浦沖から其の灣内に入るべくけたましく汽笛を鳴らす。起き上つて見ると繪に描いた様な小さい島と島との間を靜かに進んでゐる。

聽て船は袋のやうな灣に入つた、奇巖と翠綠に包まれた山中の湖水の様な感じがする。

妙法山の中腹に懸る那智の大瀧を遙に望むその風光は熊野行進曲の前奏として無聲の韻律を奏でゝ居るとの事であつたがどうしても探し得なかつた事はいさゝか物足りない感じがした。

併し灣内の四圍を繞つて隨所に温泉が湧き出してゐてその温泉場に行くには巡航船を利用するところなどは全く南國的情緒漂ふ明朗な遊覽地らし

い印象を與へてくれる。

船は棧橋に横付になる、宿から若い女中が巡航船で迎へに来てくれてゐた所など全く異郷の地を訪れた我々にとつてどれだけよい感じを與へたかサービス満点である。

一湯あびて旅窓より灣内を見渡すと西方の海中に岩らしいものゝ上に黒色のタンクが見える。那智瀧の地下水が海中に噴出して淡水井となつてゐるさうだ、私は今更ながらこの勝浦の地底海底に潜む或る強い力の偉大さを印象されずには居られなかつた。

那智川の清流に沿ふて自動車をとばし螺旋状の山道をグルグル廻りつゝ次第に登つて行く中に或

る山鼻を曲つた所で溪を隔てた向の山腹から下へ見掛五六間程の瀧の一部を見出した時「想像した程のものでない」といふ第一印象を受けたがやがて車を捨て、石段を降り断崖に直面して瀧の全景をながめた時、八十餘丈の天空から落ちて來るものはどうしても水とは思へない、練りに練つた絹絲か眞綿か……

しかも夫れで決して平凡に落ちない、巖から湧き出る様にも見えるし、途中で巖に吸ひ込まれてしまふ様にも思はれるし、又虚空遙かに舞上る様にも見える、見守れば見守る程優美であつて尙且つその偉大さをしみじみと感得する事が出來た。

瀧を神體とした飛瀧神社の鳥居の前に浴衣の襟

を正し瀧に直面して恭しく拜禮する一行の姿が甚だ象徴的であつて自然と人間との接觸の間に醸される宗教的情緒を強く印象された。

× × × × ×

丹敷浦の絶景

勝浦から新宮まで長汀曲浦に添ふて輕快清楚なガソリンカーが走る、右の窓からながめると沖の方に小さい岩ばかりの島がある夫れは山成島と言つて維盛入水の哀話を秘め

三つの御山の參詣事故なう遂げ給ひしかば濱宮と申し奉る王子の御前より一葉の船に棹さして萬里の蒼海に浮び給ふ、遙かの沖に山なりの島と云ふ所ありき中將夫れに船漕ぎよせさせ岸に

上り大なる松の木を削りて泣くく名跡をぞ書き附けられる、祖父太政大臣平朝臣清盛公法名淨海親、父小松内大臣左大將重盛公法名淨蓮、三位中將維盛法名淨圓、年二十七歳、壽永三年三月二十八日、那智の沖にて入水すと書附けて又舟に乗り沖へぞ漕ぎ出し給ひける、思ひ切りぬる道なれ共、今はの時にも成りぬれば、流石に心細う悲しからずと云ふ事なし、此は三月二十八日の事なれば海路遙かに霞み渡り哀れを催す類哉。

と書き綴られた平家物語の哀調が惻々として胸に迫つてくる。

幾つかのトンネルを抜け佐野から三輪崎の海岸

に出ると實に變化に富み、この秀景を賞して古よりよく咏まれた有名な所である、御手洗より先は王子濱の白砂が蜿蜒と連なつて眼を遮るものなく熊野灘の土用浪が岸を嘯んで雄壯な眺は又筆舌に盡し難い。

× × × ×

熊野川廻行

新宮驛より自動車を馳つて熊野川原に急ぐ、新宮市は熊野隨一の大邑であるが流石に人間臭い近代的な感じが強い、船の出發時刻に僅か十五分を餘す程であつたので熊野三山の一である速玉神社に參詣し得なかつたのは返す返すも残念である。熊野川原には名物の飛行艇が舳を並べて客を待

つてゐる、大きさ四噸位、艫に高く櫓を組んでその上に直径二メートル位の巨大なプロペラーを有してゐる。「機關長」が艫でプロペラーの發動機を制御すれば、「船長」は舳に陣取つて舵を操縦し空中に回轉するプロペラーの力に押される舟は水面を滑つて矢の様に走る、時速十餘哩の快速力で何の事はない翼のない水上飛行機が無限に滑走を續けて居る譯だ、その乗り心持のよいには豫想した以上のものだつた。

水勢激しい熊野の急流に遡つて何の苦もなく快走する、浅い河床の礫を嘯む、激流が渦巻いて白沫を擧げる、急湍に掛つても船底でガリガリ河底を擦りながらグイグイ押し登つて行く、轟々た

るプロペラーの響きも矢筈敷といふより寧ろ壯快な感じを與へる。

瀨に達するまで約三時間と聞いて私は聊か失望した、何んとなれば川を遡る程單調なものはなく其の上斯くまで長時間プロペラーの爆音に豊殺されては壯快が過ぎて苦痛だと考へたからだ。

併し進むに従つて私の豫期は覆へされた、深淵と急湍とが斷續交錯する兩岸に聳立する深山は果しもなく重疊して太古の蒼色を湛ふる處女林に蔽はれ、斧で削つた様な斷崖を以て水に迫つてゐる。

山と岩と水の三重奏、雄大にして力強い自然の姿、熊野の山、熊野の水、恐らく夫は二千五百年前初めて神武帝を迎へた時の姿其儘であらうと思

はれる。

白雲峰を去來して、しゆう沛然と起ればたちまち霽れて烈日の直射を受ける、その千變萬化の風光は全く應接に遑がない、爲めに三時間は何の苦もなく過ぎ去つた。

× × × ×

瀨 峽

瀨々のさわめきが俄に聲を呑みトロリと油を湛えた様な深潭が靜かに舟を吸ひ込んだ。

兩岸急に相迫つて見上ぐるばかりの巨巖が水を抽でて聳立し岩上の深緑が頭から押蔽さつて空を細く限つて四邊をほの暗くした。

瀨だ!! 瀨だ!! 遂に瀨に來たのだ。

悠忽として起つた風物の轉變が一脈の凄味をさへ湛えて身に逼つて来る。

プロペラーの廻轉が止まると舟は除行する、萬籟を潜めた深山の静寂が一面にたゞすむ。

船長は舟の舳に立ち上り

「これより瀨峽に入ります、兩岸にそゞり立つてゐる岩が洞天門と言ひまして瀨の入口であります……………」と説明する。

洵に凹凸高低變幻の限りを盡して奇岩絶壁の黝色は深刻とも幽玄とも形容の詞がない、舟は靜かに進む水は飽くまで澄み切つて河床の起伏がすき透つて見える稍々浅い所にくれば礫を數へ得るかと思へば忽ち深くなつて幾百尺か測り知れない潭

となる。

その刹那こそ惹き入れられる様な瞑想的感銘に打たれて戰慄を禁じ得ない、餘りにも神秘的な瀨よ。

× × × × ×

湯の峰

本宮でプロペラー船を捨て、音無の里に鎮座まします熊野坐神社を參拜する、崇神天皇六十五年に造營された壯嚴無比の社殿が明治二十二年山崩れのために十津川が出水し幾多の國寶を流失した事は祖國日本の爲めに惜んでも餘ある、險阻な山坂を自動車の上で手に汗を握りつゝ登りつめた峠に車塚といふ碑石がある。

應永年間常陸から相州まで逃げ延びて毒酒に身

の自由を失つた小栗判官を照手姫が遙々車に載せて伴ひ此所で車を棄た所だといふ言傳があるがこの照手姫の一心こそは川柳で散々虐待されてゐる相模女の爲めに虹の如き氣を吐いてゐる。

湯の峰とはいへ摺鉢の底の様な所だ、成務帝の御宇に發見されたといふ我國最古の出湯がある。

蒸氣濛々溪流に立ちこめて硫黄の嗅鼻をつく。桃色の歡樂境などは夢に見たくとも無い全く山中の靈地だ、我等若人にとつては餘りにも血の氣がなさ過ぎる、そこで秘藏の名畫(珍畫)珍石を見せて貰ひながら宿の主人の喋々と語る平氏、南朝、明治維新の傳説化した歴史談に耳を傾けて旅愁を慰む。

む。

南紀禮讚

× × × × ×

潮の岬、那智瀧、瀨峽、湯の峰、山と岩と水とが奏でる自然の大交響樂の音を南紀に聴け。

日本の歴史の搖籃に二十六の世紀が流れた有爲轉變の繪卷物を南紀に觀よ。

自然の美しさと偉大さ、そして人間の運命の數奇と流轉——我等をして限なく考へさせるものを南紀はもつてゐる。

我等の祖國の眞の美と力に接して非常時日本を自覺せんとする者は先づ南紀を訪れよ。

私は南紀を禮讚する。

(完)

羈 旅 (短歌百八十一首)

一三八

町 田 岐

醒ケ井米原附近の朝

まなかひの山の麓に居る露の立ちはのぼらず裾になびかふ
朝光あさかげもいまださゝねばたつ烟ひくゝなびかふ里のしたしさ
蟲採網もちて童等たちはしる田居はまだきを朝光さゝず
たちなびく霞は汽車の窓よひくし時鳴く鶏かひの聲とめにけり
山里に住すまふしたしさ背戸の川に朝を口嗽くちぐ人は眞裸まはだか
田の畦に人立ちて鋤をつかひ居り田に水引くをわれも知り居り

刈草をたわゝに束ね背負ひたる女は汽車を見上げ居たりし

近江路の山はかなしもまる肩のなびきなよらに眼には寄り来る

安土を過ぐ

安土の藝術の時代ちきをつくりたる信長の城趾松の山と居り

近江源氏城趾観音寺山

これの山のいつべに城は置にけむこゞし巖の山を見上ぐる

観音寺山に採りし松茸を送りくれし友の家居は村の端はしに見ゆ

篠原附近

篠わけて行難ゆきかたみせし篠原や煙突ならば煙吐けり見ゆ

一三九

旅人のかなしみ見けむいにしへの鏡の山は里に近き山

七巻に蜈蚣まきしとふ百足山その秀とがりてこゝしこの山

瀬田川附近

沖つ邊に小舟群れ居り朝明に氷魚かあされるかのうまき魚

比叡にはすでに朝光さし居たりこゝの海の面に霧は深しも

沖つ邊に小舟うごくは漕ぐならん朝霧の間にほのほの見ゆる

大 阪

天に立つ城の藁は大阪を土に匍ふなすこゝよ見さけしむ

汽車の窓よ見る大阪は城の下にひれふすが如く一と平なり

仁徳帝陵

いにしへの聖の帝仁徳の御陵は若き松むらの丘

いく千年しづもりましてこの丘よ民みそなはす聖大帝

紀伊平野

和泉山脈わが越えくればまあかるき紀伊の平野は眼の下に見ゆ

山よ出でし汽車より見れば眼の下に紀伊の平は潮ぎらひたり

隧道を出るすなはち眼の下の和歌山城は海によりて見ゆ

海と山にそぎへ際まる紀平や和歌山城は海の邊に見ゆ

紀平に陽は押照れどなみよろふ群山の峰は雨ぎらひたり

山を下る汽車よ見上ぐる山肌は一面に植うる蜜柑の繁り
横並に植うる蜜柑の列ごとに石垣をつき土崩えを保つ

由良

由良の湊こゝとは聞けど山の間を汽車は走りて蜜柑の山見つ

岩代

結び松はいづべにかあらむ岩代このの濱邊に梅干をほせり
なげかひて古人のよみたりし岩代は汽車の窓よ見て過ぐ

白濱

いにしへの代々の帝のいでまして眼に見ましけむこれの白濱

白濱は名にこそあれやこの見ゆる濱のかぎりは黒き砂を見ず
海の中に噴き出る湯の天に走りたぎち落ちくる湯氣を立てつゝ
渚邊の底の白砂波のむたうごくがからに様々に光る
渚邊の底の白砂水を透す日光ひかりに照りて玉とし見ゆる
砂濱に湯の湧きいでゝ流れなし海にそゝぐをふみて渡りつ
古國の牟婁の濱邊にビーチパラソル立てゝ遊べるいくむれを見つ
水着の女砂にころぶしバナナ喰へり張れるししむらをわれは見にけり
サンドスキーの看板立てる白砂の丘のなだりは海に傾く
薬とぞ濱の温泉いそゆを飲みて來し友は夜中を腹やみにけり

湯の崎

山隈をめぐりて來れば路の邊に噴き上ぐる温泉を海に流せり
噴き上ぐる湯の勢をかしこみと湯口は下にむけてはかすも
路の邊に噴き上ぐる湯の勢はとどろとどろと山にひびけり
これの温泉の硫黄強かり噴きいづる蒸氣にむせてはなひりにけり
海邊なる岩の間に出る古國の温泉にひたり波のさわぐ見る
古の帝いでまし、跡どころ石には刻み路の邊に据う
沖つ岩に碎くる波の高くなれり潮あぐるならむ夕かたまけて
波がしら白くたぎちて沖つ岩に襲ひかゝるを見つゝ時經ぬ

三段壁

島回すと發動機艇よそひたり心ほがらに人あぐら居る
晴れし海を走る清すがしさ青潮に葡萄ぶどうひたすと舟よ下げたり
舳へらに裂き退けらるる潮水沫なわ日に照りて眩まぶし眼の疲れ來る
押して來る波に備ふる砦なし三段壁は立のゆゝしも
こゝし岩むら引靡かして大洋おほわたに立ちて向へる三段壁岩
見上ぐらく天あめに立つ岩の頂きゆ人のちいさく巾ひんふれり見ゆ
つねやます碎け散る浪岩壁の根方を穿ち空洞まぐらとなしつ
いはほかむ音のとどろき散る浪のしぶきはあがるいくさかにあらむ

岩の空洞まほらに敲きこみたる青潮の瀧と荒ぶれ逆落し來る

青潮の渦巻くさまをしまし見つもの力をわがおそれ居り

荒潮にもまれし鯛はうましとぞ岩秀に立ちて人釣りにけり

ひと日に十まり釣らばことなすと人は釣れれどいまだ釣らざる

圓月島

人間の手を加へけむ圓月島おもひすべなみ見て過ぎにけり

番所岬

黒船を見張りし番所この丘と海に退き立つ巖見上ぐる

番所趾に登る徑あれどさかしみとたゞに見放けてつひに登らず

番所岬の頂き渡る風の音に心ひかれてわが居たりけり

番所岬の濱の岩蔭にキヤムプありて荷箱の上に書物積みたり

この濱に玉拾ひ居らば時を過ぎむかへりみにつゝ舟に乗りつも

濱木綿

濱邊なる雜草あらくさのなかに立ち交り咲く濱木綿はこゝの野生草

濱木綿の花は貌かたちのさだまらず太莖の頂におほひかぶさる

野生の濱木綿の葉の照りをもつ重き青さは眼にしみて居り

太莖の頂に咲きて濱木綿は變る色なきか白きがばかり

年々にほろびもゆくか濱木綿は採取禁制の札を立てたる

海の魚のすばやき動作眼に見つゝ川魚の鈍さわが思ひ居り

人間の間拔けに似たる面付の鯛を見てしが名を忘れたり

玳瑁の泳ぐありやうはクロールなり人等たかりて見たりけるかも

海龜の頸太かれど和ましきその面付は親しみぬべし

動物に決算のなきが羨しゝと海龜を見て人つぶやけり

己が背に藻の生ひ育つも知らざらむ海龜にぶく動きたりけり

網不知より新宮

古もこゝに舟泊てしけるらし風無し濱は古き書に見ゆ

小蒸汽の笛は細けれ朝を早みいまだを暗き山にとよめり

海を出でて山に入る目を眼になれしわれは山より出づる日を見つ

見の限り潮は荒びて狂ひ立ちしぶき霧へる南紀伊の國

日本の南の際の潮の岬燈臺ちさく舟の上ゆ見ゆ

潮の岬にくらひつく如す波のむた裂くるしぶきは天を覆へり

水平線上に山と盛り上り押しして來る浪の力はかしくむべしも

これの海を上り下りし古の眞熊野の舟は思ひ過ぐべし

潮の岬波をかしこみゆく船よ遠居る人をわが思ひ居り

柱なす巖わだなかにたてなめて橋杭岩は眼に見るに奇しも

高山のなかどよかゝる白き線汽船よ見にけり那智の瀧とぞ
 山と島に波よけしめて安らけく舟を泊てしむ那智の港は
 眞熊野の船も泊てけむ勝浦に汽船の笛の太々と鳴り
 翅なす汽船はあらめど遠つ國に旅の心はかなしかりけり
 夜半を起きて旅人われや泊てし舟のねむりひそけきを見つゝさびしむ
 まなかひの島にも出づる湯のありて旅館の灯樹の間より見ゆ
 向ふ岸の人聲きこゆ静かなる港の夜の更けにけらしも
 泊てし船の灯長く水に映り波の動けば切れみ織みする
 那智の水地底通ふと港なる海の眞中に淡水ふき上ぐ

見上ぐらく天にかゝれど水の細くこの瀧人にせまるものなき
 那智瀧はたゞには落ちず石走りたぎつがからにせまるものなき
 天に至るこれの杉むら年の古し石階くらく苔しめり居り
 那智の宮の庭の古楠木肌わかず苔生ひむして年の知らなく
 那智の瀧の流れ淀みて澄み透り人さわに居て泳ぎたり見ゆ
 神ヶ崎佐野のわたりに家の多し雨になづみし古へおもほゆ
 崖上をガソリンカーは走れるらし碎くる波は遠く下に見ゆ

九里 峽

プロペラー船の立つる川波をさけて漕ぎし川舟はゆれて岸にもやへり

たぎつ瀬の水浅くして舟底をかむ石の音身にひゞき來る
 川岸に石炭の層あらはなり炭堀れる山目の前に見ゆ
 三十三間堂の柳を切りし跡所とちさき祠は山の裾に見ゆ
 高山の麓を遮へて淵に立つ一枚岩をしまし見つゝ過ぐ
 二百尺の深さあるとふこの淵に釣鐘岩はおほひかぶさる

瀨 峽

石走りたぎつ川瀬を上りきてひそけき瀨に舟泊てにけり
 人の顔一並めに空を向きて居り二天門岩は天に際まる
 下瀨の水冷え通るけさむさは躑躅さきさかる八月といふに

切立^{きつたて}の高き岩壁の裂目にし咲き並む躑躅舟よ見上ぐる

岩壁の高き頂に續きたる原始林は空のまほら限れり

筏の位置やゝに移れりこの水のうごくたとゞに眼には見ねども

紺青に澄みとほる水をのぞき居て鰻泳ぐを眼にわが見たり

幾尺^{いくさか}の深さはあるぞ澄み透り黒青む淵を岩のぞき居り

ひるかれひ護良の親王^{みこ}がとらしけむ晝餉の岩は淀の中に立つ

熊野本宮

代々の帝の御幸たばりし古宮は桑畑を抜けて丘の上に坐す
 紀伊の國の音無川は小川にて水細々と流れ居にけり

これの宮は八咫の鳥の古どころ買ひし手拭も鳥の繪なり
うつそ身のかくしどころを右に彫り賣るこの土地は古しといはむ

湯の峰

照手姫が己が背ひきゝて路の邊に車捨てしとふ車塚これ
路の邊の小高きところ車塚の札立てゝあり苔むせる塚
川中にいづる壺の湯朝をあつみ足をやきたれば入りがたみせり
この熱湯に命生きむとひたぶるに小栗判官は浴みけらしも
旅に来ていく日へにけむネオンを見ぬ山中の温泉にこゝろしづもる

中邊路越え

中邊路の峠に見れば群山の尾峰のことごと海になだるも
古の野中の清水コンクリートの水槽をつくり鯉を放てり
峠なる路の片寄りに今も湧く野中の清水飲みて遊びつ
中邊路の峠明るし海中にからくも見てし島は阿波かも
自動車の埃をあぶる路の邊の清姫の墓は人知らずゆかむ

道成寺

石階の七十二階登り盡きて國寶山門はたゞに聳えたり
清姫が蛇體となりて巻きしめし釣鐘熔けて今はあらざり

和歌の浦

熊野路の面影のこる紀三井寺に通ふ路の邊の古き松並

玉津島宮の古松たけをひくみその枝はびこりて狭し齋庭は

うす暗き齋庭の奥にほの見ゆる宮居丹のさび古昔おもほゆ

紀三井寺

常盤木のおほひかぶさる石階の暗く高きを息づきのぼる

國寶の鐘樓朽つと櫓かけ寄進つゝのる札大きくたてたり

うす暗き堂にぬかづく父娘らしき順禮の白衣眼に立ちて白し

御堂より見る眼の下の埋立に葦生ひしきて風わたる見ゆ

和歌の浦に發動機船走るらしガス爆る音この山に響く

高野

紀の國のいづくを汽車は走るならん夕野には見る白亜かなしも

夜の空にそびえて黒き高山を高野とは聞けど灯の見えぬ

ケーブルの路線の電燈見え來たれり高野は近くなりたるらしも

秀次の切腹の間の眞晝くらし榮華を果てし人のかなしさ (金剛峰寺)

西行のこもりしといふ御堂の前めでし櫻といふが今もあり

眞言密教のいかしき道場とききしかど土産うる聲の耳にうるさし

僧坊に吾等泊りて蓄音機の櫻音頭をきくとおもへや

千年をけたすたもちし燈火をくらき御堂にしばらくは見つ

かどなべて待ちつゝあらん家人をしたおもひつゝ高野を下る

大 阪

大阪の中心點の石標を心齋橋筋にわれ等見たりき

心齋橋に夕涼む群れに立ちまじり高層建築に日落つるを見つ

大阪の街は氣忙し心齋橋の盛り場をゆきわが疲れたる

退社ひげして歸る人こみあへる盛り場にわれ等遊びて旅先に居り

勤め終へて夕べを歸る群に交り遊び疲れてわれ等ありつも

夕いそぐ雑沓をぬきつかれつゝ茶をのます家は見あたり難し

驛の庭に夕せまり居り來るか來じか友をした待ち靴みがかせつ

旅にありて心痛めかしたまちし友來しがうれし胸にせまりて
下まちし友は來たれり旅に居る心うれしく聲あげにけり
もらひたる冷凍酒壺を下げて居り酒造る友を友は訪ひ來し

京 都

加茂川の河原に人の遊ばさらむ草生ひて暗し千鳥しば鳴く

川に沿ふわが居る室は川千鳥しば鳴く聲を枕近く聞く

枕近くしば鳴く千鳥こゑ聞けば旅人われやいもねかねたる

ケイブルの電燈闇空にかゝり居り比叡には友と登りしことあり

まなかひの闇押迫る東山のなごめる線は空にすかし見る

いなといへど友があけたる冷凍酒うまらにのみてわれゑひにけり
ねまくはやみ衝にを出でてネオン明き舗道には見つだらりの帯を

歸京車上雑唱

遠つ近江知多の岬に寄れる浪はろけく見えて曇る沖空
濱名湖を圍む遠山に日の照りて山巖は見ゆかける谷黒く
濱名湖に日の光てりて見の遠く舟あつまりて沖に釣る見ゆ
辨天島に遊びし人か漕ぎさかる舟は夕日をうけて居たりし
巾ふれは舟よりも巾をふりて居り心のこるとわがおもはななくに
辨天島にいまだを遊ぶ人のあらん舳ひたる舟島のかげに見ゆ

鎮養ふ生簀たちなみ濱名湖の辨天島は見らくすべなし

掛川に夕せまり居て霧たてり友が家居をおもひつゝ過ぐ

吹上の濱くれて暗し打あぐる波のたぎちし未遠く見ゆ

興津の海くらき沖邊に三保ヶ崎の燈臺の灯の見えてさびしも

晝は見む深溪のたぎち曇夜の箱根は汽車にねむりて過ぎつ

東京に汽車近づけば心たのしかゞなめて旅の日のいく日なる

(九、八、五—一〇)

十和田湖紀行

家であれば筈にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもると、歌ひし萬葉時代をかへり見れば、當世の旅は樂になりしものかな。幾度か變更に變更を重ねて、我十和田班コースは、結局途中平泉に下車、中尊寺金色堂參詣、嚴美溪探勝の後、淺蟲温泉に至り、其處より八甲田連峯を越え、鳶温泉を經、奥入瀬溪流を溯り、十和田湖に至り、次いで男鹿半島を廻遊し、湯ノ濱温泉を最後として、歸京の事に決定した。

平 泉

待ちに待つた出發の八月十一日は來たつた。同勢十人、上野驛集合、勇躍して午後七時三十分發の東北本線急行に乗車した。或は雨を呼ぶかに見えた空も、今は心配なささう、涼しと思ひ居しに、さすが車内は蒸暑い、いち早く一人が洋服を上下共脱ぎ捨て、ワイシャツまで脱ぎ去れば、吾も吾もと皆之に倣ふ。

かゝる風景は、到底東海道線では見られぬ處、まづ東北旅行の氣易さを禮讚する。車内は談話に賑つ

た、談笑盡くる頃には色々の遊道具が持出された、用意周到な事よと幹事の明を喜ぶ。

車内は一時満員なりしが、更くるにつれ、空席生じ、我等は一人にて二人分の席を占領した。まるで寢台車をとつたやうのび／＼と横になるを得た。窓はトンネルにも拘はらず開け放ちたれば、涼しい事限なし、後には上着まで着くる始末となつた。

「今二時ですよ」

「二時ですか、ねむれましたか」

友等が交はす話聲も夢うつつだつた。

「次は仙臺、松島行の方は御乗替」と車掌の呼ばはる聲に目ざ

めた。早、曉だ。薄紫の遠山が見える。我等は食堂車に入り、朝食をとつた。幾程もなく汽車は一關



に到着した。午前七時二十分だ。直ちに驛前の自動車に打乗り、寂しい街を横ぎり、田中の道を嚴美溪へいそいだ。途中運轉手は、くはしく平泉三代榮耀の跡を物語つた。

嚴美溪に添つた道路には櫻並木が続いて居る。春も眺よからん。天工橋の邊はさすが好景だ。箱庭的景致と云はゞ云へ、何人の手を以てしても、かゝる極致を致す事は得まいであらう。巨岩小石いづれも灰白色を呈し、石膚殊に美しい。我等は車を下り、岩角をつたい、上流に進んだ。東屋があつた、河心に幾千幾百と數しれぬ岩石横はり、水は之に塞かれ、しぶきをあげ而して落ちて瀧をなしてゐる。長者瀧といふ。我等は此處を背景に、旅行最初の寫眞をとつた。上流は尙勝景に富むらしい。然し先を急げば此處より引返す。天工橋畔合歡木の一樹あり。

「夢のやうな花かな」と一人が云へば、

「いないな可憐な花だよ」と一人が云ふ。

早、都塵を忘れ身は詩境にあるのだ。

自動車にて、竹藪道を通り、田を過ぎ、達谷窟に至つた。窟は高崖にのぞみ、周圍に杉の杜をめぐらし、涼しい處だ。昔賊首、惡路王等が巢窟を構へたる地で、坂上田村麿勅を奉じて夷賊を平定するや、祈

願成就の報賽として、窟前に九間四面の舞臺造の堂を建て、多聞天を安置して、其後度々修理を加へられて今日に至つたもの。堂守のくはしき説明を聞き、背後の岩窟を覗き、立去らんとすれば、一人當り拾錢宛の拜觀料をと要求す。こちらから頼みしにあらぬに拔目なき事よと、我等の不覺に失笑した。

車上十分餘にして毛越寺に達した。此處は喜祥三年に慈覺大師の開基だ。藤原基衡秀衡二代の間には、其規模の宕壯なる、遙かに中尊寺を凌駕する大伽藍であつたが、後次第に衰微を重ね、嘉祿二年野火の爲烏有に歸した。現在の本堂は明治三十三年の建造だ。寺僧は寺の傍の大泉池畔に我等を伴ひ、彼方此方の杜を指點しつゝ説明した。鳥も飛ばず、我等の外には來る人もなし。夏草やつはものどもが夢の跡」といむ芭蕉の句碑は、老松の下の小高き處にあつた。

我等は此處より中尊寺に向つた。學校の側を通り、四五の人家をぬければ、源義經の館址といふ高館は右手に見えた。こんもりとした山だ。薄墨櫻の傍に下車した。辨慶の手植なりといふが、稚木なれば恐らく植つぎて其孫子に相當するものならん。古松老杉に小暗き月見坂は急だ。肥滿せる友は息苦しさう。彼等を押へて我等は斷然先に進む。中尊寺本坊の前を過ぎ、物賣の女を拂いつゝ、まづ金色堂に詣す。天仁二年藤原清衡の建立にて、前後十六年の歳月を費せしものと云ふ。上下四壁は皆遮羅布

を以て蔽ひ、黒漆にて厚塗にし、上に金箔を貼る。欄間や梁には螺鈿をちりばめてある。中に佛像を安置し、佛壇の下には藤氏三代の棺柩を藏めてある。後に足利時代金色堂保護の爲覆堂をつくつた。芭蕉の句碑が傍にあつた。

金色堂の背後や、高く經藏はあつた。天仁元年同じく藤原清衡の建立する處、元二階建なりしが、建武四年上層焼失して、残る處を修理して今日に及んだもの。中には精巧比類なき靈像安置され、又内部兩側の架に、紺紙に金銀泥にて書きし經卷を納めてある。我等は此處にては、案内者に頼らず、案内書丈にて満足した。山門を出れば、物賣の女等待伏し居たり、繪葉書と史蹟案内書を求めた。歸途中尊寺本坊に立寄つたが、坊庭には村の兒童がボール取せるを見受けた。庭の兩側には、明治大正兩天皇の御植樹や、各宮方の御植樹が、所せまきまで並んで居た。遠く衣川の邊の眺を賞しつゝ、車上の人となれば、平泉の驛まではいくらもない。發車には小一時間もあるので、驛前の休屋にて、茶を喫し、遊道具を取出す。豫定は午後一時四十九分發なりしが、午前十時二十六分發に繰上られた。之にて三時間の得をなした。

淺 蟲 溫 泉

車窓の青田の眺もよい。然し青森縣は、稻の成育が甚だ不十分だ。途中の小驛では、林檎を袋にし、てかついだ野良着の男女が、乗り又下りた。女はいづれもモンペを穿いて居た。我等は山の眺望にも飽きたれば、ストップ競技に長時間打興じた。いつの間にか、汽車は落葉松の林を通つて居る「珍しい」と誰だか叫んだ。遠く小河原沼の綠野が見渡されて、夕日の中に裸馬が駒を連れ、起き且つ臥して居るのも目さむるばかりだ。野邊地を過ぐれば、陸奥灣の海光見え、下北半島の恐山さへよく見える。恐山下大湊には、我私友あり、最近妻を喪ふ、今乳飲兒と共にあり、再會の難きを憾む。

青草の野邊地を來れば陸奥の海や恐山さへ見えわたるなり

松林つき海も見えずなつたと思ふ中、汽車は淺蟲の驛に着いた。午後五時四十八分だ。一同下車、驛前の東奥館に投じた。座敷は海に面した二階である。窓を開放せば、海風は萬斛の涼味を送つて來る。見渡せば、ま向に湯の島、右手にやゝ遠く裸島、鷗島見ゆ。其尙右の岬に、東北帝大臨海實驗所の水族館の洋館が新容をあらはして居る。我等の眼下近くまで波はおし寄せて居る。岩頭に長袖を靡かせて居るのは、商賣人の女であらう。

一浴して、暮れ行く島を眺めつゝ、夕餉の膳に向つた。料理のまづきは案外だつたが、久振疊にく

つろぎし事とて、大いに語り、大いに飲んだ。酒豪連は盛に團長を取圍んで居る。潮風に向ひ詩を吟ずる友あり。酔へば飛び下りる僻の友は、盛に飛下りんとし、周囲の者は引止むるに苦心せり。

我は只一人、窓下の海岸に下りて行つた。而して岩頭に立つた。微醺の頬を、潮風になぶらるゝ心地よさ。海も山も一色の墨色に暮れ果てて。何處が何處ともわからぬ。遠く漁火と思ふたのは、青森の棧橋の火である。左手の岬を、光芒を引きて行き返へるのは、青森通ひの汽車、自動車である。岩頭を退いてベンチに腰を下した。其處には既に友があつた。友より最近の此の地の出来事を聞いた。會計を使込み、會社を蝕首されし東京者、たま／＼此の地に來つて居る中、土地で評判の酌婦と深いなじみとなり、女が男に同情した結果、二人は花巻温泉で情死を遂げたとの事だ。淋しい處よと、お酌の女も語つて居たが、何處となく左様な温泉郷と思へた。思ふに、青森通ひの客や北海道行の人々が、一夜の旅情を慰むるに立寄る所であらう。今時分が最も混雑するとの事、この家など満員といふ事であつた。寢床の用意も整ひたりとの事にて、上つて行つた。隣室に新客多數到着の騒も夢うつゝに、いつしか深い眠に落ちた。

八甲田山より鳶温泉へ

十三日、屋を揺がす濤聲に、夢を破られた。温泉に浴して、海風に吹かるゝ心地よさよ。千波萬波巖頭に碎けて荒模様だ。然し食事を終る頃には、碧空やゝあらはれ、まづ安心。午前五時四十八分發の汽車に投じた。青森に着するや、前以て電話もて交渉して置きたれば、直に用意の自動車に飛乗つた。八甲田山は、先日來の降雨にて、山道いたく破損し、自動車をやるに困難なる箇所所々にあるとて、運轉手は萬一を慮り、自動車修繕の用具及鋏まで積み込んで出發した。青森の街を出はづれると、老松生たる且々たる大道だ。津輕藩主の往來の道路なりしと云ふ。田を過ぎ、村落を過ぐれば、早八甲田の山麓だ。やゝ行きて、水源池を過ぐれば、陸奥灣の海光、或は右に、或は左の車窓にあらはれる。更に上れば雲谷峠だ。ここら一帯を飛行場とせんとの議ありし由なれど、遂に沙汰止となりしと。此處よりの眺望は、恐らくは八甲田山中の絶景ならん。八甲田の裾野、はるばると見渡され、青森市街其先に小さくかたまりて見え、津輕下北兩半島に抱きかゝへられた陸奥灣は、まるで一幅の畫だ、誰も彼も、只讚嘆するばかりだ。見返へれば、岩木山は雲表に頭を出して、此處此處と招くがやう。鍵掛峠より、雪中行軍遭難者碑が明瞭に見えた。此處より西方樹海の眺は、富士のそれに、勝るとも劣らざるべしと思ふた。途中所々、灌木の間から、放牧の牛馬が顔を出した。

「上にはもつといふ所がありますよ」と、軍轉手は、我等を喜ばせつゝ行くなり。

この上になほよきところあるなりと八甲田山越えて行くなり

道も、左までの事はなしと安心し居しに、酸ヶ湯の邊より、果然悪るい。暫時徒歩してさて乗れるに、いくらもたゝぬに車輪は、泥中に完全に埋没した。運轉手等相助けて、いかに押すとも動かず、我等は再び下り、徒歩にて先行す。赤土の粘土道なれば、我等の白靴は黒靴と變り、黒靴は赤靴と變り、宿を立出し時の面影更でない。運轉手等の苦心、察するに餘ありだ。道路を修繕しつゝ進むなり。鍬で泥土を去り、砂利を運び来て、寸進するのだ。我等は土堤の上を歩いた。無聊に堪兼ねて、トド松の松傘を採拾しつゝ歩いた。松脂にて兩手を黒く染めつゝ。又道邊の草を摘みつゝ行つた。運轉手の話にては、秋は峰々谷々紅葉して、一入の眺なりとの事なるが、さもありませんと思つた。

道のよき所に達したれば、自動車を待ちつゝ緩歩して行けば、こはいかに、すばらしく大きな省營自動車の、道路一杯はたがりて動かす居るに出會せんとは。工夫二十餘人働けど、いつかな動く氣配なし。其中我等の自動車も漸く難路を經來たつたれど、この通りの始末で、どうにもならず、色々工夫して漸く道通じたれば最早大丈夫と乗車したるが、又々難所に出會し、歩行して見晴峠まで至り、漸

く車上の人たるを得た。此處よりは下り路だ。舗装工事の施せる部分もあつたが、僅一部分に止まつた。試験的のものゝ由。蔦沼の水光樹間に隠見するよと思ふ間に、我等の車は蔦温泉に到着した。正に十二時を過ぐる半だ。一時間半は延着したらう、途中桂月山人の墓をも見た。

蔦温泉は、山間の一軒家なれど、庭廣くとり、植樹繁からざれば、何となく明るい感じのする仙境だ。木造の廣い浴槽も、此處にはふさはしい。槽底の板の間より、清泉は滾々と湧いて来る。思ふさま手足を伸ばす心地よさ。

一浴して氣も清々しくなり帳場の前を過る時、桂月先生の墓はいづこと、田舎の先生らしきが、小學生を二三人引連れて、庭より尋ぬるを見た。先生の名は我等の少年時代に懐しき名だ。

晝食の膳に供された、鱒や新鮮な山の物には、一同大いに舌鼓を打つた。

十 和田湖

朝の中曇り氣味なりし空も、全く晴れ來たつた。されど山中の事なれば、涼味溢れていささかも疲労を覺えず。二時過蔦温泉發、十和田湖畔子の口へ向ふ。途中が奥入瀬の溪谷だ。溪流に従ふて溯るのだ。密林を縫ふて溪流が流れて居る。雨にてやゝ濁り居るが残念なりと、運轉手は惜しむ。何とな

く親み深い流だ。例へば潺湲と流るゝ田川や、里川を大きくしたやうな感じだ。水は終始おほどかに且澱なく我等の手の届く所を流れて行く。然も所々に激湍あり、巨岩奇石も横はつて居る。兩側の山中には、白絲瀧、不老瀧、姫瀧、白髮瀧、大瀧、其外多くの無名の瀧が、夫々の特色を發揮して、白簾を掛けて居る。其の飛沫が時々我等にかゝる。紅葉の季節には如何ばかりの美觀であらう。満山の紅葉黄葉は、川をも瀧をも人さへも、黄化紅化せずんば止まぬであらう。阿修羅の流とか、三亂流とか、七瀬とか、白銀の流等と、一々運轉手の説明を聞きつゝ、餘りの心地よさに我等は眠に誘はれた。漸く子の口に着いて、睡眠を一時に見開いた。湖は四圍の翠巒に圍まれて、靜かに紺碧の水を湛へて居る。午日は湖心に輝いて居る。絶好の遊覽日和だ。

一同遊覽船の屋根の上に出で、日光の直射を受けつゝ、飽くまで十和田湖の風光を賞す。我等の船とすれ違の船あり、我等の船に近づきて、四五の客を我等の船に乗り移らしめた。おかしき事よと思ふて居れば、いそぎ引返し來りて、貸切とは知らざりしと、先の客を乗せ去つた。御倉半島の突端を廻りて中湖に出づ。小島が浦、千丈幕、五色岩、金屏風等の場所は、案内人の説明に従つて出で來つた。見上ぐる千丈幕の斷崖の上には、鳶二三悠々と舞つて居る。中山半島にさしかゝれば、業平岩あ

り、小町岩あり、ロック岩あり。業平岩は我遂に氣付かなかつた。小町岩は美女の衣を纏はず、双脚を聞いて立てる形状だ。一同大いに珍らしがつた。ロック岩はロックの形だ。

案内の青年は、二度三度手を打ならした。何處よりとなく飛立つ鳥あり。鶉の鳥だ。我船の舳を打連れて飛んで行つた。毎日船に乗り居ては飽きる故、手にて追ひ出すなどするのだと、語つた。

西湖に進んだ。何岩何島との説明はなかなか盡きない。鯉島兜島の二島を右に見て、我等の船は小屋に着いた。午後四時半だ。我等の宿舎太陽館は、二三十歩の砂濱にあつた。

我等には二階の湖に面せる一室と、南方の山に面せる一室とが與へられた。涼風は、新聞を広げる事の出来ないまで強く吹込んだ。我等には何にも勝る御馳走だ。浴衣に着替、濱を散歩せんとすれば残らず履物出でたと云ふ。仕方なく、團長は其處に見當りしゴム長靴をはきて出づ。我は我靴を穿きて従ふ。既に我等の友は濱にあつた。魚屋さんの散歩なりとて、大いに喜びはやす。早速一枚なりと寫眞係はカメラを向けた。

十和田神社に詣せんとて湖畔の小徑を辿りて行く、水溜あり、我等躊躇すれど團長のみはおかまひなし。賣店の四五軒並べる邊より右折すれば、參道だ。鳥居ありて、幽邃な山道に入る。老杉天に聳

へ、道傍には、シダ類人を没するまで繁茂して居る。峻坂を上げれば十和田神社がある。小祠だ、日本武尊を祭る。一詣し、神社の右方の岩石の累々たる細徑をたどれば、小さな堂宇があつて、南祖坊の石像を安置してある。更に上ると、中湖を見下す断崖絶壁の上に出た。見下ろせば、千古の秘を包んだ碧潭微動だもせず、妖鏡の様に樹間に閃めいて居る。其處に、長さ約六十尺の鐵梯子が垂直に相平行して二條、断崖に掛つて湖畔に下りる。其處は十和田第一の靈場御占場である。

第一に其處の梯子をつたつたのは、甲斐の山國育ちの友であつた。猿の如く下りて行つた。

「下りて行くのかい？」氣のない聲で團長は顧みた。

「下りよう」と皆が異口同音に叫んだ。

「危なかないかい、ガタガタするぜ、前向きに下りるんかね」

團長の手は梯子について居るが、足はなかなか崖を離れない。我等は他の梯子をサツサと下りた。

團長の後には、肥満した友二人が続いて居て、頻に團長を促して居る。團長の足遅々として進まねば、二人はしびれを切らし我等の下りし梯子に移りて下り來たつた。最も早かりし團長は、最も遅く地上に足を印した。

此處の深淵に小錢を紙片にひねつて投し、其沈み具合によつて、吉凶を卜する習慣だと云ふ。

我先にと鐵梯子に飛びついて上る。團長も下りる時よりは足元確だ。されど鐵梯子の間一言も發せず、上りつきて尙發せず、岩角をつたひやゝ來りて、漸く言葉を發した。

「今以て足がガクガクする」と之、團長のいつはらざる告白であつた。

日頃負嫌いな團長も此日ばかりは一生の不覺をとどめた。

坂を下り鳥居をくぐれば廣場だ。小料理屋より女等招くに、此の恰好にて入れるかと、長靴を出して見せる。日は既に没した。暮靄迫る中を宿に歸つた。此邊では未ランプを用ひて居る。我々の旅館のみは、自家用電力の設備がありて、電燈がついたが甚暗かつた。

晚餐の姫鱒の鹽焼、フライ等は、場所柄いづれも美味であつた。食後友の二三は碁を圍んで居る。我等は寝るには早しと、四五の友と戸外に出た。浪のささやきすら聞えない靜かな晩だ。街燈などは無論なければ、家々より洩るゝ燈光によつて、僅に其周圍が明るいのみだ。暗中摸索とは全くこの事。我等はくら闇に、畑ともつかず藪ともつかぬ間の小道を辿つて、燈光の見ゆる方に向つて歩を移した。近づけば料理屋だ。二階には遊客が二三見える。階下の座敷に、藝者とも酌婦とも見わけのつかぬ女

が二三、立つたり坐つたりして居る。
何か女の方で云つたやうだったが、
「只ならいくよ」と誰だか叫んだ。
女は窓から顔をつき出して居た。

到底散歩には不適當なれば、元來た道を引返す。宿に歸れば碁戦は未最中であつた。我等はこの方には興味薄くあれば、明日の銳氣を養ふ爲、早く別室に退く。此處では蚊屋も吊らなかつた。

十和田湖ヨリ男鹿半島へ

十四日、我等は鷄鳴に目覺めずして、牛の鳴く聲に目覺めた。洗顔を終へ、食事には未早ければ湖畔に出づ。夜は未全く明けきらない。此方の岸では、親子してあかの水を汲み出して居る。彼方の岸では、我等の友も早起き出でて、釣に出づる學生の舟を押しして居る。やがて舟はする／＼と浮んで行つた。學生の話では、姫鱒百尾位釣るは何でもないとの事。

朝食を喫して、出發までに土地の寫眞師を呼びて、汀に繋いだ舟に、或は掛け或は立ちして一同撮影した。我等の寫眞班も、漫歩する所をカメラに収め度しとの所望にて、汀を一同往き又歸る。

昨日我等を、青森より八甲田を越へ、子の口まで案内し來たつた自動車は、昨晚此地に一泊して、今日は我等を大館まで送るのだ。用意整ひ出發す。時に午前六時少々過。湖畔に添ふて一路和井内に至る。和井内より發荷峠に至る間は、道幅狭き爲、電話を以て打合せて通過するのだ。恰も下る車あるとの事にて、附近の姫鱒養魚場を一覽した。屋内には卵より姫鱒發生に至る経過が、アルコール漬で示されてあつた。其處には又多數の細長き水槽があつて、絶えず清水が流れ、僅に目にとまる小魚が泳いで居た。然も稀に。屋を出づればやゝ低き處に屋外の水槽が設けられて、此處には成育せるものが泳いでゐた。いづれの水槽にも、舊き水停滞せざるやう疏通口を設け、新鮮なる水は間斷なく、樋を通じて落ちて居た。最近試験的に、亞米利加より輸入した虹鱒を放てる水槽もあつた。

運轉手の出發の合圖に一同飛んで行く。自動車は山腹を縫ふが如く發荷峠に出でた。此處よりの眺の雄大な事よ。周回十五里の十和田湖の全貌が見渡される。廻りの高峰には、所々雲が棚引いて居る。我等は一度、二度見返つた。湖もかすんで來たやう。此處を過ぐれば下り道だ。沿道の杉の山林も目につく。麓の大湯よりは且々たる大道なれば、一氣に車を走らす。砂塵甚しければ遠距離を保ちつゝ送驅す。大館驛まで途中秋田犬には、遂に出會しなかつた。注意したれば、時間は都合よく行つた。

發車までに十五分ばかりあれば、肩の埃を拂い合ふ。青森より十和田湖を經、此處まで送り來たつた運轉手等は、我等の汽車動き出すや、驛頭に來て共に並び居たり。我等を送らんとてならん、我等は合圖せしかど、達しなかつたやうだ。

車中、客の視線は一様に、前方の夫婦にそがれて居る。おかしき事よと思ひ居たるに、其のそば近く立ち居たる商人風の男の説明によつて、一切は判明した。男は支那人なるが、日本に永年滞在して日本の女を娶つた。而して二兒を設けた。今や退去命令を受けて、妻を連れ、二兒を伴ひ、引上ぐるなりと。又或一組の夫婦は、費用なき故、同時に赴く事が出來ず、日本人のおかみさんと子供は日本に残し、生木を裂かるゝ思で、支那へ歸るのだと。最後に商人は、「今余は驛頭に於て、盛大なる見送を受け出發する人を見た。然るに片方に於ては、このやうに離別の涙もて送らるゝ旅立を見るのだ。御上に對し、穩便な取扱を陳情したが、遂に許されなかつた。危険思想などはこのやうな所より勃發するのだ。我等は知識階級ではない、無學な者だ、單に一個の商人ではあるけれど、深く經驗して居る故、彼等に同情せざるを得ない、日本も、少し大國の襟度を示さねばならぬ。」と結んだ。「それは日本で保護すべきでなく、支那の公使館で保護すべきだ。」と商人に向つて、一人の客が言葉

をさしはさんだ。

座席を立つて、例の夫婦に林檎を與ふる客もあつた。女は聲をのみて泣いて居る様子だ。年は二十をいくらかも出でまい。男は乳飲子を膝にかき抱き、時々頬すりして居る。片方の手にては六、七歳の女兒の手を取り居つゝ。女の子は仲々の綺量好しだ。友は我等の後方の一團も支那人だと教へた。發車の時はそれと氣付かざりしが、女子供が車窓に近く、多數立つて居た事を思出した。

後方の車に、空席が多數あるとの事にて、其の方に乗替へた。鹿渡よりは八郎潟の水光見え來たつて、疲労も一時に退散した。正午近く追分着。發車には間もあれば、驛前の旗亭にて晝食をいとなんだ。

零時五十二分、船川へ向け出發した。車中終始ストップゲームを行ふ。途中八郎潟の風光、寒風山の山容は見逃さなかつた。一時間足らずにして船川着。驛前の旅館に手荷物を預け、遊覽船に乗る。船着場までは相當の距離があつた。碧空晴れ渡り海波またあがらず、全くの舟遊日和だ。港内には、鷗や鶉の鳥が浮遊して居る。一同は屋根上に出づ、我は舷側に立つ。水天彷彿の際、我國土の、或は連なり、或は飛石の如くなりて見ゆる美しさよ。あるが如く無きが如き邊りを、若しや鳥海山にあらずやと問へば、船員はさなりと答ふ。土崎の港は、かの煙の上れる方なりと教へてくれた。海中所々に白

波の碎くるは、岩礁のかくれ居る處だ。陸續きの岩礁には、海水浴の子等が立つて手を舉げて居る。漸く御前落しの岩礁に來たつた。此處より奇礁怪岩相續き、特色ある男鹿風景は展開さるゝのだ。天に屹立せる岩、蟠居せる岩、こなたに向つて今にも襲ひ掛らんとする岩、百姿百態は遺憾なく、天の巧技によつて作り出されて居る。

我々は陸地の高峰に、所々瀧の掛れるをも見た。俄に船足にぶりしと思ふや、我等の船は靜止した。船員はおもむろに舷側に出で來たつて、漕ぎ寄せし一艘の小舟より、持てる限りの鮑を一圓もて買取つた。十個ばかりだ。船員は海水を充てしバケツに、件の鮑を投入れた。鮑はいと珍らしと、一人の友は近よりて見つ、さては取出して弄ぶさまの、いとおかしければ一同大いに笑ふ。

やがて我等の船は、巨巖の左右より迫れる深海に入り行く。いづくに行くやと心許なく思ふに、我等の眞正面に、丸き巨口を開ける巨巖は出で來たつた。我等の船は其巨口さして進み行くのだ。近づけば、藍色の海水は暗黒の洞内に湛へ、悽愴の感さへある。我等の船は、我等の片唾飲む間に、この洞窟内におもむろに入り又おもむろに船尾より出でた。其出づる時一同歡喜して手を打鳴らした。大きな穴なりしと後より嘆賞す。

最後に、我等の船は大棧橋と稱する石門をくぐつた。男鹿半島廻りは、此先の加茂まで行きて、大略四時間にて終了する由なれど、我等は出發の時三時間にてと時間を制限したれば、此處より引返す。歸路は速力を早めた。一行の大半は、目達を達せし満足にて、船室にもどつた。我等二三は、猶屋上に残りて、茫洋たる日本海を飽かず眺めた。往航雲中に姿を没して居た鳥海山は、それと藍色の山容をあらはして居る。

男鹿島の磯邊に遊ぶ鷗鷯もうるはしみ見む鳥海の山

男鹿島の島廻り舟漕ぎ出で、鳥海山をあかすながめぬ

上陸するや、手荷物預け所にて、瀝茶の馳走になり、手荷物を受取り、午後五時二十分發の汽車に乗つた。船川町には税關支所があつた。良港渺き日本海方面に於ては、屈指の商港ならん。停車場構内には、石炭が山の如く積まれてあつた。一時間にして土橋に着いた。船川驛長の好意により、一丁旅館に投宿した。旅館では、自動車を用意して驛まで出迎へて呉れた。旅館の女中達は、いづれも秋田辯もて歡待してくれた。我等には通譯が必要であつた。我は土産に、秋田言葉を覺えた。ガツコーとは漬物の謂なりと云ふ。

旅館にて食事を済してから、秋田音頭みんとて池鯉亭といふに出掛けた。我も其席をけがす。夜目にてよくわからねど、庭園も廣く泉石の美もありさうなり。此地では一流の料亭であらう。秋田は美人の國と聞いたが、出て来た藝者衆を見てさすがと思つた。皆土地の出身者といふ事だ。土地の言葉もて歡待すれば、言語の通ぜぬ處は身振手振もて、又目もて意思の疎通を計つた。いろ／＼の唄や踊も、聞き又見たが、かねて何處からともなく放送されてあつた、珍妙無類の、殆んど裸形に近きまゝにて踊るといふ踊のみは、幹事の斡旋にも拘はらず遂に見られなかつた。秋田情緒の滿喫もさることながら、明日の行程を控へて居れば、十時近く引上ぐ。

土橋より湯の濱温泉

十五日、友と相前後して最も早く起きた。宿の二階より海岸が近く見ゆれば下りて行く、人通りは未無い、南瓜のはびこつた家裏をぬけると、砂土の堆積した廣い場所に出た。穢い所だ。海はずつと向ふになる。其處に來合した老人に、棧橋は何處と聞けば、無いと答へた。簡単な舟着場がある位のものであらうか。沖合に蒸汽船が停泊せるのが見えた。街では朝露を踏んで、モンペ穿いた鄰の女が、七夕竿を賣歩いて居る。朝食を喫し、秋田へ出づるには自動車を以てした。車窓より、山の上、田の

中、隨所に石油採掘塔が立てるを見た。途中舊藩主佐竹氏の墓所をも過ぎた。秋田市は明るくてよい町と思つた。野菜市場の邊を過ぎ、銀行街を過ぎ、道を縣廳の方へ迂回して驛に着いた。發車には三十分あるとの事にて、更に附近の自動車を呼び、秋田城趾や、市内目抜の場所を大急ぎにて一巡す。物品陳列館に車を寄せ、友はステッキを求めたが、我は彼是吟味する中時間盡きたれば中止した。自動車を走らせて漸く發車時間に間に合ふを得た。時に午前九時二十分。これより愈々我等の最後のコースたる湯の濱温泉に向ふのだ。右手の車窓には、絶えず日本海の眺が移り變り、左手の窓には、鳥海山の靈容が我等を迎ふ。俳聖芭聖の過ぎし象潟の邊りは、窓より乗出し、其好景に見とれた。

鶴岡着は一時過ぐる半であつた。驛頭には音楽家高勇吉の一行を迎へる爲、藝妓が花の如く居並んでゐた。直に自動車に打乗り、鶴岡城趾を過ぎ、青田の颯々たる風に吹かれ、日本海に面せる山脈のトンネルを抜け、居睡する間に紺碧の海岸に出で、我等の最後のコースたる湯の濱温泉に到着した。午後二時半だ。宿は龜屋ホテルだ。

我等のホテルは、道路より一段高く、山に凭り建てられた大きな建物だ。舊館新館とありて、舊館の後方遙に高く新館はあつた。其處の三階の二室が我等に與へられた。窓に立てば、我等の眼界を遮る

何物もない。漂渺たる日本海にま向ひだ。屋後には山迫りて、秋草の花が咲いて居る。浴槽の設備も近代式で、明るくていい。一同温泉に浴し、いゝ心持になり、最後の葉書を認めるやら、横臥して晝寝の夢をむさぼるやら、碁將碁の盤に向ふやら、も早や既に家あるやうな氣易さ。只日影傾くに従ひ、西日を眞向から浴びるのには閉口した。我等は幅狭いカーテンを引張り合ひ、日影をよけて、夕飯を済した。食膳を運ぶに餘りに忙しさうなれば、客は何人位と女中に問へば、このみにて五百人位なりと答へた。この家にては、外に尙一二軒經營して居るらしかつた。今夜は此地の花火大會なりとて大賑だ。例年土地の商人達が、繁榮策として、此の日と翌日を期し、取行ひ來たつて居る由。花火には未早しと皆碁盤に向へば、我一人薄暮の街に出た。花火は頭上に炸裂した。花火の上る方に人々は急いでゐる。我は未土産物を買はざれば、店々に入りつゝ行く。取立て、云ふ程のものもない。やがて停車場に來た。花火はこの前の海濱にて打上げるのだ。海に向つて人垣を築いて居る。どの道も兩側には處せまきまで露店が並んで居る。一同の來るのに出合ひ、相連れ立ちて北行すれば、其處は遊廓であつた。重々しい大きな構もいと古びて居る。瓜田に履を入れすと云ふ諺もあれば、我等はいそぎ此處を去つた。途中の店にて土産物二三求めた。店主は花火の事をしきりに吹聴してゐたが、我等の東

京なるを聞くや、兩國の花火を見た目では、到底見られませぬと鼻柱をへし折つた。

湯の濱より上野

温泉と海水浴とを兼ねる此の湯の濱温泉の如きは、世の最も樂境だ。十六日早起し、浴後海濱を歩す。人影も未稀なる砂濱に、地引網を見る心地よさ。引上げし網の底には、鯉最も多く、鯖、鯛、いか、蝦などびち／＼はね廻りて、網を破りて逃げはせぬかと思ふばかりだ。又彼方にも地引網引けば、行きで見ると。餘りの面白さに、出發の迷惑を相掛けても濟まじと、急いで宿に歸つた。今朝は時間があれば、落着いて食事を取つた。午前十時少々過出發。昨日來た道を鶴岡に向つた。田の中にて、出羽三山はあの邊りと聞けど、雲霧に閉ざされて見えなかつた。鶴岡に着して、出發以來初めて東京の新聞を手にした。世事を忘れ、香氣なりし旅路を追想した。午前十一時發の羽越本線廻り上野行急行に乗つた、車中一行の大半は、二人分の席に横臥して、晝寝の夢をむさぼつて居た。我は窓外の日本海の眺を楽しんだ。海つきて新潟の平蕪が見え來たつた。稲作は青森が最も悪く、穂さへ出して居なかつた。秋田山形と來るに従つて段々よくなつた。今此地に來れば、囁目の田は稻穂を出し、穰々の秋近きとばかり、將にみのらんとして居る。我等の心明るくなるを覺えた。

想起すれば、七日の旅行中、一日として雨を見なかつたばかりでなく、快晴に恵ぐまれ、然も涼しい日のみであつた。舟に乗りても波は穏かであつた。我等は又途上多くの親切にも出會した。或驛長は、我々の爲旅館の斡旋をなしてくれた。又或驛長は、舟車の便益まで計つて呉れた。而して會員一同は、我儘を制して云はなかつた。又幹事は至れり盡くせりの斡旋をなした。旅は道連れ世は情といふ古い言葉を、しみじみ思出した。

かゝる思出盡きぬ中に、早我汽車は清水トンネルに入つて居た。此處は我等の曾遊の地、今長途の旅行を終へて過ぐれば、嘗ての旅は、單にピクニツクに過ぎざりしやう。熊谷を過ぐる頃、我等は我等の旅最終の食事を、食堂車に於て共にした。上野驛に着いたのは正に午後八時三十分だ。我等は感激と追懐の中に解散した。

(終り)

尙十和田湖班氏名は左の通りである

- | | | |
|-----|-------|-------|
| 班長 | 青木秀太郎 | 窪田耕三 |
| 會計係 | 吉田正美 | 高橋武三郎 |
| | 竹内知雄 | 志賀榮一 |
| | 佐藤三郎 | 辻榮三 |
| | 中澤吟平 | 寺師秋夫 |
| | | 會計係 |
| | | 記錄係 |

北九州を週りて

阿部善一郎

目次

一、旅行前記	一八
二、發足	一九
三、關門雜見	一九
四、工業日本の心臓に行く	一九
五、博多より長崎へ	一九
六、長崎の懐古趣味	二〇
七、雲仙を越えて	二〇
八、森の都熊本	二〇
九、大阿蘇登山行	二〇
十、極樂で地獄見物	二〇
十一、船旅	二〇
十二、旅を終りて	二〇

以上

北九州を週りて

一 旅行前記

旬日に近い遠國への旅。其れは時間的にも餘裕を持たぬ我々にとつて決して短かい旅とは云へない。云はゞ淡い空想、何時實現出來るか知れない夢ではなかつたか。それがこんな形式で思ひも設けぬ唐突さを以て實現しやうとは。遠地旅行、九州の旅！ 俄然、空疎な諦めは充實した待望と置換へられた。月餘に互る慎重な合議は最短期間に最高の能率を擧げ得べき最も効果的な旅行コースを作り上げた。班員は相互に相戒しめて健康を期すると共に相互扶助の精神で團體行動を終始することを誓つた。

特急券は出發數日前に早くも買求められて旅装は全く整へら



れカメラにはフィルムが充填され更に幾本かの豫備が鞆の中に用意された。されば出發前日講堂で支配人より細々旅行に關する御注意を承る頃には魂の大方は九州の空へ。

かくて我々は、はや明日を待つ許りである。天よ、幸に我々の行手に快晴と順風とを恵まれんことを。

昭和九年八月

北九州旅行第二班

班長 三好權次郎

比佐久馬

記録 阿部善一郎

遠藤傳

會計 夏目彦太郎

石井好郎

深山茂樹

山元彌助

高橋勇

千葉幾太郎

二、發 足

八月十一日(土) 晴時々曇り。風稍々強く暴風を豫想せしむるやうな氣配さへある。

自他共に大きな期待をかけられた一週間の旅行への序樂としては少し陰慘にすぎ朝の氣配である。「沖繩は昨日颱風に見舞はれた相だ。」とか「九州は今日あたりから暴風雨圏内に入るだらう。」など、有難くもないデマが頻りに飛ぶ。が燃ゆるやうな待望と、はち切れんばかりの元氣とは天候に對する懸念など跡形もなく一掃して了ふに充分である。

心せはしい晝食もそこ／＼に二通り行内への暇乞ひの御挨拶を済ませると三々五々東京驛へ集る。

零時四十五分發下關行特急櫻、赤切符ではあるが寢臺車の寬いだ座席も嬉しく、一同申し合せた様に携帯の浴衣に着換へほつとする。浴衣オンパレードである。定刻だ。雜然たる見送の人々の騒音が次第に遠ざかつてゆく。汽車がすべり出したのだ。案ぜられた天候も全く恢復して、今し白熱した眞晝の烈日が大東京の屋根瓦の起伏の上に、街路樹の茂みの上に、そしてベープメントの解けかゝつたアスファルトの上に燦々たる白光を降り注いでゐる。その中を逃れるやうに走りぬけた列車は一路濃緑に塗り潰された野を、山を、そして紺碧を湛へた海岸を息をもつがずに行程一千三百軒、二十時間

の長途を一氣に走り続ける。窓一ぱいの涼風を呑みながら。

三、關 門 雜 見

八月十二日(日) 快晴。頗る暑し。

蒸し暑い寢臺車の中に結んだ浅い夢は、しらくと東の水平線の明るんで来る頃もう誰かの喚び聲で破られる。睡れなかつたらしい寢呆化顔がずらりと窓際に並んで内海沿岸の夜明けにうつとり見惚れてゐる。徳山燃料廠の龐大な重油タンクが左の車窓に見え出した。食堂車で朝の食事の用意が出来たのを知らせて来る。大鹽田が見える。三田尻である。鹽を焼く煙であらう、不器用な形をした竈から立のぼる白い煙りがまだすつかり明け切れない濱邊に低くたなびいてゐる。あはだどしい汽車の窓から見るべく餘りに懐しくも繪畫的な景色である。急がぬ旅であつたら、など安價な低徊趣味に浸つてゐる間にもう終點の近いことを知らせて来る。

昨日東京を發つて二十時間目に始めて土を踏む。此處は本州の西端、下關である。關釜連絡船の大きな煙突がホームの屋根越しに黒煙を吐いてゐる。港町特有の臭ひが、しつとりと朝の街をこめてゐる。林立した帆柱を背景に客を呼ぶタクシーの群れが右往左往してゐる。家は低く道は狭い。獨り驛